Life のそばで生きていく

Life それは命、Life それは生活、Life それは人生

高知県立大学看護学部は、1952 年に高知女子大学家政学部看護学科として我が国で初めて 4 年制大学で看護学教育をスタートして 68 年、実践―教育―研究の連環の中で「看護学とは何か」を探究し、将来に拓かれた看護学の構築にチャレンジし続けています。大学院は、1998 年に看護学研究科（修士課程）としてスタートし、2014 年に看護学専攻博士前期課程・博士後期課程、博士課程をもつ研究科へと発展し、創設期から拡充・発展へと向かっています。

本年報は、看護学部、看護学研究科の教育活動・研究活動・社会連携活動を中心にまとめたものです。看護学部は、高知女子大学の“看護学を探究する教育”“看護実践を大切にする教育”“学生の個性を伸ばす教育”を大切にし、次代の看護専門職者の教育に力を注いでいます。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症により大学の教育、研究、社会連携活動、国際交流などの活動が大きな影響を受けました。4 月より遠隔授業が開始となりました。開始直後には様々なトラブルがありましたが、授業方法が変わっても学修到達目標は変えないで学生の「健康と安全、学ぶ権利を守る」努力をしてきました。例年行っている多くの活動は、中止・延期をせざる得ないものもありましたが、感染予防行動を最大限行い、新たな方法や Web を活用して学生と教職員、地域の方々と協働して取り組みました。

新ディプロマ・ポリシーを策定し、カリキュラム改革の基本方針にそって新カリキュラムの検討を進め、令和 4 年度から運用するプログラムを開発しました。演習や学内実習においては、効果的なシミュレーション演習が実施できる環境、遠隔でもシミュレーション教育に参加できる環境を整備し、学生の能動的学習を支援しました。学外での実習は臨地の状況を把握しつつ、柔軟に対応できるように方針を決めて取り組みました。また、遠隔授業の時期の新入生への配慮や経済的支援体制の充実を行い学生のニーズを重視した安全で豊かな学生生活の支援と、及びキャリア支援に努めました。学生は現状の中で将来について考え、看護専門職者としての自己を形成すると共に、広く社会に目を向け、立志社中の活動などにも積極的に取り組みました。

大学院では、災害に強い専門職育成に向けて災害看護副専攻プログラムの規程整備や、博士後期課程の学位プログラムとしての充実を図るために専攻共通科目の強化や災害・国際看護学の科目を新設しました。また、博士前期課程・後期課程ともにカリキュラムツリー等の整備を行い、学修プロセスの可視化や学位論文の審査基準に基づく学修成果の可視化や、修了生対象にカリキュラム評価を実施し、研究科の研究力、国際性・学際性の強化に取り組んでいます。

教育研究活動については、FD 活動を活発化し、令和 2 年度は特に教員の教育力を伸ばすことを目指して努力しました。また、研究環境促委員会を中心とした活動により、競争的外部資金に応募し、48 件の外部資金を獲得し、他大学の教員や実践家、大学院修了生と共同研究に取り組み、その成果の発信や、学内の戦略的研究推進プロジェクト研究に取り組んでいます。

社会連携活動では、高知医療センターとの包括的連携事業や健康長寿センターの活動に積極的に参画し、一般市民を対象とした健康文化の創造を目指す活動や、専門職者を対象とした活動を実施し、専門職者の方々と共に看護の質の向上に努めました。新型コロナ感染症の影響を受け、文部科学省職業実践能力育成プログラムや教育職員免許状更新講習などは中止となりましたが、寄付講座をはじめとする高知県と協働した事業、高知県看護協会との連携事業など、専門職者の教育に取り組みました。

令和 3 年度は、コロナ禍においても歩みを停めないで、伝統を継承しつつ新たなことにチャレンジし、さらに充実・発展していくよう、努力していきたいと考えています。

高知県立大学看護学部
学部長　藤田佐和

第１部

Life のそばで生きていく

Life それは命、 Life それは生活、 Life それは人生

はじめに

第１部 1

1. 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会　in Kochi　開催報告 1
2. 看護学部・看護学研究科の教育 5
   1） 看護学部の教育 5
   2） 看護学研究科の教育 10
   3） 遠隔授業推進プロジェクト 15
3. COVID-19 への対応 17
   1） FAQ プロジェクト 17
   2） コロナサポート活動（ころサポ） 18
   3） 対外支援 19
4. 学際的・国際的な学びを育てる教育環境 21
   1） 学部学生の国際化への支援 21
   2） 大学院生への支援 21
5. 教員の国際的活動 23
6. 災害看護をリードする活動 24
   1） 民間団体との連携 24
   2） オープンデータ活用防災ポータル「まちケア」 24
   3） 看護学部地域減災シリーズ 25
7. がんプロフェッショナル基盤推進プラン 27
8. 高校生のための公開講座 32
9. 高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業：看護・社会福祉連携事業 33
   1） 看護・社会福祉連携事業について 33
   2） 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ 36
10. 健康長寿センターにおける看護学部の活動 37
   1） 看護学部の活動方針 37
   2） 高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動（域学共生） 37
   3） 高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動 39
   4） 高知医療センターとの包括連携を推進する活動 43
   5） 高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動 43
   6） 高知県の健康長寿を研究する活動 44
11. 高知県立大学県民大学学生プロジェクト「立志社中」の採択と活動 45
   1） 健援隊プロジェクトの活動 45
   2） いけいけサロンの活動 45
   3） 「立志のたまご」グローバルクラブの活動 46
12. 学生のボランティア活動 47
   1） ボランティア活動への支援 47
   2） 高知医療センターでの活動 47
13. 戦略的研究プロジェクト推進費による活動 48
   テーマ２：地域課題の解決を目指す研究 48
   テーマ３：災害に関する課題の解決を目指す研究 49
   テーマ３：災害に関する課題の解決を目指す研究 50

テーマ４：地域や臨床、自治体、産業等の組織や実践者とともに課題解決を目指す共同研究 51
テーマ５【学長提案事業】授業の教育目標を評価し、教育の質の向上に資する研究 52
16. 看護学部ニュースレターの発行 53
17. 高知県看護協会との連携―生涯学習の拠点としての役割 54
1） 看護協会役員および委員 54
2） 研修会および講習会 54
18. 各領域の活動 57
＜がん看護学領域＞ 57
＜慢性期看護学領域＞ 60
＜急性期看護学領域＞ 62
＜小児看護学領域＞ 64
＜母性・助産看護学領域＞ 66
＜老人看護学領域＞ 67
＜精神看護学領域＞ 68
＜家族看護学領域＞ 70
＜在宅看護学領域＞ 72
＜地域看護学領域＞ 74
＜看護管理学領域＞ 78
＜共創看護学領域＞ 80
＜災害・国際看護学領域＞ 81
19. 高知女子大学看護学会 84
20. 卒業生・修了生への支援活動 85
1） 再就職や進学・就職・国家試験への支援 85
2） 高知県内の卒業生に対するキャリア支援 85
3） CNS・認定看護管理者認定等の支援 85
4） 看護学部同窓会活動 86

第２部 89

中野　綾美（教授） 89
藤田　佐和（教授） 91
大川　宣容（教授） 93
森下　安子（教授） 95
池田　光徳（教授） 97
時長　美希（教授） 99
長戸　和子（教授） 100
畦地　博子（教授） 102
池添　志乃（教授） 103
内田　雅子（教授） 105
瓜生　浩子（教授） 107
神原　咲子（大学院教授） 109
久保田　聡美（教授） 112
田井　雅子（教授） 114
竹崎　久美子（教授） 115

森本　悦子（教授）……117
山田　覚（教授）……119
内川　洋子（准教授）……121
渡邊　聡子（教授）……122
川上　理子（准教授）……123
木下　真里（准教授）……125
佐東　美緒（准教授）……127
嶋岡　暢希（准教授）……129
高谷　恭子（准教授）……130
藤代　知美（准教授）……132
有田　直子（講師）……133
井上　正隆（講師）……134
小澤　若菜（講師）……135
小原　弘子（講師）……136
山中　福子（講師）……138
岩﨑　順子（助教）……139
川本　美香（助教）……140
神家　ひとみ（助教）……142
源田　美香（助教）……143
坂元　綾（助教）……144
塩見　理香（助教）……146
庄司　麻美（助教）……147
髙橋　真紀子（助教）……148
竹中　英利子（助教）……149
瀧　めぐみ（助教）……150
田之頭　恵里（助教）……151
中井　あい（助教）……152
中井　美喜子（助教）……153
西内　舞里（助教）……154
藤村　眞紀（助教）……155
益　宏実（助教）……156
森本　紗磨美（助教）……157
森下　幸子（特任准教授）……158
三浦　由紀子（特任助教）……160
山本　かよ（特任助教）……161

1. 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会 in Kochi 開催報告

令和 2 年 6 月 27 日（土）「ライフ・デザインと多職種協働～主体的選択を地域で支える仕組みづくりに向けて～」をテーマとして、森下安子学術集会長のもと、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会を開催した。

第 25 回学術集会は COVID-19 の拡大および緊急事態宣言の発出を受け、学術集会関係者、理事会で対応を慎重に検討を重ね、参加者の安全と健康を第一に考え、会期を 1 日に短縮し、高知市文化プラザかるぽーとを会場として、プログラムを限定した Web 上の Live 開催とした。学術集会の Web 開催は、全国的にも前例が少ない状況にあり、看護学部においても、初めての試みであったが、看護学部教員がもっている Web 配信の知識や技術、また人的ネットワークを活用した総力戦で準備と運営を行った。また、卒業生や修了生、在校生、高知県下の看護職、セラピスト、薬剤師、ケアマネジャー等多職種の方々が、企画委員として協力して下さり、546 名の参加を得て盛況のうちに終了した。

1)組織

学術集会長：森下安子
実行委員長：川上理子
企画委員：阿部恭宜、井上加奈子、久保田聰美、源田美香、小原弘子、下元佳子、竹中英利子、辻真美、平山司樹、廣内一樹、森下幸子、山本詩帆、山本恵理、安岡しずか
実行委員：池添志乃、瓜生浩子、川本美香、神原咲子、木下真里、坂元綾、佐東美緒、塩見里香、中井美喜子、乾由美
テクニカルサポート：衛藤徹、大川宣容、藤田竜、山田覚
運営事務局：日本旅行　（下線が学外メンバー）

2)企画・運営

5 回の企画委員会の他、学内検討会や Web 上での Live 配信シミュレーションを定期的に開催して参加者が視聴しやすくするための機器の選択や配置、また、講師が参加者の反応を確認しながら講演を進めるための配信方法の工夫について検討を重ねた。

企画委員会の議事内容は以下の通りであった。

(1) 第 1 回企画委員会：2019 年 5 月 19 日（日）10:00～13:00

①高知市文化プラザかるぽーと内の使用会場
②準備スケジュール立案
③プログラム（学術集会テーマ、主要プログラム、講師）
④庶務・会計（予算、ポスター）
⑤その他

(2) 第 2 回企画委員会：2019 年 9 月 24 日（火）18:30～20:00

①プログラム（主要プログラム企画案、日程・時間配分案,使用会場配分案）
②編集（演題登録項目、演題募集要項）
③広報・渉外（趣意書、趣意書・寄付等の発送先、）
④庶務・会計（封筒のデザイン、事前参加登録等、開催案内パンフレット、ポスター、ホームページ、予算案）
⑤その他

(3) 第 3 回企画委員会：2020 年 2 月 1 日（日）9:00～11:00

①プログラム（主要プログラムの企画・座長、講師・シンポジストの依頼状況確認、タイムテーブル構成、交流集会の申込方法）
②編集（査読者候補、査読マニュアル、演題登録の呼びかけ）
③広報・渉外（懇親会の企画）
④庶務・会計（趣意書、広告・寄付金申込状況、ポスター配布、ホームページ更新、当日実行委員・ボランティア募集）
⑤その他

(4) 第 4 回企画委員会：2020 年 4 月 11 日（土）9:00～16:00

①プログラム（開催方法変更に伴うプログラム再編成、座長、講師・シンポジストの再依頼状況の確認、）
②編集（抄録集、追加演題登録状況）

③広報・渉外（広告掲載等の申込状況、企業展示・懇親会中止の決定と対応、
今後の広報活動）
④庶務・会計（事前参加登録状況、座長依頼・派遣依頼・座長再依頼文書、抄録送付文書、
ホームページ更新、会計報告）
⑤その他

（5）第 5 回企画運営委員会：2020 年 5 月 30 日（日）9:00～10:00
①プログラム（Web 1 会場と Web2 会場のタイムテーブル再構成、zoom ウェビナー設定、
事前登録者への周知、配信テスト）
②Web 開催に伴う感染予防対策
③学術集会当日の役割
④庶務・会計（事前参加登録状況、学会費納入の確認状況、会計報告、招待者の選定）
⑤広報（学会員へのニュースレターや他学会会員への広報）
⑥その他

3)プログラム

主要なプログラムを、以下のとおり編成した。

・学術集会長講演：主体的選択を地域・多職種で支える仕組みづくり
森下　安子（高知県立大学）
・特別講演Ⅰ：在宅ケアにおける多職種協働
春田　淳志（慶応義塾大学医学教育統括センター）
・特別講演Ⅱ：いのちの仕舞（しま）い
小笠原　望（医療法人鬨の会大野内科）
・教育講演Ⅰ：在宅ケアにおける多職種でかかわる服薬管理
川添　哲嗣（高知大学医学部附属病院）
・教育講演Ⅱ：保健医療福祉研究におけるテキストマイニングの活用
上野　栄一（福井大学医学部看護学科）
・シンポジウムⅠ：“高知家”の挑戦！人口減少・高齢化地域における
看取りまで支える地域包括ケアに向けた取り組み
下元　佳子（一般社団法人　ナチュラルハートフルケア　ネットワーク）
廣末　ゆか（中芸広域連合保健福祉課）
田口　貴文（医療法人臼井会　田野病院）
宮地　通弘（高知県地域福祉部地域福祉政策課）
・シンポジウムⅡ：“高知家”の提案！災害多発時代における多様な個からの総力戦
神原　咲子（高知県立大学大学院看護学研究科）
衛藤　徹（有限会社アゴラ・クリエーション）
片岡　奈津子（特定非営利法人そーる　そーる訪問看護ステーション）
・企業セミナー：在宅ケアのアウトカム評価方法とシステム開発および現場での利用方法
島内　節（日本在宅ケア教育研究センター）
芹田　三保（有限会社たくみケアサービス）
寺澤　保彦（株式会社コンダクト）
・ワークショップ：人材不足を救う・補う『ノーリフティングケア』
下元　佳子（一般社団法人 ナチュラルハートフルケア ネットワーク）
・一般演題：抄録集での紙上発表　124 演題

4)　Live 配信講演の様子

学術集会長講演

特別講演Ⅰ

特別講演Ⅱ

シンポジウムⅠ

5)成果

開催方法の変更で参加者の減少が懸念されたが、開催方法変更後も事前登録者数は増加し、全国から 546 名の参加があり、盛会のうちに終えることができた。

プログラムは、メインテーマ「ライフ・デザインと多職種協働～主体的選択を地域で支える仕組みづくりに向けて～」に沿って、多職種が在宅ケアにおける実践や研究の成果を共有して、新たな実践や研究に発展できるものとなるよう多職種でプログラム作成に取り組んだ。参加者のアンケート結果では、「多職種連携することの意味をあらためて実感できた」や「明日からの実践に活用できる内容がたくさんあった」という回答があり、それぞれの職種の専門性を生かしつつ連携するための取り組みや、研究成果がもたらす、実践への繋がりを示すことができた。また、コロナ禍で新たな取り組みとなった Web 上の Live 配信については、「場所が離れていても気軽に参加することができた」や、「リアルタイムのアンケートで講師との距離が近く感じた」という感想が多数あり、Live 配信シミュレーションで定期的な練習と、講師との密な打ち合わせにより、Web 上の Live 配信の利点を最大限に生かすことができた。一方、「音が聞き取りづらい時間があった」という回答もあり、安定した音環境の調整は課題である。

決算については、Web 開催となり、当初の見込みより通信費等必要となったが、会場費が抑えられたこと、参加者を予定数よりも多く得られたことにより、損失が生じることなく運営できた。

2. 看護学部・看護学研究科の教育

1) 看護学部の教育

(1) カリキュラムの検討

①検討の概要

看護学部では平成 30 年度より、大学の教育改革を推進し、教育の質保証を図るため、今後の高等教育の将来像や看護職者に求められる能力等を見据え、現行のカリキュラムや教育内容・方法の見直しを進めてきた。令和 2 年度は、昨年度、看護学部の全教員を対象に実施した新カリキュラム策定に向けた意見集約のための調査結果も踏まえて、さらに検討を進めた。

昨年度の時点では令和 3 年度からのカリキュラム改定を目指していたが、看護基礎教育のカリキュラムを定める保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正が令和 4 年度入学生から適用されることになったことから、これに合わせて看護学部専門教育科目を新たなカリキュラムに改定することとし、準備を進めた。策定した新カリキュラム案について、文部科学省への事前相談を経てさらに検討を行い、令和 3 年度内に承認を受けるため文部科学省に申請を行うことについて、大学内の承認を得た。

②カリキュラム改定の方針

社会の変化に伴い、高等教育や看護学士課程教育のあり方は見直しを迫られている。高等教育においては、今後の社会変化の方向性を見据えた人材育成や能力の強化を図ること、学修者本位の教育の実現を図るための教育改善を行うこと等が求められている。また、少子高齢社会の進行、医療の質の重視、地域における包括的なケアの推進などの社会の流れを背景に、看護師・保健師・助産師にはより一層の幅広い役割を担うことが求められており、看護系大学には優れた看護系人材を養成するための教育の充実・強化が必要とされている。

そこで、看護学部では、「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ（中央教育審議会大学分科会将来構想部会、H30.6.28）」、「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）（中央教育審議会、H30.11.26）」、「教学マネジメント指針（案）（中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会、R1.11.21）」、「看護学士課程におけるコアコンピテンシー・卒業時到達目標(日本看護系大学協議会、H30.6)」等の提言を踏まえ、カリキュラムの見直しを行ってきた。その基本方針として、ⅰディプロマ・ポリシーに定められた学修目標を達成するための授業科目を不足なく設定する、ⅱこれからの社会及び看護職者に求められる人材に必要な能力を修得できる授業科目を設定する、ⅲ密度の濃い主体的な学修を可能とするために、授業科目の精選・統合、学生が同時に履修する授業科目数の絞込みを行う、ⅳ「学修者個々人の可能性を最大限に伸長する教育」が実現できるよう教育内容を見直す、の 4 点を掲げ、教育内容の充実を図ることとした。

③カリキュラムの具体的な変更内容

上記の基本方針に沿って、今回のカリキュラム改定では主に下記の 4 点を行うこととした。

ⅰ ディプロマ・ポリシーに定められた学修目標を達成するための授業科目の設定
ⅱ 医学的知識と看護の統合および臨床判断の強化
ⅲ 主体的な学修を可能とするための授業科目の内容の精選および時間数の絞り込み
ⅳ 今後の社会および看護に求められる人材に必要な能力を修得できる授業科目の設定

具体的な変更内容は下記のとおりである。

◎科目の追加

教育内容の見直しおよび科目の再編等により、新たに下記の科目を追加する。

必修科目：「病態と治療Ⅲ」「生活援助論」「フィジカルアセスメント」「治療援助論」「看護実践能力開発実習Ⅰ」「総合看護実習Ⅰ」「総合看護実習Ⅱ」

選択科目：「家族看護実習」「看護実践論Ⅰ」「看護実践論Ⅱ」「看護実践論Ⅲ」「看護実践論Ⅳ」

◎科目の削除

科目再編および新設科目への移行等に伴い、下記の科目を削除する。

必修科目：「母性学」「生活援助論Ⅰ」「生活援助論Ⅱ」「生活援助論Ⅲ」「フィジカルアセスメントⅠ」「フィジカルアセスメントⅡ」「治療援助論Ⅰ」「治療援助論Ⅱ」「総合看護実習」

選択科目：「グローバルヘルス」「看護セミナーⅥ」「母性・助産看護実践論」「精神看護実践論」「急性期看護実践論」「慢性期看護実践論」「小児看護実践論」「地域看護実践論」「老人看護実践論」「臨床看護実践論」

◎必修・選択区分の変更

ディプロマ・ポリシーに定められた学修目標を達成するための授業科目の強化を図るため、「公衆衛生学」「災害看護実践論」「グローバル社会と看護Ⅰ」を必修化する。

◎科目単位数の変更

カリキュラム全体の適正な単位数配分のため、「健康管理論」「看護基盤実習」「治療と看護」の単位数を変更する。

◎1 単位当たりの時間数の変更

授業内容の精選と見直し、科目間の内容重複の整理により、下記の科目の時間数を変更する。

必修科目：「人間と看護」「健康と看護」「症状と看護」「老人の健康と看護」「精神の健康と看護」「小児の健康と看護」「母性看護対象論」「看護基盤実習」「在宅看護実習」「看護実践能力開発実習」

選択科目：「看護援助の動向と課題」「看護管理の動向と課題」「急性期看護の動向と課題」「慢性期看護の動向と課題」「老人看護の動向と課題」「精神看護の動向と課題」「小児看護の動向と課題」「母性看護の動向と課題」「助産看護の動向と課題」「在宅看護の動向と課題」「地域看護の動向と課題」「バイオロジカルナーシング」

◎科目の名称変更

授業内容の見直しに伴い、「心理学理論と心理的支援」の科目名称を変更する。

また、カリキュラム全体の統一性を図るため、「母性看護対象論」「看護実践能力開発実習」「臨床看護論Ⅰ（人間の自立と QOL）」「臨床看護論Ⅱ（家族と健康）」「臨床看護論Ⅲ（子どもの発達と健康）」「臨床看護論Ⅳ（慢性の病と生活）」「臨床看護論Ⅴ（健康と病気の探究）」「臨床看護論Ⅵ（看護と倫理的課題）」の科目名称を変更する。

④新カリキュラムへの対応（教育の質保証）

学生の学習意欲を引き出し、個々の可能性を最大限に伸長する教育や密度の濃い主体的な学修を実現できるよう、より効果的な教育方法を工夫し、学生が主体的に学べる環境やしくみづくりを行う。具体的には、ⅰ学修者にとっての「知識の共通基盤」を作るという視点に立ち、「何を学び、身に付けることができるのか」を中軸に据えた高等教育への転換を図るための教員の意識改革、ⅱ学生が主体的に学べるような事前学習、自己学習の工夫、しくみづくり、ⅲ自己学習時間を確保できるような時間割の工夫、ⅳ効果的な自己学習のための環境・ツールの整備と活用、などである。

また、精選した教育内容を着実に定着させることも重要であることから、学部内で科目群間のつながりや積み上げを意識した目標設定と共有を行い、既習の知識や技術の活用を促進する。具体的には、ⅰルーブリックの作成と共有、ⅱ科目や領域を超えて教育方法を検討するためのしくみづくり、ⅲ学部内で互いに教授内容を共有、活用できるしくみづくり、などを行う。

さらに、新カリキュラムを効果的に運用し、教育の質保証を図るために、継続的にカリキュラムの自己点検・評価とそれに基づく改善を行うための組織・体制をつくる。これにより、組織的にPDCAサイクルを回して教育改善に取り組むしくみをつくる。

(2) 遠隔授業の取り組み

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、前期の授業開始を約2週間延期し、UOKLMS（Moodleを使ったラーニングマネジメントシステム）等で教材を配信する遠隔授業で実施することになった。UOKLMSはこれまでにも教員対象の研修会が行われ部分的に活用されていたが、多くの学生や教員は実際に使用したことがほとんどない状態であった。そのようななかでも、学生の学びを止めないために、試行錯誤しながら遠隔授業に取り組んだ。

①学生への受講支援

授業開始までの準備として、学生に対しては教務課が中心となって、UOKLMSの使用練習や説明・相談会が行われた。また、遠隔授業に関する困りごとに対応する情報関連相談窓口の開設（メール対応）、自宅にインターネット接続できる環境が準備できない学生に対する情報演習室のパソコン予約利用などが周知された。看護学部では、教務課と連携してUOKLMSでのテスト課題の提出状況を把握したり、独自に学生の受講環境の調査を行うなどして、学生の準備状況を把握した。また、受講にあたり手元に紙媒体での資料が不可欠な科目については、印刷した資料を受講者全員に郵送した。

遠隔授業開始後は、全学教務委員会で各学部での相談や意見を集約し、その解決にあたった。特に、授業時間帯にMoodleにアクセスできない、途中で接続が切れるという事案が多く発生し、Moodleサーバーの同時アクセス数を65から600に増やすことで解消した。また、音声を入れた講義スライドの音声が聞こえない、資料が開かない、Moodle に入れなくなったといった相談もあった。看護学部では、遠隔授業開始1週間後に全学生を対象に受講状況調査を行い（回答者328名、回収率 99.4%）、受講方法や不具合の有無を把握した。その結果、受講方法は、自宅等のパソコンが 86.0%と最も多く、スマートフォン 7.3%、タブレット 2.1%、情報演習室のパソコン4.6%であった。ネットワーク環境については、87.5%が自宅等で制限なく使用できていたが、それ以外は自宅等にネットワーク環境がないか、ネットワークを使用できても月の使用上限を超えるという課題を抱えていた。また、1週間の間に受講に何らかの不具合や問題があったのは46.6%、受講する上で困っていることがあると回答したのは18.3%であった。その内容としては、パソコンの回線・接続の不具合、ファイル・音声・動画の不具合、ネットワーク環境の課題、受講期間や時間、授業資料、課題提出に関することなどがあり、日中はMoodle接続がスムーズにできず夕方から夜間に受講している、不具合が生じるためパソコンとスマートフォンを併用して受講している、パソコンの操作等に不慣れだがすぐに聞ける人がおらず不安である、自宅にプリンターがなくコンビニや大学で印刷しているため感染リスクと経済的負担がある、授業内容を 90 分で終わらせることができない、課題が多く予習や復習が追いつかない、どのように学習したらよいかわからず身についているか不安である、質問したいがしづらい、課題が提出できたか不明瞭な場合があり不安である、実家におり教科書を購入できていないため困っている、といった状況がみられた。要望としては、前日までに授業資料を掲載してほしい、授業資料の閲覧可能期間や受講確認期間を延長してほしい、音声付きの講義の方がわかりやすい、講義音声と別に資料も掲載

してほしい、音声はダウンロードしやすいように分割してほしい、音声は操作がしやすい mp3 形式がよい、印刷した授業資料を自宅に郵送するか大学に取りに行けるようにしてほしい、提出した課題やレポートにできればフィードバックがほしい、といった意見があった。これらの結果は教員に周知し、可能な範囲で改善につなげていった。また、不具合や困りごとを記載していた学生には、教務委員から個別にメッセージを送信し、フォローアップを行った。

6 月下旬からは、入構者数を制限して一部で対面授業が可能となった。看護学部では演習科目や非常勤講師による科目を優先的に対面授業とし、ほとんどの科目で遠隔授業が継続された。それにより、学生は遠隔授業と対面授業のスケジュール調整を行いながら、計画的に受講することが求められた。遠隔授業では各回 1 週間程度の受講期間を設けていたが、期間内に受講できない学生や課題提出を忘れる学生が出てきたため、科目ごとに各学生の受講状況や意見を把握しながら、気がかりな学生には個別にサポートを行うなどの対応が必要であった。学年担当を中心に学生の声を拾い、各科目担当教員から適宜受講状況等の情報を得ながら、対応にあたった。

その他、受講の支援として、前期中は印刷した授業資料の配布を 2 回に分けて行った。また、パソコンを所持していない学生への一時的な貸出用のノートパソコンが看護学部に 8 台配置され、2 名の学生に貸出を行った。

②教員への支援と教員の取り組み

教員への支援として、遠隔授業開始前には Moodle の使用方法や授業教材の作成方法に関する研修会が行われ、看護学部からは 30 名が参加した。看護学部内では、授業資料の掲載や受講確認の方法等のルールを決め教員に周知する、講義録音のための部屋を確保するなどした。

遠隔授業で活用できる教材の整備にも取り組んだ。看護学部で以前より使用していた映像配信システム「VISUALEARN クラウド（医学映像教育センター）」は、同時アクセス 50ID の設定であったことから、授業時間内につながらないという状況が生じたため、同時アクセス 100ID へと契約を変更し、問題が解消された。また、新型コロナウイルス感染症蔓延下での教育支援として、各社から教材の無料公開や著作物利用の無償許諾が行われたため、その情報を収集し、必要な手続きや教員への紹介を行った。動画教材配信サービスの「e ナーストレーナー（医学書院）」「Educational Video Online；EVO（丸善出版）」「ナーシングチャンネル（京都科学）」は、遠隔授業や学内実習において活用された。

各教員はそれぞれに遠隔授業や教材作成方法についての情報を収集し、学生が効果的に学べるよう工夫を行った。Moodle に授業資料を掲載するだけでなく、フィードバック機能や課題提出機能、小テスト、フォーラム機能、チャット機能などを活用し、できるだけ双方向のやり取りができるように努めた。また、一部の科目では、Moodle を活用して期末試験を実施した。

前期授業が終わった時点で、看護学部の教員より振り返りの意見を収集した。遠隔授業で困った点や課題だと感じた点としては、効果的な授業展開や教材作成の難しさ、学生の負担への懸念、教員側の負担に関する意見が出された。良かった点や効果的だと感じた点としては、授業内容の厳選、効果的な授業展開方法の工夫、遠隔授業の効果に関する意見があり、教員も学生も手探り状態であったが、授業の準備、実施、反省、改善のサイクルを回すことで質の向上につながっているだけでなく、遠隔授業のメリットを感じるようになっていることがうかがえた。

③遠隔授業の効果と課題

1 年間の遠隔授業を通して、教員が”教える”授業から、学生自身が”学び取る”授業への転換がなされ、学生には主体的に学習に取り組む意識が高まった。学生からは、講義を途中で止めたり繰り返し視聴したりできるので自分のペースで学べる、集中して学習できるといった意見があり、授業内容を理解しようと努力している様子がうかがえた。結果的に、複数の教員が、遠隔授業の

方が知識の定着ができ学習効果があったと評価していた。また、教員も本当に伝えるべきことを絞り、どうすればより学びが深まるかを考え、様々な学習方法を取り入れて工夫を行っており、授業改善にもつながっている。

一方で、遠隔授業は学生自身でスケジュール管理を行い、学習調整をすることが求められる。自律性が高まる学生もいるが、受講や課題提出が間に合わない学生、講義視聴だけでは理解が追いつかない学生、他の学生の学習状況が見えず不安になる学生もおり、個々の学生の状況を把握しながら個別にサポートしていく必要がある。遠隔授業では、タイムリーな説明や励まし、フィードバックなどの働きかけを行い、教師が身近にいる存在になることが鍵だとされる。教材作成にとどまらず、学生の自律性や学習意欲を高める働きかけを適切に行うことも重要である。

次年度も感染対策のため一部では遠隔授業が継続すると考えられるが、学習効果の観点からも、Moodle の活用は有用である。e ラーニングや今年度培ったスキルを活かして、今後もより良い教育方法の開発に取り組んでいきたいと考える。

(3) 教育環境の整備：看護実践開発実習室等の整備

Active Learning に対応できるように、平成 28 年度から各実習室の整備(6 ヵ年計画 5 年目)を行っている。令和 2 年度は、看護実践開発室Ⅵと看護実践開発室Ⅶの整備を行った。

看護実践開発実習室Ⅵは、母性・助産看護科目の演習で主に利用されている。演習項目は妊産褥婦の観察・援助技術や分娩介助技術、新生児の観察技術や沐浴、新生児蘇生法など様々であり、その授業設計に応じて演習室の設定を変更している。今回、360℃撮影可能な天井カメラを 2 カ所に設置し、操作パネル、可動式のモニター、ブルーレイデッキを増設した。これによって、演習内容にかかわらず速やかに動画撮影と配信が可能となり、教員のデモンストレーションの提示や、学生が実施するシミュレーション動画の共有が行え、効果的な授業展開が可能になった。また、今年度は看護実践開発実習室Ⅵに周産期シミュレーターを導入した。このシミュレーターは切迫早産や妊娠高血圧症など、日常的によく出会う妊産婦を想定したシナリオを装備しており、臨床では受け持ちが難しい対象を学内で学ぶことができるようになった。また分娩時の状況設定で活用している高機能シミュレーターは導入後 5 年が経過したためメンテナンスを行い、機能の維持を図った。

看護実践開発室Ⅶは、各自が DVD で手順を確認しながら演習に取り組めるように天井にモニターを配置した。また、演習中の様子を録画しデブリーフィングに活用できるように、天井 2 か所にカメラを配置した。小児看護実習前の演習では、小児看護技術の修得、シミュレーション教育に力を入れており、今後の機材の有効な活用が期待できる。また、小児看護実践論では、高機能シミュレーターを活用した小児急性期看護について学んでいる。実習では、このような小児急性期看護を見学・実践する機会がないため、知識をどのように活用できるかを学ぶ貴重な機会となる。令和３年度以降は、整備した教育環境を効果的に活用し、学生の積極的な授業・演習への参画を促す予定である。

また、看護実践開発実習室Ⅷについても、設備の老朽化への対応と、演習等でより柔軟な活用か可能となるよう整備を行った。天井カメラを 3 台に増設し、プロジェクターの新設、スクリーンの配置の変更を行い、ロールプレイなどの演習時の様子が室内の全方向から録画できるようにした。

2)　看護学研究科の教育

令和 2 年度は、看護学研究科看護学専攻博士前期課程および博士後期課程、共同災害看護学専攻博士課程の 2 専攻 3 課程をもつ研究科として改組後、7 年目を迎えた。

入学式後、3 課程合同オリエンテーションと、課程別オリエンテーションを実施し、スタートした。以下、各課程で本年度取り組んだことを中心に記載する。

（1）看護学専攻博士前期課程

博士前期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本研究科の課程の目的、博士前期課程の目的、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成方針）、ディプロマ・ポリシー（修了・学位授与に関する方針）に沿って活動を行った。教育課程においては、大学院授業科目の水準の決定とナンバリング、災害・国際看護学領域、母性看護学領域を令和 3 年度に開設することに伴いカリキュラム・ポリシーの変更、履修モデルの整備、令和 3 年度の新設領域を含めた全領域のカリキュラムマップの整備、学位論文ルーブリックの作成、修了生に対するディプロマ・ポリシーの評価に関する調査、国際交流委員会と連携し国際性・学際性への強化を行った。

①大学院授業科目の水準の決定とナンバリング

看護学専攻博士前期課程では専攻共通科目ならびに領域専門科目の水準を 500 と 600 とし、全授業科目の水準ならびにナンバリングを行った。

②カリキュラムの整備

『母性看護学領域』『災害・国際看護学領域』の令和 3 年度開設に伴い、カリキュラム・ポリシーに新設領域を加えた。学生自身が自らの能力を向上するための講義選択の目安として活用することを目指し、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、科目の水準に沿ってカリキュラムマップならびにカリキュラムツリーを整備した。次年度はカリキュラムマップをもとにディプロマ・ポリシーの能力と科目の関連を分析・評価し、カリキュラム上の課題を検討し、カリキュラムの充実を図る必要がある。

③修士論文ルーブリックの整備

学生が修士論文の作成のプロセスにおける到達状況を可視化できるように、令和元年度に作成した修士論文審査基準に基づき、評価項目 7 つと評価基準 4 段階から成る修士論文ルーブリックを作成した。次年度はルーブリックを活用して教員と学生の目標到達を可視化し、教員の研究指導と学生の主体的な学びに役立てる必要がある。

④授業評価

授業(講義・演習、実習、研究)の質向上、質保証を目的として、大学院(看護学研究科、人間生活学研究科)において、学生による授業評価を行った。看護学研究科看護学専攻においては、Moodle で調査を行い、調査期間を延長して回答率をあげるよう努めた。講義・演習科目についての評価はのべ 64 名が回答し、総合的な満足について「非常にそう思う」42 名(65.6%)、「そう思う」15 名(23.44%)、「どちらとも言えない」6 名(9.38%)、「そう思わない」1 名（1.56%）で、平均 4.53 であった。実習科目についてはのべ 17 名が回答し、総合的な満足について「非常にそう思う」10 名(58.8%)、「そう思う」3 名(17.6%)、「どちらとも言えない」3 名(17.6%)、「そう思わない」1 名（5.9%）で、平均 4.29 であった。研究科目に関しては 10 名が回答し、総合的な満足で「非常にそう思う」6 名(60%)、「そう思う」4 名(40%)で、平均 4.6 であった。授業評価の結果について各担当教員へ返却し、授業の質向上、質保証につなげられるようにした。

⑤ディプロマ・ポリシーの評価

令和 2 年度の修了生を対象に本研究科の 6 つのディプロマ・ポリシー（DP）を 5 項目・4 段階で評価する調査を行なった。17 名の修了生のうち 10 名から回答（回答率 59%）があり、教育への満足度全体（5 段階評価）の平均は 4.23 で、昨年度の 3.64 を上回った。各 DP 全体の平均値は、DP1「個人ー家族ー地域を多角的、複眼的視点で捉え、看護専門領域に関する理論、関連領域の知識・技術、高い倫理観を基盤として、エビデンスに基づく高度な看護ができる能力を有している」が 2.32、DP2「地域社会や生活環境の中で、人々が自立して健康生活を営むことができるように、地域の人々と協働して、健康を促進する地域文化の形成、発展に貢献する能力を有している」が 2.32、DP3「社会のニーズや健康に関する課題に積極的に関与し、他の職種の専門性を尊重した上で協働しながら社会状況に対応する方略を開発する能力を有している」が 2.30、DP4「学際的視点をふまえて看護実践の場、教育や政策の場で看護現象を研究的視点でとらえ、倫理的思考力、リーダーシップとマネジメント力を発揮して変革者として貢献する能力を有している」が 2.26、DP5「看護実践を支える科学的・哲学的基盤を理解し、看護研究・看護教育を通して、看護学の体系化とその発展に貢献できる教育ー研究能力を有している」が 2.38、DP6「国際的動向や多様な文化に関する幅広い知識や最新の情報を備えて、看護をグローバルな視点から捉え、看護の普遍性の追及と体系化に貢献できる能力を有している」が 2.24 で、DP 全体の平均値は 2.32（令和元年度 2.25）あった。満足度全体の評価は高い一方、すべての DP の平均値は 2.0 台で令和元年度よりは高くなったものの、DP の到達に対する自己評価は全般的に低かった。次年度は評価結果を分析し、カリキュラム評価、教育の質保証につなげる。

⑥国際性・学際性強化への取り組み

大学院共通科目の「グローバルヘルス論」を 2 名が受講した。疫学研究方法は、国際医療福祉大学の Ngatu Nlandu Roger 先生が非常勤講師として講義を担当した。国際交流委員会企画による特別講義を Zoom で開催し、学生が参加できるようにした。次年度も引き続き国際性･学際性を国際交流委員会と連携し強化する。

日程	講師	トピック
12 月 16 日	Yann-Fen C. Chao 教授（弘光科技大学看護学部元学部長）	「COVID-19 in TAIWAN」
12 月 18 日	所和香子氏（カナダ　ヴィクトリアロイヤル・ジュビリー病院 NP）	「COVID-19 in CANADA」
2 月 22 日、3 月 8 日、3 月 15 日、3 月 22 日､3 月 29 日	所和香子氏（カナダ　ヴィクトリアロイヤル・ジュビリー病院 NP）	QI（Quality improvement）プロジェクト

(2) 看護学専攻博士後期課程

博士後期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本研究科の目的、および博士後期課程の目的に沿って活動を行った。また、アドミッション・ポリシー(入学者受け入れ方針)、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成方針）、ディプロマ・ポリシー（修了・学位授与に関する方針）のもと活動した。

①研究・教育力育成強化の取組み

i. 授業評価について

授業の質の向上、質保証を目的として、授業評価を行った。課程の教務委員が年度はじめに学生に対してオリエンテーションを行い、目的および方法、内容等について説明した。今年度は、専攻共通科目 7 科目に加え、今年度から必修科目となった専攻専門科目および研究支援科目について、受講者全員に対して実施した。今後、毎年の評価結果を積み重ね、評価内容を分析し、授業の質向上、質保証に繋げていく。尚、今年度の評価結果の概要は、講義内容に関しては 5 段階評価で 4.50、講義方法は 4.53、学生の自己評価は 4.43、総合評価は 4.61 であり、前年に比べ若干低くなったが、全体的に見るとどれも 4 を超えており良好であった。

ii. リサーチ・アシスタント(RA)

リサーチ・アシスタント制度は、博士後期課程に在籍する学生が、本学教員の研究や研究プロジェクト等に参画し、研究のアシスタントの役割を担当することを通して、研究力の向上を図ることを目的として、平成 23 年度から導入されたものである。今年度は、博士後期課程の学生にフルタイムの学生がいたため、RA としての役割を担った者がいた。RA に参加した院生にとっては、教員の研究活動への参画を通して、研究手法を学習する機会となり、資料等の作成を通してグローバルな視点から看護を再考する良い機会となるため、学生の状況が合えばこれまでと同様に今後もおこなって行きたい。

iii. 海外での活動支援、国際的な研究の推進

学術的な基盤を発展させるため、グローバルスタンダードで専門領域の知識や技術を研究開発し、国内外の専門職と連携して、国際的に活躍できる人材の育成に力を注いでいく必要がある。また、国際性や学際性を修得するためには、国際学会への参加・発表・国際的なセミナー・ワークショップ等への積極的な参加が有用かつ必要であり、そのため研究助成基金により経済的支援を行っている。今年度は、COVID-19 の拡大により、国際的な活動は行われなかった。

iv. 国際性・学際性の強化

今年度は、世界的な COVID-19 の拡大の影響を受けて、留学生の受験が難しい状況となった。文部科学省からも、「大学等を受験する目的での外国人入学志願者の来日について(【重要】国際的な人の往来の再開（11 月 1 日～）等について)が出され、本学でも前期課程に海外からの受験があったため、文部科学省の方針に従い対応した。このことにより、大学院の海外からの受験に関して新たな方法を検討する機会となり、今後海外からの受験生を受け入れる自由度の拡大が期待できる。

(3) 共同災害看護学専攻博士課程（DNGL）

前々年度に文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムの助成が終了したが、令和 2 年度はこれまで通り、5 大学による共同教育課程運営委員会を軸に、博士課程の運営を行った。これまで蓄積して来た DNGL の資産を活用しつつ、5 大学協働して新しい災害看護学教育を継続することを検討し、令和 3 年度から開始されるコンソーシアムによる教育の検討を行った。

また、プログラム終了に伴い、令和 3 年度から災害・国際看護学領域を区分制博士課程で実現することとなり、広報活動を行うとともに、具体的に博士前期課程および博士後期課程の入学試験を実施し、両課程とも次年度入学者を得ている。

①新しい災害・国際看護学領域の創造

5 大学の学長会議で方向性を検討し、具体的に令和 3 年度から新しい形で、5 大学協働して災害看護学の教育を継続することを検討した。概要は以下の通りである。

i. 教育目的

教育目的を、これまでの DNGL の成果を踏まえつつ、以下の通り検討した。

災害・国際看護学領域(博士前期・後期課程)では、国内外で頻発する災害および近い将来に発生が予想される南海トラフの巨大地震、更には自然災害だけではなく、テロや新型インフルエンザなどの対策も急務であり、その為には、 国際力そして学際力も備えたイノベイティブな人材育成が必要であると考えている。そこで人間の安全保障を理念とし、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、国際的学際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全･安心自立に寄与する災害看護グローバルリーダーを育成する。

本コースの特徴は、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムにおいて、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学とともに蓄積して来た災害および災害看護に関する資産を有効活用し、それぞれの大学院の強みを活かしたコンソーシアム科目を取り入れ、グローバルな授業展開をすることである。

ii. 本学のカリキュラム

a. 博士前期課程

・研究コース

<看護学専攻共通科目>

看護理論と実践、看護研究と実践、看護理論と研究Ⅰ、看護理論と研究Ⅱ、看護倫理、グローバルヘルス論(大学院共通科目)、データ分析方法論Ⅰ、疫学研究方法論

<災害・国際看護学: 専門科目>

災害看護論、グローバル社会看護論、災害・国際看護方法論、感染症看護セミナー、環境衛生看護セミナー、共生社会看護セミナー、人道支援看護セミナー、災害看護管理セミナー、災害・国際看護学研究方法Ⅰ、災害・国際看護学研究方法Ⅱ

これらの領域専門科目は、実践リーダーコースの学生も受講できるように、研究コースの学生とも調整しながら、開講日程等を配慮する。

<災害・国際看護学: コンソーシアム科目>

災害看護活動論（準備期）(高知県立大学)、環境防災学(高知県立大学)、災害グローバル看護実践論(兵庫県立大学)、災害看護フィールドワークⅠ(兵庫県立大学)、災害看護フィールドワークⅡ(兵庫県立大学)、看護政策学特論(東京医科歯科大学)、災害看護学特論Ⅰ(東京医科歯科大学)、災害マネジメント(千葉大学)、災害看護活動論（復旧・復興）(千葉大学)、災害時専門職連携演習(千葉大学)、赤十字概論Ⅱ（国際人道法含）(日本赤十字看護大学)、災害看護学特講Ⅲ(日本赤十字看護大学)

・実践リーダーコース

<地域保健学領域>

災害・国際看護学領域は、実践リーダーコースにおいては「地域保健学」に位置付ける

災害・国際看護ケア研究、地域保健学専門演習、地域保健学研究方法Ⅰ、地域保健学研究方法Ⅱ

b. 博士後期課

<専攻共通科目>

理論看護学Ⅰ、理論看護学Ⅱ、看護学研究方法Ⅰ、看護学研究方法Ⅱ、看護倫理学

イノベーション看護学、国際看護学、医学研究方法論、インディペンデントスタディ、プロフェッショナルライティング

<専攻専門科目>
災害・国際看護学Ⅰ、災害・国際看護学Ⅱ
<研究支援科目>
看護学特別研究Ⅰ、看護学特別研究Ⅱ、看護学特別研究Ⅲ

②国際的・学際的科学活動の推進
令和 2 年度は、COVID-19 感染症拡大のため、海外の活動はなかった。

③これまでの教育課程の継続と進化
前年度の博士教育課程リーディングプログラム終了に伴い、旧カリキュラムを運用しつつ、令和元年度から新カリキュラムに移行して、今後の教育の継続に対応した。

i.新しい遠隔授業
博士教育課程リーディングプログラムが開始された当初は、通信ネットワークの安全性や TV 会議システムの安定性の課題があり、DNGL プログラムでは、専用回線を用いて、高規格の TV 会議システムで授業や会議をスタートさせた。プログラムが終了し、効率的に授業を継続する必要があったこと、および通信ネットワークの発達やパソコンベースで利用できる TV 会議システムの開発などにより、これまでの特殊な遠隔授業の環境を見直す機会となった。更に、COVID-19 の拡大により、5 大学の学生の中には、地域性により自宅待機となる者もおり、パーソナルにネットワークを介して授業に参加する必要性もあった。この様な状況により、今後の遠隔授業環境の検討も含め、次世代の遠隔授業の環境の検討を行った。その結果、経費の視点でこれまでと一桁価格が異なる、コストパーフォーマンスに長けたシステムを構成することができ、令和 3 年度からは新 TV 会議システムで、これまでとほぼ同様の機能を利用することができるようになった。

ii. 副専攻プログラムの検討
災害･国際看護学領域以外の学生を対象とした､災害看護副専攻プログラムの準備をした。このプログラムは､DNGL のコンソーシアム科目を利用して､以下の履修をすることにより､副専攻の認定証を交付するものである。
履修科目は、看護学研究科の共通科目である「グローバルヘルス論(1 単位)」と「疫学研究方法論(1 単位)」のどちらか、およびコンソーシアム科目（本学の領域科目である「災害看護活動論(準備期) (2 単位)」と「環境防災学(1 単位)」もコンソーシアム科目に位置付けられている）および「環境衛生看護セミナー（1 単位）」「人道支援看護セミナー（1 単位）」「災害看護管理セミナー（1 単位）」の中から 9 単位以上を取得すると、「副専攻(災害看護)認定証」が交付される。
これにより、災害・国際看護学領域以外の学生が災害看護学について学ぶことで、災害に強い高度専門職者、研究者の育成が可能となる。

iii. 新専攻における「Disaster Nursing Global Leader」の付与
共同災害看護学専攻を所定の条件を満たして修了した場合、学位記に「災害看護グローバルリーダー養成プログラム(Disaster Nursing Global Leader)」を修了したことを付記することになっているが、令和 3 年度から開始される看護学専攻の博士後期課程においても、以下の条件を満たせば同様に付記されることを検討し、高知県立大学大学院学位規定を改訂した(施行日は、令和 3 年 4 月 1 日)。

(学位)

第 2 条　3 項

看護学専攻博士後期課程において「災害・国際看護学分野」を専攻し修了に必要な単位を履修し、さらに、高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学及び日本赤十字看護大学の 5 大学院によるコンソーシアム科目 10 単位以上を履修した者の学位記には、「災害看護グローバルリーダー養成プログラム(Disaster Nursing Global Leader)」を修了したことを付記する。

(4)遠隔授業の取り組み

看護学研究科には県外から通学してくる学生、医療機関で働く学生など多様な学生が在籍している。新年度のオリエンテーション前に、学生にインターネット環境を確認して、遠隔でのオリエンテーション、そして授業ができるように準備を行った。Zoom に関するオリエンテーション資料の作成や、使用方法に関するオリエンテーションの実施などを実施した。また、全体での情報共有には Moodle を活用した。

前期課程については、感染拡大状況に応じて、審査、講義、実習に至るまで、オンライン会議システムを効果的に取り入れて、令和 2 年度の授業を予定通り終えることができた。ハイフレックス型の講義で準備の負担を軽減できるように、カメラとマイクとスピーカーが一体となったオールインワン型の Web カメラ等の機材、拡張型のスピーカーフォンなどを購入して対応し、対面講義が開始になっても県外から参加する学生が参加できるように環境整備を行った。授業においては学生間で担当を決めて準備を行うなど学生の行動の変化も見られ、修士論文発表会は対面と遠隔を併用して、学生が主体的に準備運営をすることができた。

後期課程については、学生が他県や COVID-19 の感染地域に居住しているなど、高知まで来ることが難しい学生が多いことから、遠隔の形態で授業が継続できたことは効果的であった。DNGL に関しては、遠隔授業は変わらないが、新たなシステムが導入されたことで、これまでの専用回線に比べて、コスト低減と参加形態の自由度が向上した。

全体として、教員それぞれが遠隔授業を行うことにより、以前より LMS の利用が活発になった。単に教材管理システムの機能ばかりではなく、授業設計や授業の進め方にも LMS や Zoom の効果的な利用が考慮されたことが成果を生み出した。次年度も、今年導入した機材を効果的に活用して、対面と遠隔を状況に合わせて使い分けて、魅力的な教育プログラムへと発展させていきたいと考えている。

3)　遠隔授業推進プロジェクト

遠隔授業推進プロジェクトは、令和 2 年 6 月に活動を開始した。本プロジェクトの活動目的は、「看護実践能力を育成する教育の要件を検討し、看護学部や看護学研究科で看護実践能力を育成する遠隔教育システムを構築すること」である。

世界的な COVID-19 の感染拡大によって、多くの大学が遠隔授業を余儀なくされ、高知県立大学でも 2020 年 4 月 20 日から遠隔授業をはじめることとなった。日本看護系大学協議会は、この状況に対して、「教育を継続し、学生の入学の意思が全うできるよう、努力すること」、「看護系大学のすべての教員、在校生、卒業生に対し、各自が可能な看護活動を行うよう、期待すること」などを声明として緊急発表している。また、熊本大学教授システム研究センター長の鈴木克明教授からは、「対面授業を行わなくても立派な通学制課程であること」、「同じ形ではなく同じ価値を追求すること」、「順序を変えること」、「学生が学び続けること」、「平時になっても使えるオンラインの要素を探すこと」などが提案されている。

看護基礎教育における看護実践能力の育成のためには、知識を教授するだけでなく、看護の専門的判断能力の育成が不可欠である。つまり、看護の対象を理解し、対象に合わせた看護援助を選択し、実践し、その成果を評価するための知識の活用方法がわかることと、基本的な看護援助技術の修得が求められる。

本学看護学部では、講義−学内演習−臨床実習を循環しながら、看護実践能力の育成をすることを重視してきた。しかし、COVID-19 の感染拡大下においては、従来のように学生が臨床実習で学ぶ機会を確保することは難しく、教員も学生も不安感を募らせている現状がある。既に、全国的には、e-ラーニングによる学習教材や ICT を用いた視聴覚教材の活用などの報告が多数あるが、臨床実習の準備あるいは補完の位置づけで開発されてきたため、遠隔教育のみで看護実践能力を育成するまでには至っていない。ウイルスの感染拡大が刻刻と変化する中で、看護学部は歩みを止めることなく、学生への看護基礎教育を進め、「看護実践能力を育成する遠隔教育システムの構築」を行う必要がある。遠隔教育システムは、現状に留まらず、今後のアフターコロナにも、「看護実践能力を育成するシステム」として活用できる可能性がある。

本年度のプロジェクト活動として、以下の活動を行った。

(1)遠隔授業に関する研修会の開催

研修会は9月20日（日）にシミュレーションプロジェクトと共催で、「看護実践能力を高めるオンラインでの学びを支援する～インストラクショナルデザインの活用～」をテーマに開催した（詳細は健康長寿センターにおける看護学部の活動　4）高知医療センターとの包括連携を推進する活動参照）。参加者は41名であった。

(2)遠隔授業に関するアンケート調査

2020年度前期・後期、各1回教員・学生に対して、「看護実践能力を育成する遠隔教育システム構築に向けた教育要件の検討」というテーマでアンケート調査を行い基礎データとした。教員へは【遠隔授業の準備および実施状況】【教員による遠隔授業の評価（自己評価）】【教員の遠隔授業の考え方（ガニエの教授事象の重要度）】【遠隔授業の総合評価】の5項目についてデータ収集を行い、45名の回答を得た。学生については、【基礎情報（使用デバイスや通信環境など）】【遠隔授業の授業評価】についてデータ収集を行い、269名の回答を得た。結果は、看護学部看護を語る会で教員へフィードバックし、今後、論文としてまとめる予定である。

(3)遠隔授業推進プロジェクト内での検討

プロジェクトメンバーで11回の会議を開催し、アンケート調査や教育要件の検討などを行った。

(4)今後の課題

今年度はプロジェクト発足から1年目であり、教員、学生ともにアンケート調査は、看護基礎教育における遠隔授業でも、講義を中心とした調査を中心に行うことに留まった。本調査の結果は貴重であり、今後、プロジェクト内で検討を進め、学生、教員、社会に発信していく予定である。また、来年度以降の課題として、今後はプロジェクトの活動目的にあるように、講義だけでなく、演習や実習においても、講義−学内演習−臨床実習を循環しながら、看護実践能力の育成をする遠隔教育の要件を検討していけるよう、新たな活動に取り組む予定である。段階的に調査などを行うことで、最終的には、「看護実践能力を育成する遠隔教育システムの構築」ができるように取り組むことが課題として挙げられる。また、看護学部の看護基礎教育で看護実践能力の育成をする遠隔教育の要件を検討する中で、看護学研究科にも発展させ、遠隔教育システムを構築していくように取り組むことが課題である。

3. COVID-19 への対応

COVID-19 蔓延に伴い、高知県内でも全国の感染拡大に呼応するように 2020 年 3 月 1 日から陽性者が出始め、一旦は終息するが 3 月 27 日から 4 月 28 日にかけては断続的に 61 名（第一波)、また 7 月 12 日からは 9 月 11 日にかけては 63 名（第二波)、その後 10 月 28 日までは 7 名と散発していた。ところが第三波となった 11 月 20 日から 2021 年 2 月 16 日までの間は 740 名と一気に感染者が増加した。

この第三波に際しては、看護学部では感染症対策を専門とする木下教授、看護学研究科の災害看護領域の学生・教職員を中心に様々な支援活動が模索された。そこで、なかなかアルバイトもできず食費を切り詰めている学部学生達に対し、有志から戴いた食材の寄付を配布する活動を開始した（『コロナサポート活動』参照)。

また 12 月 25 日には厚労省･文科省から看護系学部を有する各国公私立大学長に対し、「新型コロナウイルス感染症対策における看護師等の免許を有する教員や大学院生の支援について（協力依頼)」が伝達されたことを受け、学部内でも支援活動の可能性を模索した。その結果、『学外サポート』として、陽性者が急増していた高知市保健所への教員の応援派遣と、宿泊療養施設の看護師駐在について大学院生に入ってもらうことにした。一般県民に対しては、巷に様々な情報があふれていることに対し、看護学部としてエビデンスに基づいた対処法や感染予防の考え方を伝える『FAQ』を大学のホームページから発信することとした。

その後 2021 年 2 月 16 日には一旦終息していた感染者は、3 月 1 日から再び散発し、3 月 1 カ月で 35 人とその後も感染者は続いている。

1) FAQ プロジェクト

木下真里、山田覚、竹崎久美子、藤代知美、嶋岡暢希、竹中英利子

【活動概要】

COVID-19 が世界的に拡大する中、不正確な情報によるインフォデミック、人々の正常な意思決定を妨げるほどの情報の氾濫が社会問題化する中、看護学部による社会貢献の一環として、令和 3 年 1 月に表記プロジェクトが開始された。COVID-19 に関するさまざまな疑問に対して、関連する専門知識の解説を本学ホームページに掲載するものである。

これまでに提案された 20 以上の質問候補について、重要性やタイムリネス、本プロジェクトで扱うことの妥当性など、様々な角度から検討を行った上で、メンバーによる投票によって 7 つの質問を選び、順次解説の作成を進めている。令和 3 年 2 月 1 日に最初の 3 問への解説を、本学ホームページに掲載し、その後 3 問が追加掲載された。令和 3 年 3 月 20 日現在、県民向け 5 問、医療従事者向け 1 問が掲載されている。解説は、便宜的に県民向け、医療従事者向けと分類して掲載しているが、県民向けとして掲載した質問も、医療従事者等の現場の専門職が、クライアントから同様の質問を受けた際にどのように回答するかを考える際の、参考としてもらうことを想定している。

このプロジェクトは災害・国際看護学領域の教員を中心に、精神、母性、老人、在宅各領域の教員をコアメンバーとして構成しているが、解説案の作成は、内容に応じて看護学部内の様々な専門領域の教員に応援を求め、共同で作成している。

【活動成果】

また、一般の検索エンジンを使用して「新型コロナウイルスに関するよくある質問」として検索した場合、Google では約 54,200,000 件中 5 位、Yahoo!では約 54,200,000 件中第 6 位に表示されている（2021/03/20)。地方自治体または政府機関のページが上位を占める中で、大学のペ

ージとして唯一トップページに表示されている。令和3年3月20日現在、掲載内容についての苦情や誤りの指摘、疑義の照会は、当サイト管理者のもとに届いていない。「(専門的な理論の応用方法が）わかりやすかった」「参考になった」などの好意的な意見は複数件寄せられている。

3月からカウンターを設置してサイト閲覧数のモニタリングを開始している。令和3年3月現在、1日あたり10件以内の安定した閲覧数がある。

2) コロナサポート活動（ころサポ）

【活動の概要】

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、困難な生活を強いられている本学学生に対して、池、永国寺両キャンパスから参集した10数名の教職員有志が、食品や日用品の配布（16件)、オンラインミーティングの開催（のべ15名が参加）などの支援を行った。活動は令和2年12月29日～令和3年1月3日の冬休み期間中毎日実施した他、今年度の医療福祉系の国家試験が「感染者は受験不可、再試験なし」という大変厳しい条件の中で実施されたため、令和3年2月にも追加で物資配布を行った。活動後に残った物資は令和3年3月に学生・就職支援課に引継ぎ、今後の学生支援に活用していただくこととして、本活動を終了した。

【背景】

COVID-19収束の兆しは依然みえず、今後も学生や教職員など単発の感染者発生は見込まれるが、これら大学関係者が起因する二次感染（クラスター）を防ぐことが、県立大学としての社会的責任と考えられる。大学から感染者や濃厚接触者に対しては具体的な支援があるが、発症前から感染性があること、無症状者が多いことを考慮すると、大学の機能が縮小する冬休み期間中に、大学による支援対象外の学生も含めて「目に見える形で」支援することにより、学生の不要不急の外出の頻度を減らし、結果的に感染拡大を防止できないかと考えた。

【活動趣旨】

1. COVID-19感染拡大の影響で、年末年始の帰省、飲み会、会食、バイトをあきらめて孤独に生活している本学学生を物心両面で元気づける。
2. COVID-19濃厚接触者、健康観察期間にあるものが外出することなく、安心して療養期間を完遂できるように支援する。
3. COVID-19感染拡大の影響で、困難になっている横のつながり、支え合う仕組みをつくる。

【活動総括（成果、意義)】

活動は単なる経済支援の域を超え、以下のような包括的効果があったと考えられる。

・自主的な判断で活動を制限している学生に対して、自粛生活を継続するための物心両面での具体的な支援を提供した。
・年末年始に学生が買い物等のために混雑する場所（スーパーマーケットなど）へ出かける機会を減らすことにより、感染拡大防止に一定の効果があった。
・日常生活制限の中で学生に新しい交流の場を提供した。
・すぐに支援を必要としない学生もリストに多数登録しており、大学冬季休業期間中の学生向けセーフティーネットを補完した。
・COVID-19による日常の共同体の喪失が学生にもたらす影響の大きさ、精神的サポートの必要性が明らかになり、今後の大学教育支援のあり方に関する重要な示唆を得た。

3)　対外支援

12 月 25 日に厚労省･文科省から看護系学部を有する各国公私立大学長に対し通達された、「新型コロナウイルス感染症対策における看護師等の免許を有する教員や大学院生の支援について（協力依頼）」については、日本看護系大学協議会からも協力要請があった。

高知県下でも 12 月中旬ごろより、多い日には 1 日 20-30 名の陽性者が報告され、療養場所の調整待機者は一時 65 名にのぼった。12 月 25 日現在では、入院治療を要する者等 183 名、内医療機関 103 名、宿泊施設 32 名、調整中 48 名と療養場所の振り分けや宿泊施設での対応が佳境であった。同時に、PCR 検査が陰性となり帰宅した人たちに対してもフォローアップを行う必要があり、医療機関もさることながら、公衆衛生部門の活動が多忙を極めていた。

そこで 12 月 28 日から地域看護学領域の教員を中心に、最も陽性者が集中しその対応に追われていた高知市保健所と、県下の感染対策を統括している高知県健康政策部健康長寿政策課に対しニーズ調査を行った。いずれも何とか年末年始の体制は整えているとのことであったため、1 月に入ってから再度ニーズ調査を行い、応援派遣を行った。

令和 2 年 12 月末頃の高知県下新規陽性者の状況

日	新規陽性者	入院治療を要する者等			
		合計	医療機関	宿泊療養施設	調整中
12 月 20 日（日）	23	173	98	22	53
12 月 21 日（月）	17	177	105	22	50
12 月 22 日（火）	31	190	112	20	58
12 月 23 日（水）	24	189	104	20	65
12 月 24 日（木）	19	191	108	26	57
12 月 25 日（金）	12	183	103	32	48
12 月 26 日（土）	14	161	93	36	32
12 月 27 日（日）	8	159	91	35	33
12 月 28 日（月）	8	158	86	41	31
12 月 29 日（火）	8	146	81	35	30
12 月 30 日（水）	12	138	74	35	29
12 月 31 日（木）	9	116	59	36	21
R3. 1 月 1 日（金）	6	107	58	29	20
1 月 2 日（土）	7	95	58	26	11
1 月 3 日（日）	11	96	57	27	12

高知県健康対策課ホームページより抜粋

(1) 高知市保健所

高知市保健所では 12 月の陽性者急増を受け、医療機関や宿泊療養施設への入院/入所調整や、施設からの退所者に対するフォローアップの業務を地域保健課が行っていた。しかし統括保健師の神﨑氏によると、通常業務の傍らでもあり、他部署からの保健師応援を入れてはいるが、なかなか業務のマニュアル化や事後の整理が進まず、ケースごとの対応含め、全てを統括保健師が対応している状況とのことであった。

そこで学内から急遽、地域看護学領域の髙橋真紀子助教に、令和 3 年 1 月 13 日（水）から 2 月 5 日（金）までの約 3 週間、高知市保健所地域保健課（高知市あんしんセンター1F）に応援に入っ

てもらうこととした。幸い高知市とは、平成 27 年 3 月 26 日より包括連携協定を締結しており、協定に基づいた出張派遣とすることができた。学内は 3 回生の領域別実習の時期であったが、実習は領域内の結束と寄付講座からの協力も得ながら、その他の学内用務は学部全体でカバーしながら対応した。

また感染症に対する保健師活動の応援である以上、用務によっては感染のリスクをはらむことも考えられる。身分は大学からの出張であったが、まずは感染者との直接接触はない用務からの開始であること、万一感染リスクが考えられる用務の場合は事前に事務方に連絡を入れ、補償が充分におこなわれるよう、派遣先、事務局と確認を行った。

高知市保健所では統括保健師の元では病院や施設からの帰宅者に対する電話フォローを行ったり、これまでの活動の集約、他部署からの応援者が一貫した活動ができるようマニュアル整備することなどを支援してきた。統括保健師の元で関連する用務の全体を見渡しながら、体制整備の見直しなどについても参画し、体制の立て直しに貢献できたものと考える。その甲斐あってか、引き続き市役所内他部署からの応援によって対応可能となった旨の回答があり、応援要請の継続はなかった。

活動については、3 月に行われた『看護を語る会』の中で報告してもらい、学部内で共有した。

(2) 宿泊施設への応援派遣

県健康長寿政策課からは、高知市内の宿泊療養施設への看護師派遣について要請を受けた。看護師派遣は、基本高知県看護協会に依頼されており、ほぼ交代のローテーションができていたが、幾枠か埋まっていない日があった。

宿泊療養施設での看護師用務は、電話（内線）で自己申告される体温や SP02 による健康確認と、何かあれば別室待機の医師や県職員に連絡し、搬送を依頼するなどの内容である。PPE 着脱に不慣れな人でも着任できるようにと、基本的にゾーニングは緑ゾーンだけの勤務となっていた。謝金も出ることから、ある程度キャリアのあるフルタイムの大学院生に依頼することにした。条件としては、①電話の状況である程度身体状態が判断できる、②緊急時にも冷静にゾーニングを厳守しながら対応できる、③同居の家族がいれば家族の同意も得られる、④休職中の場合は所属機関の了承が得られる、⑤休職中の為謝金が受け取れない人はボランティアでの活動となることを了解している、などをあげ、主査・学部長・研究科長と相談して個々に意向を確認した。その結果、以下の通り延べ 5 名が応援に入ることができた（実働は 3 名）。

宿泊療養施設への大学院生の応援派遣

日	着任時間帯	人数
1 月 24 日（日）	17:00～翌 9:00 泊り	2 名（M1）
2 月 1 日（月）	17:00～21:00 準夜勤	1 名（M1）
2 月 7 日（日）	17:00～翌 9:00 泊り	1 名（M1）
2 月 21 日（日）	17:00～21:00 準夜勤	1 名（M2）

この宿泊療養施設のゾーニング対応は、自衛隊の感染症対策班の助言を得て設定されたものであり、大学院生にとっても、直接 COVID-19 陽性者と接する体験や、宿泊療養施設のゾーニング対応を直接体験する貴重な経験が得られたことと考える。

4. 学際的・国際的な学びを育てる教育環境

1)　学部学生の国際化への支援

(1) トビタテ!留学 JAPAN への応募支援

文部科学省が、グローバル人材育成施策の一環として行う「官民協働海外留学支援制度～トビタテ!留学 JAPAN 日本代表プログラム」第 14 期募集について学部学生に広報を行ったが応募はなかった。

(2) インドネシア ガジャマダ大学からの短期研修受け入れ

ガジャマダ大学と看護学部は2013年に交流協定を締結し、毎年学生の受入や派遣を行っている。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症拡大により中止となった。

(3) 異文化理解看護フィールドワーク開講とインドネシアへの短期派遣研修

令和 2 年度から、インドネシアへの短期派遣研修を事前学習・フィールドワーク・事後学習として単位化することとなったが、新型コロナウイルス感染症拡大により講座開講および短期派遣研修は中止となった。

(4) 「学生のための海外留学・研修等のマニュアル」の改訂

平成 29（2017）年に国際交流センターが作成した国際交流対応マニュアルのうち、「学生のための海外留学・研修等のマニュアル」を改定した。これにより、本学の危機管理体制を明示するとともに、学生への意識啓発の強化を図っていく。併せて、令和 2 年度は、海外派遣における危機管理強化のため、新たに特定非営利活動法人 海外留学安全対策協議会（JCSOS）に入会し、海外派遣時の危機管理サポートを受ける体制を整え、危機管理体制を見直した。

2)　大学院生への支援

2020 年度は、COVID-19 のため、予定されていた短期留学や海外講師による講演や研修が中止になる中、ZOOM を使って、ZOOM Meeting in Kochi 「COVID-19 世界の状況」と「QI プロジェクト」の 2 つの取り組みを実施した。以下に具体的な内容について記載する。

(1)　ZOOM Meeting in Kochi 「COVID-19 世界の状況」（主催：高知県立大学看護学研究科　共催：国際交流センター　・人間生活学研究科）

今回の国際交流特別企画は、神原看護学研究科国際交流委員長より、「COVID-19 だからこそ、ZOOM 等を使って遠くにいる人とつながれるようになった。こんな機会をぜひ有効に使ってほしい」との挨拶で始まった。また、講師の許可をえて、これらの講義は録画され、期間限定で公開された。

①　COVID-19 in TAIWAN

日程：令和 2 年 12 月 16 日　10:30～12:00

講師：Yann-Fen C. Chao, RN,PhD　（Former Dean and Chair Professor, College of Nursing　Hungkuang University Taichung, Taiwan）

参加者：26 名（加えて　動画へのアクセス　27 名）

2400 万人の人口を擁しながらも、新型コロナウイルス感染者数 499 人、死者 7 人（2020 年 9 月 15 日現在）の台湾の COVID-19 対策について、台湾弘光科技大学看護学部学部長 Chao 先生にとても具体的にお話しをいただいた。英語でのプレゼンで実施し、要所要所で看護学部木下准教授が、日本語の解説を加えながら進めた。台湾では、とても早い時期に、

政府から国民に、トップダウンで、詳細な行動が示され、いくつかの行動については実施しなければ刑罰も伴っていたことなど、具体的な対策の数々が紹介された。参加者は、Chao 先生の話を聞きながら、日本と台湾は何が違っていて、どうして台湾になしえたことが、日本ではできなかったのか…等々、文化の違いなども含めて、さまざまな視点から考える機会をえたようだった。

② COVID-19 in CANADA

日程：令和 2 年 12 月 18 日　10:30～12:00

講師：所和香子（カナダ　ヴィクトリアロイヤル・ジュビリー病院 NP）

参加者：16 名（加えて　動画へのアクセス　26 名）

感染者数 178,117 人　死亡者数 9,585 人のカナダの、医療現場、とくに急性期医療の場で何が起きているのか、COVID-19 の現状や対策などについて、Nurse Practitioner として現場で働く所先生にお話を伺った。所先生からは、人種による死亡率の違い、コロナ陰謀説を唱えるデモなど、カナダならではの状況が語られた。一方、退院調整などができないまま患者を家に帰すしかない状況などが語られると、参加者から、日本に起きている状況ととても似ていると日本の臨床状況が語られ、情報交換の機会ともなった。また、カナダで COVID-19 の影響で、所先生がずっとやりたいと思っていた、IT を使った遠隔診療や、Hospital at Home の充実が進められるようになり、そのことによって新たな課題も見えてきたことが語られると、参加者からは、具体的な実施方法などについても質問がよせられていた。

⑵ QI プロジェクト

開催の意図： 学際的、国際的共同研究を推進する次世代の若手研究者・教育者の育成のために、QI をテーマに、模擬的に国際共同研究プロジェクトの計画を経験する。

開催日程：2021 年 2 月 22 日、3 月 8 日、3 月 15 日、3 月 22 日、3 月 29 日の 5 回　1 回 1 時間程度

講師：所和香子（カナダ　ヴィクトリアロイヤル・ジュビリー病院 NP）

参加人数：55 名

5 回シリーズで実施。まずはそれぞれが自由に語り、臨床で直面している医療・看護の質の課題を抽出した。次に、マトリクスを使って、その課題を解決し、どのような目的を達成しようとしているのか、ブレインストーミングしていく方法を経験した。最後は、見出した課題を、QI の計画に高めていく方法を体験した。参加者は、自由に発言し、海外の情報も含めて情報交換を行っていきながら、医療の質について、国際的、学際的な仲間と協力して解決の一歩を踏み出す方法を考えるいい機会となったようだった。参加者も、看護学研究科博士前期課程の 1 回生を中心に、徐々に参加人数が増え、たくさんの疑問や興味に、所先生が新しい情報を提供してくれるような場面も多々見られた。

5. 教員の国際的活動

１）協定校との交流活動

(1) 弘光科技大学との活動

弘光科技大学とは、前年より継続して看護学部教員との情報交換を継続した。この連携を背景として、令和２年研究科主催の特別講義の企画に際しては、著名な看護学者である元看護学部長、現主任教授である Yann-Fen C. Chao 教授に講演をご快諾いただき、他に例をみない先進的な対策で COVID-19 の制圧に成功した台湾の事例について紹介し、好評を博した。

(2) インドネシアガジャマダ大学における活動

ガジャマダ大学の Dr.Elsi Dwi Hapsari 氏らと「Antenatal class with multidiscipline approach to Indonesian pregnant women」というテーマで研究を進めていくために、2020 年３月に現地を視察し、具体的な研究計画を練る予定であったが、新型コロナウイルスの拡大による活動自粛のため渡航を取りやめた。その後も、交流活動は一時中断しているが、今後のプログラム開発に先立ち、ガジャマダ大学の学生が「Disaster preparedness for pregnant women」と「Evaluation of the satisfaction of prenatal class by pregnant women」についての測定尺度を作成し、妥当性と信頼性のテストを WEB 調査により実施したという報告があった。

(3) アンダラス大学との活動

令和２年度に共同災害看護学専攻博士課程（DNGL）を修了したハストロ氏がアンダラス大学に教員として就職した。就職後も、現地の状況等について情報交換を行った。

6.　災害看護をリードする活動

1)　民間団体との連携

・NGO との連携

令和 2 年 4 月 28 日、本学と連携協定を結んでいる特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）から、高知県の感染症指定医療機関として新型コロナウイルス感染症への対応を最前線で行っている高知医療センターに対し、サージカルマスク 2,000 枚とアイソレーションガウン 400 枚（計段ボール 5 箱）の医療物資が寄付された。この寄付は、PWJ から本学に、高知県での新型コロナウイルス感染症対応に対して支援の申し出があり、本学と包括連携協定を結んでいる高知医療センターとの調整を看護学部教員が行って実現したものである。

その後も PWJ との連携は継続しており、令和 2 年 7 月豪雨が発生した際には、本学共同災害看護学博士課程学生が、PWJ 関連団体の支援活動に参加した。令和 2 年度の授業科目では PWJ 海外事業部スタッフに外部講師としてご登壇いただいた。さらに、2021 年 2 月 28 日にミャンマーで発生した事実上の軍事クーデターに際しては、現地民間人に対する保健医療救援の可能性について、本学看護学部木下准教授が PWJ 海外事業部より技術的相談を受けた。

宮城県丸森町において 2019 年 10 月の台風 19 号被害当時から救援活動および減災教育を継続している、特定非営利活動法人ジェン（JEN）の尾立素子プログラム・オフィサーより依頼があり、看護学部木下准教授が、丸森町保健福祉課、消防、まちづくりセンター、地域ボランティア、旅館業者に対して、COVID-19 対策および COVID-19 流行下で自然災害が発生した場合の複合災害対策についての講演会、専門的助言を 6 回に分けて実施した。

2)　オープンデータ活用防災ポータル「まちケア」

防災・災害後、復興時に利用される個票やアセスメントなどから、健康状態、活動、家庭・社会への関与・役割、環境因子、個人因子など、人々の最も重要なセルフケアと共助につなぐための必要不可欠な情報 Personal Life Record (PLR)を整理し、参加型オープンデータ生成で地図化することを目指している。

今年度は、学際的な専門家を招いて、月 1 回の勉強会を行い、行動経済学の観点から、平時にＰＬＲを利活用した防災のサービスに関する議論を行った。

本人関与を強めることで､本人が望む情報を､予め準備しておくことも可能となることを踏まえ、ＰＬＲで住民のセルフケアを支援する地区防災のビジネスモデルを社会実装のため、高知市において、女性や障害を持った方など、災害時要支援者と呼ばれる方々への分散避難のシミュレーションワークショップを行い、その中でＰＬＲ利活用のニーズを確認した。

災害時要配慮者の個別ニーズに対応したＰＬＲの利活用に向け、住民の世帯構成、世帯の特殊性（高齢者世帯、単身世帯、乳幼児・就学児童の有無、要援護者の有無）などパーソナルなデータが重要な要素となる。

全ての住民が同じ内容のデータを必要としないケースや、支援者ある組織の営業上秘守データも扱うことが想定される。地域住民とサポーター企業、オープンデータを提供する自治体等の理解を

得るために、パーソナルデータを安心安全に提供・共有するための手順の整理を行った。その母集団となるグループをコモンズと呼び捉えた。以上の仕組みとアプリとしてまちケア+が完成した。今後はこれを利用して地域防災をすすめる。

3) 看護学部地域減災シリーズ

本地域減災シリーズの研修は、今年度の新たな事業として開始され、災害に強い専門職の育成に向けて学部教育を強化するとともに、地域の拠点として災害の研究や地域活動を推進することを目的とした。

新事業であることから、広報活動として、大学ホームページ/学部ホームページ/研究科ホームページに右記チラシを掲載し、高知県看護協会にチラシの設置を依頼するとともに、案内とチラシを高知県、その他行政、保健所、病院、包括支援センター計 215 施設に発送した。

(1) 第一回

【日時】令和 2 年 12 月 10 日（木）　18：00～19：30

【場所】Zoom による web 会議

【参加者】県外を含む外部参加者 5 名、大学院生と教員 14 名、計 19 名参加

【内容】1. 挨拶：高知県立大学の災害の取り組み

山田覚（看護学部教授）

2. 講演：避難所の感染症対策

木下真里（看護学部准教授）

先ず、挨拶として山田教授から高知県立大学の災害の取り組みに関して説明があり、教育、研究、地域貢献、大学の管理運営それぞれに関する活動の説明があった。

次に、木下准教授から、避難所の感染対策に関して講演があった。先ず、COVID-19 パンデミックは既に災害といえる状態であり、さらに自然災害が起こると、どうなる？のか、聴衆に問いかけがあった。講演内容は、「COVID-19×自然災害により想定される被害」「自然災害時に想定される感染症リスク」「個別の対策と課題」「県立大関係者への期待」であった。COVID-19×自然災害で起こりそうなことに関し、被災者の不安として、避難所で感染が拡大する、避難所で十分な支援が受けられない、避難所に入れない、住民間トラブル、などが整理され説明された。予想されることとして、逃げ遅れで災害被害が拡大、避難所外避難者に支援が届かない、外からの支援が減る、などが挙げられた。被災者にとって不安なこととしては、避難所でのコロナの感染、咳をしたらコロナ患者と思われて差別される、体調が悪いと避難所入所が断られる、マスクがない、体温計がない、避難所に行かないと支援してもらえない、などが説明された。

まとめとして、COVID-19×自然災害被災地のニーズとして、避難所外避難者への支援、一般の人の意思決定支援、異常の早期発見、医療支援体制の確保、環境衛生の監視・助言、外部支援者に代わる支援者の確保があり、ライマリ・ケアとして、周辺被災者の把握と支援調整、動線や区画分けの助言、外部支援の受入れ調整、体調不良者の早期発見、軽症者・接触者の観察、根拠に基づいた環境整備が整理された。

(2) 第二回

【日時】令和 3 年 1 月 21 日（木）　18：00～19：30

【場所】Zoom による web 会議

【参加者】外部参加者 8 名、大学院生と教員 13 名、計 21 名参加

【内容】1. 挨拶：高知県立大学の災害の取り組み

高知県立大学大学院共同災害看護学専攻について

山田覚（看護学部教授）

2. 講演：災害看護に必要な情報のあり方

神原咲子（看護学研究科教授）

先ず、挨拶として山田教授から高知県立大学大学院共同災害看護学専攻について説明があり、共同災害看護学専攻(DNGL)、共同災害看護学専攻から新たな看護学専攻へ、最近の災害・国際看護学領域の活動(学生を中心に)に関し、それぞれ説明があった。

次に、神原教授から災害看護に必要な情報のあり方および人間の安全保障に十分な情報とはなにかに関する講演があった。災害が起きた時の必要なことは、自分と家族が災害から逃れること、いのちと健康を守ること、取り巻く生活環境を立て直すことであり、災害が起こるということは、周囲の日常の当たり前が奪われることであり、経済・時間・社会的貧困に陥ることであることが示された。

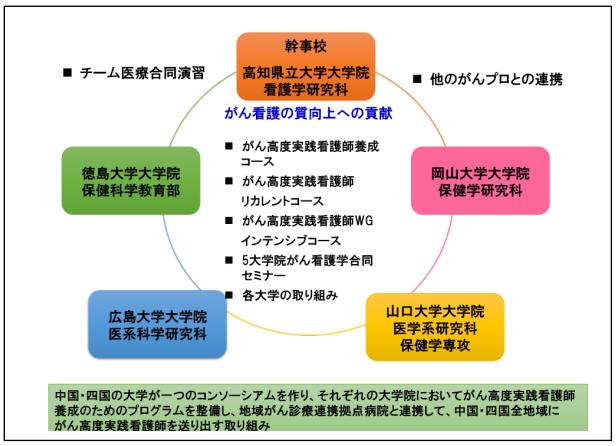
その後、自身が経験した平成 30 年 7 月豪雨水害の倉敷市真備町を事例に、減災ケアモデルの説明が行われた。この災害で収集したデータを分析すると、人は生活を求めて移動していることが明らかであり、避難所は 1 か所だけではないことがわかる。これを踏まえた情報発信と収集・分析が必要であり、被災者が自らできることとして、自分は今どのような状況かを査定し自分が安心と思う場所を予め考えておく、体調に応じた避難先を決めておく、自分で避難先を用意する（親戚・知人宅、ホテル、車)、他者からの感染リスクの低い場所を考える、生活環境の劣悪状況を査定する、危険区域外への転居・退避も検討する、居住環境を変えることのリスクなども検討する、が挙げられた。

結びとして、今後の取り組みの方向性がまとめられた。住民･地域における備えとして、住民自ら行動するための意識改革、地方公共団体職員の主体的な備え、地域の防災対策策定プロセスへの参画等コミュニティによる備え、備蓄の推進、水害保険・共済の加入促進、大規模水害時の広域避難のあり方検討、等、情報通信技術の活用として、準天頂衛星やドローン等最新技術の活用、ソーシャルメディアを活用した地域コミュニティの強化、情報リテラシーの向上、民間の創意工夫による新たなサービスの創出が提示された。

7. がんプロフェッショナル基盤推進プラン

1）はじめに

文部科学省の多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェショナル）」養成プランのもと、中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムにおいて「全人的医療を行う高度がん専門医療人養成」事業として様々な取り組みを行っている。本学は、高知県立大学大学院・岡山大学大学院・徳島大学大学院・広島大学大学院・山口大学大学院の 5 つの大学院で組織されるがん高度実践看護師ワーキンググループ（以下 WG）の幹事校として活動し、がん看護専門看護師の養成およびがん看護の質向上に向けた取り組みを行っている。本学では、令和 2 年度は 38 単位のがん高度実践看護師教育課程の修了生を 3 名輩出し、1 名の修了生ががん看護専門看護師の認定を受けた。



2）がん高度実践看護師WGの活動

がん高度実践看護師 WG では、「1.がん高度実践看護師の養成」「2. がん看護の質向上への貢献」を活動テーマに挙げ、①各大学によるがん高度実践看護師の育成、②がん高度実践看護師リカレントコースの開講、③がん高度実践看護師 WG 講演会の開催、④5 大学院がん看護合同セミナーの開催、⑤11 大学院チーム医療合同演習への参加（教員は FD）⑥HP などによる広報活動、⑦各大学におけるセミナー・別講義の開催、⑧修了生に対するがん看護 CNS 認定試験までのサポートの 8 つの活動を行った。

3）高知県立大学の取り組み

高知県立大学大学院では、「1. がん高度実践看護師の養成」、「2. 看護職の看護実践能力の向上を目指す教育活動」の活動のテーマとして、以下の取り組みを行っている。

がん高度実践看護師の養成では、正規の 38 単位の教育課程のプログラムに加え、がん看護実践を豊かにする取り組みを行っている。看護職の看護実践能力の向上を目指す教育活動には、リカレント教育としてのがん高度実践看護師（ＡＰＮ）コースⅡ、がん看護インテンシブコースⅠ、がん看護インテンシブコースⅡがある。

(1) がん高度実践看護師の実践力を豊かにする取り組み

令和 2 年度は、38 単位のがん高度実践看護師教育課程の修了生 3 名を輩出した。がん看護実践看護師教育課程に加え、がん看護実践を豊かにする取り組みとして、以下のような取り組みを行った。

①がん高度実践看護師（APN）セミナー

日時：2020 年 6 月 12 日（金）、6 月 18 日（木）、6 月 29 日（月）、7 月 10 日（金）、7 月 15 日（水）、7 月 16 日（木）の 6 日間

場所：高知県立大学看護学部棟 C322

参加者：各回 2～4 名（がん看護学領域学生　6 日間合計 14 名）

高知県内で活躍する修了生のがん看護専門看護師より、高度実践看護師としての役割機能別の活動や各々の立場における活動の実際についてご講義いただいた。学生は先輩の活

動から、CNS の役割機能を具体的にどのように発揮するのか、高度な看護実践とは何かを学び、自身の目指す高度実践看護師に向けて課題を見出すことができていた。

②5 大学院がん看護学合同セミナー

日　時：2020 年 8 月 1 日（土）　9：00～17：00

場　所：徳島大学　Web 開催

テーマ：「がん患者におけるリンパ浮腫と症状マネジメントの実際」

講　師：井沢 知子 先生（京都大学大学院医学研究科　がん看護専門看護師）
高西 裕子 先生（徳島大学大学院保健科学教育部 リムズクリニック看護師）
鴨須賀 紀弘先生（ソルブ株式会社メーカー事業部・リンパ浮腫チーム）

参加者：30 名

がん高度実践看護師ＷＧの大学院に在籍するがん高度実践看護師コース大学院生を対象としたリンパ浮腫ケアセミナーを毎年開催しており、本学からは 2 名の学生が参加した。本年度は新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み 1 日の Web 開催であった。学生は講義を通して、リンパ浮腫のメカニズムや症状マネジメントの実際を学び、高度実践看護師として科学的根拠のもとアセスメント、実践、評価を行うことの重要性を学んだ。また、ケアを可視化するための評価指標やツールを用いることや患者へのセルフケア支援について改めて学ぶ機会となった。

③がん高度実践看護師（ＡＰＮ）コースⅠ：専門看護師の育成

◆Life を支える高度実践看護師養成コース

～がん患者と家族のライフステージのニーズに応える高度実践看護師養成～

目　的：がん患者と家族のライフステージのニーズに応えるがん高度実践看護師および、がん看護をサブスペシャリティーとする高度実践看護師の養成を目的とする

対象者：高度実践看護師コースに在学中の学生

コース内容：がん高度実践看護師（APN）コースⅡと同じ

参加者：7 名（がん看護領域 4 名、老人看護領域 3 名）

(2)看護職の看護実践応力の向上を目指す教育活動:リカレント教育

①がん高度実践看護師（ＡＰＮ）コースⅡ

がん高度実践看護師（APN）コースⅡ：専門看護師・認定看護師のリカレント教育

◆がん看護の専門性の高い看護師養成コース

～Cancer Trajectory をたどる人のニーズに応える高度実践を創造する看護師の養成～

≪コースの概要≫

目　的：ライフステージやがんの特性を考慮して、がんとともに生きる人とその家族の健康と生活に関わるニーズに応えられる専門性の高い実践ができる看護師の養成

対象者：専門看護師、修士課程修了生、がん看護領域の認定看護師

テーマ：高齢がん患者の治療とケア　アドバンスト編

履修科目：4 単位 60 時間高齢がん看護基盤論 高齢がん診断治療学 高齢がん看護実践論 高齢がん看護展開論

履修期間：2020 年 9 月 5 日(土)～2021 年 2 月 7 日（日）　（このうち 8 日間）

修了要件：コースで定める 60 時間のうち各科目 8 割以上履修した者には、高知県立大学からの修了証を交付

場　所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟　Web(Zoom)開催

＊本年度は COVID-19 の影響を鑑み Web(Zoom)開催となった。

参加者：28 名

がん高度実践看護師（APN）コースⅡは、専門看護師・認定看護師のリカレント教育を目的としたプログラムである。2020年度は『高齢がん患者の治療とケア　アドバンスト編』をテーマに、高齢がんの診断や治療に関する知識、高齢がん看護に関する専門的な知識と技術を学び、高齢がん患者のニーズに対応することのできる専門性の高い看護実践力の修得を目指して実施し、26名の修了生を輩出した。研修生は高知、香川、愛媛、徳島、鳥取、岡山、広島、山口から参加しており、がん看護専門看護師、老人看護専門看護師、がん化学療法看護認定看護師、がん放射線療法看護認定看護師、がん性疼痛看護認定看護師、緩和ケア認定看護師、認知症看護認定看護師であった。

8日間のコースでは、講義やグループワーク等で知識を修得したのち、最終日は、既習の理論や現状、課題をふまえ、高齢がん患者の特徴を有する 6 事例のグループワークを通して、高齢がん患者への看護実践に向けて知識の統合と患者理解を深め、新たな視点を含めた看護援助を考案することができた。

≪研修生の学び≫

受講生の「老人看護の基本からかなり高度ながん看護について学ぶことができた」「患者さんの発達課題や年齢による患者理解の視点や活用する理論について理解が深まった」「高齢者のアセスメントについて学ぶことができ、それを加えたがん患者のアセスメントができるようになった」「高齢がん患者の身体的・社会的特徴を理解することから始まり、治療に基づく根拠、生活していく上での視点、また事例を通したクループワークではその方や家族にとって必要な看護実践を展開していくことを学ぶことができた。」などの声や授業評価、アンケート結果から目的を達成できたと考える。また、実事例を用いて看護援助を考案したことで、修得した知識や技術の実践への活用方法を学ぶことができ、看護実践能力の向上につながる研修となった。

②インテンシブコースⅡ：がん高度実践看護師WG講演会

日　時：2020年12月5日（土）13：00～16：40

場　所：高知県立大学池キャンパス　Web(Zoom)開催

テーマ：遺伝性腫瘍と生きる患者へのがん看護

講師／テーマ：「がんゲノム時代の遺伝性乳癌卵巣癌診療」

高畠 大典 先生（高知県・高知市病院企業団立高知医療センター
乳腺外科科長）

「がんゲノム医療時代に必要な、がん看護・遺伝看護の視点と実際の関わり」

大川　恵 先生（聖路加国際病院　遺伝診療部　遺伝看護専門看護師）

参加者：79名

がん高度実践看護師WGでは、「ライフステージの様々な新ニーズに応える看護の質向上を推進する看護師養成」を5年間の全体テーマとし、2020年度は「遺伝性腫瘍と生きる患者へのがん看護」をテーマに、講演会をCOVID-19の影響を鑑み、Web（Zoom）で開催した。講演会には、四国4県、岡山、鳥取、島根、大分、北海道等から、遺伝性腫瘍のがん看護に関心の高い看護師、社会福祉士、教員、大学院生等 79 名の参加があった。参加者アンケートでは、「遺伝性腫瘍と生きる患者へのがん看護」について、回答者 48 名全員が具体的に分かった、講演内容に満足したと回答し、がん看護に関する知識が増えた（66.7%）、がん看護に関する興味・関心が高まった（47.9%）、がん看護に対する視野が広がった（62.5%）と回答していた。また、回答者全員が、がん看護の専門的な学習を深める意識を高める動機付けになったと回答していた。さらに、「治療選択の根拠の理解が深まった」「遺伝性がんへの不安をもつ患者や家族への対応の幅が広がった」「何を困っているのかを知り、その人の暮らしを支えるよう看護師が関わっていくことが重要」「遺伝看護の実践事例が具体的なイメージにつながった」

などの意見があった。ゲノム医療の基礎的な知識やがんゲノム医療の提供体制と課題、がんゲノム医療でのチーム医療の重要性、遺伝性腫瘍とともに「生きる」を支える看護職としての役割について考える機会となった。

③インテンシブコースⅠ

～高齢がん患者に安心をもたらすケアを創造していく訪問看護師育成～

≪コースの概要≫

目　的：高齢がん患者の入院早期から退院後の生活を見通してケアを提供し、在宅医療の可能性と選択肢を広げることのできる看護職および、チーム医療を基盤とする在宅がん医療をコーディネートしていくことのできる、高齢がん患者とその家族のケアに関する専門的知識と技術を有する看護職の養成

目　標：

a. 高齢がん患者や家族の理解に必要な基礎的な知識を習得し、高齢者の特徴を踏まえた総合的なアセスメント、看護ケアが実施できる

b. 高齢がん患者のがんや治療、生活の場の特性を理解して、治療・療養・生活過程を支えるケアを提供することができる

c. 地域包括ケアシステムおける高齢がん患者や家族のケアに必要な専門的な知識・技術を習得し、必要な資源や支援を調整することができる

d. 高齢がん患者の在宅療養生活を維持するための必要な身体管理の知識・技術を習得し、実践できる

e. 高齢がん患者の意向を尊重したその人らしい療養生活や看取りを実現するために必要なケアが実践できる

f. 看取りをした遺族に必要な看護ケアを理解するとともに、関わった職種のストレスマネジメントが行えるように、デス・カンファレンス等の場を調整することができる

g. 研修を通して自己洞察を深め、高齢がん患者に対する専門性の高い看護師としての意識をもち、病院と在宅をつなぐ在宅療養支援および看護実践力の高い訪問看護師として機能することができる

対象者：中国・四国地方に在籍する、高齢がん患者の看護に携わる訪問看護師および在宅移行支援の必要な高齢がん患者の入院病棟および外来、地域連携室等の看護師

研修期間：

講義／演習：2020 年 10 月 3 日（土）～2021 年 2 月 20 日（土）（このうち 11 日間）

見学実習：2021 年 1/12（火）～2/12（金）（このうち平日の 3 または 4 日間）

履修内容：講義、演習、見学実習、実習の振り返りと自施設での実践、事例検討を含めた 90 時間　　（表 1 カリキュラム表）

修了要件：コースで定める 60 時間のうち各科目 8 割以上履修した者には、高知県立大学からの修了証を交付

場　所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟 3 階　C309、C313、C112
12 月 19 日、20 日は Web（Zoom）で受講

参加者：5 名

平成 30 年度より新たにスタートしたがん看護インテンシブコースⅠは、高知県の在宅高齢がん看護、高齢者看護、在宅医療や福祉に携わる機関や多職種と協働し、高齢がん患者のケアに特化した研修である。また、座学だけでなく、e-learning、シミュレーション教育、自施設での実践を取り入れ、講義－演習－実習をつなげる 15 日間の現任教育のプログラムである。2020 年度の受講生は 5 名であり、高知県内で在宅療養支援診療所、病院に勤務す

る看護師であった。COVID-19 の影響により、一部、遠隔での講義や演習に制限が加わり、見学実習が自己学習に変更となった。

≪研修生の学び≫

受講生からは、「がん患者の看護、高齢者の看護の基礎的な知識から、在宅療養の視点や家族支援、意思決定支援等の知識を得ることができ、今後の看護に活かすことができる。」「認知機能の低下がみられ始めていても、客観的なアセスメントを行い、その人の持てる意思決定能力を判断し、患者の意見を反映させる事の重要性がわかった」「日々の実践の中での課題が解決できる内容であった」「臨床の場ですぐに役立つものであった」「高齢がん患者の在宅での看護実践の倫理的問題について、グループで意見を出し合いながら解決に向けて取り組むことができた」などの声があり、高齢がん患者の在宅療養を支援するための様々な知識や技術を学び、新たな気づきや視野の広がりを得ることができた研修であったと評価できる。今年度、新たに取り組んだ自施設実習では、受講生が各々の現場でこれまでの学習内容を実践に活用することができていた。また、自己学習や自施設実習内容についてのディスカッションを通して、知識や技術を受講生自身の中に落とし込むことができ、実践に活用する自信や意欲につながっていた。今後、受講生各々の現場で研修の学びを発揮し、講師や研修生同士のネットワークを強化していくことで、高知県内における高齢がん患者の在宅療養移行支援及び訪問看護の充実につながると考える。

表１　カリキュラム表

	カリキュラムの内容	時間	方法
1	オリエンテーション	0.5	
2	高齢がん患者の QOL	2	講義
3	高齢がん患者と地域包括ケアシステム	2	講義
4	高齢がん患者の在宅療養移行支援	3	講義・演習
5	高齢がん患者の在宅生活におけるセルフケア	2	講義・演習
6	高齢がん患者のアセスメント：身体的側面	2	講義
7	高齢がん患者の治療 ①がん化学療法、②がん放射線療法、③ストーマおよびストーマ周囲の皮膚トラブルに対する看護、④看護がんの治療により生じる有害事象への看護(口腔ケア)	9	講義・演習
8	高齢がん患者の在宅での症状マネジメント ①疼痛 ②呼吸困難	5	講義・演習
9	高齢がん患者の在宅医療	2	講義
10	高齢がん患者の認知とケア	2.5	講義・演習
11	高齢がん患者の意思決定支援	3	講義・演習
12	高齢がん患者の家族と家族ケア	2.5	講義・演習
13	高齢がん患者の栄養	2	講義・演習
14	高齢がん患者の看護倫理	2.5	講義・演習
15	高齢がん患者のエンド・オブ・ライフと在宅での看取り	4	講義・演習
16	自施設での実践日 3 日間	18	実践・実習
17	見学実習 3～4 日間（下記の中から選択：複数可） ①訪問看護ステーション②在宅療養支援診療所 ③調剤薬局 ④がん診療連携拠点病院	18(24)	見学実習
18	実習の振り返りを交えた事例検討と修了式	7	事例検討

8. 高校生のための公開講座

看護学部では、2018 年度から新たな試みとして高校生のための看護学を学ぶ公開講座を始め、好評を得ている。当初は、年間５回を開催するように計画していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い高校生の来学が困難な状況となり、web で 1 回開催した。

テーマは、「『看護学』が求められる様々な場面　-高知県立大学看護学部ではじめる看護学-」とし、これまでのニーズを反映し、在学生が大学での学びを踏まえてテーマについてディスカッションする様子を配信した。また、オープンキャンパスも web 形式での開催となったため、実習室の案内を内容に含めた。

申し込みは 17 件あったが、当日の参加者は 9 名であった。昨年度実績が 6 名前後であったので、参加者は増加した。一方、zoom を用いた開催であったために、デバイスによる参加を止めたことがあったとも推察される。今後は、受験生に馴染みのある媒体での配信や公開講座の内容を録画したものの配信が必要である。

9. 高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業：看護・社会福祉連携事業

1） 看護・社会福祉連携事業について

高知医療センターと高知県立大学は、医療・健康・福祉・栄養分野における交流連携を推進し、双方の実践、教育、研究の質向上を図るとともに、地域・社会への貢献を促進するため、平成 22 年 11 月に両組織間の包括的連携協定を締結した。これは、高知医療センター看護局と本学看護学部が、よりよい看護の実現を目指して平成 18 年から取り組んできた看護連携型ユニフィケーション事業を発展させたものである。現在はこの協定に基づき、全体を統括する包括的連携協議会の下に、健康長寿・地域医療連携部会、看護・社会福祉連携部会、健康栄養連携部会、災害対策連携部会の 4 部会を設置し、さまざまな連携事業を展開している。

このうち看護・社会福祉連携部会では、看護および社会福祉に関する連携事業として、①学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供、②基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力、③教員によるコンサルテーションの実施、④臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究、⑤県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催、⑥その他看護・社会福祉連携活動の実施、を行っている。

(1) 看護・社会福祉連携部会の委員および活動状況

令和 2 年度は部会委員を、高知医療センター19 名（看護局 7 名、地域連携室 12 名）、高知県立大学 9 名（看護学部 7 名、社会福祉学部 2 名）、計 28 名で構成し、活動を推進した。今年度は本学看護学部が部会長および事務局を務めた。

看護・社会福祉連携部会では、COVID-19 の影響もあったが、下記のとおり 2 回の部会会議とメールによる情報交換や相談を行いながら、事業を進めた。

・第 1 回看護・社会福祉連携部会：6 月開催（Zoom を用いての Web 会議）
　今年度の部会の運営および活動方針の検討、事業計画の確認等
・メールでの中間評価：10 月（メールによる確認・共有）
　事業実績および今後の事業計画の確認、COVID-19 による影響の把握
・第 2 回看護・社会福祉連携部会：3 月開催（Zoom を用いての Web 会議）
　事業実績および活動評価の確認、次年度に向けた課題、次年度の活動計画の検討等

(2) 看護部会における事業実績

今年度は COVID-19 の影響により、事業の開催を見合わせる、時期や実施方法を変更するなどの対応を行いながら、各事業を展開した。最終的な事業実績は表 1 のとおりである。

表 1. 令和 2 年度看護部会における包括的連携事業実績

1. 学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供
1)学部生および大学院生の臨地実習
学部生：看護基盤実習、急性期看護実習、慢性期看護実習、母性看護実習、小児看護実習、助産看護実習Ⅰ　のべ 205 名
＊COVID-19 に伴う変更：ふれあい看護実習は、病院での各部門の講義と見学実習を中止し、Web 会議ツールを用いての遠隔講義と講義動画作成に変更した
＊COVID-19 に伴う中止：助産看護実習Ⅱ、総合看護実習（小児・急性期・慢性期・助産看護領域）、看護管理実習（小児・急性期・慢性期・助産看護領域）

総合看護実習と看護管理実習では、臨地実習中止を補うため、臨床現場の実際に関する特別講義を実施

大学院生：がん看護学実践演習Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、クリティカルケア看護学実践演習Ⅰ・Ⅴ、小児看護学実践演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ、★慢性看護学実践演習Ⅳ　のべ 15 名

＊COVID-19 に伴う中止：クリティカルケア看護学実践演習Ⅳ、小児看護学実践演習Ⅴ、家族看護学実践演習Ⅰ・Ⅱ

2)大学院生および教員の臨床研修

大学院生：緩和ケアカンファレンス・キャンサーボードへの参加（がん看護学領域、4 回・のべ 7 名）、小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域、2 回・のべ 3 名）

＊COVID-19 に伴う参加中止：急性期領域のセミナー等への参加（クリティカルケア看護学領域）

教員：小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域、2 回・のべ 2 名）

＊COVID-19 に伴う参加中止：緩和ケアカンファレンス・キャンサーボードへの参加（がん看護学領域）、急性期領域のセミナーへの参加（急性期看護学領域）

2. 基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力

1)医療センターによる教育・研究支援

(1)教育支援

学部生：ナーシングカフェへの参加（2 回・のべ 3 名）、インターンシップ（3 回生 45 名）、実践的知識獲得へのサポート：「医療安全について」（2 回生 80 名）・「感染管理について」（3 回生 82 名）・「医学的知識を活用した看護実践」（3 回生 82 名）、急性期看護論ゲストスピーカー「クリティカルケアの場における死と看取り」（2 回生 83 名）、終末期看護援助論ゲストスピーカー「終末期にある患者と家族のケアの実際」（3 回生 82 名）、助産看護領域特任助教の派遣 1 名（4 月、6～9 月）

＊COVID-19 に伴う開催中止：ドクターヘリ見学および「ドクターヘリの運用とフライトナースの役割について」、小児看護の魅力を語る会

＊COVID-19 に伴う追加：総合看護実習（急性期看護領域）における特別講義、看護管理実習における特別講義 2 件

大学院生：クリティカルケア看護方法論Ⅱ特別講義「クリティカルケアにおける倫理的課題－臓器移植に焦点を当てて」（博士前期課程クリティカルケア看護学領域 1 名）

(2)研究支援

学部生：看護研究における研究対象者の紹介依頼を予定していたが、今年度は COVID-19 感染拡大防止のため多くの研究が文献研究になったことにより、依頼はなかった

大学院生：修士論文における研究対象者の紹介（4 題）

教員：教員の研究における研究対象者の紹介（3 題）

2)大学による教育・研究支援

(1)継続教育支援　　※参加者数は医療センターのみ

研修「ストレスマネジメント」「グループマネジメント」「高齢者ケア 1」「高齢者ケア 2」への講師派遣（のべ 88 名）、実地指導者リーダーフォローアップ研修への教員の参加（2 回・のべ 24 名）、マネジメントリフレクション（看護管理学領域、1 回・21 名）、シミュレーション教育学習会（2 回・のべ 11 名）、シミュレーションを活用したリーダー研修；7B フロア（クリティカルケア看護学領域、1 回・8 名）、★部署内の既卒新人および部署間異動者に対する実践における教育的なかかわり方に関する研修；3A フロア（クリティカルケア看護学領域、1 回・5 名）

＊COVID-19 に伴う中止：教員による若手看護師のキャリア・サポート「専門職としてのキャリア・デザイン」、シミュレーション研修「けいれんの初期対応」のトレーニングならびに勉強会；4A フロア、化学療法を受ける子どもへの看護に関する勉強会；4A フロア、シミュレーションを活用した病棟の学習会；5B フロア、事例検討；2C フロア ＊その他の理由による未開催：高齢者へのせん妄予防介入　認知症・精神疾患がある高齢者ケア検討会；6 階 HCU、ビーズ・オブ・カレッジ研修会 (2)研究支援 看護研究 4「看護研究を系統的に学ぶ」（3 名） ＊未開催：★「産後 2 週間健診結果に基づく産後ケアの見直し（仮）」
3. 教員によるコンサルテーションの実施 QC サークル活動のコンサルテーション（看護管理学領域、Zoom での開催 16 名、12 回のメールでのコンサルテーション） ＊COVID-19 に伴う中止：シミュレーションを活用した病棟の学習会の内容を今後の実践・災害看護につなげる方法の検討；4B フロア
4. 臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究 共同研究（3 件、うち 1 件は新規）
5. 県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催 1)市民を対象とする共同事業 ＊COVID-19 に伴う中止：「赤ちゃん同窓会」企画・運営への学生・教員の参加 2)専門職者を対象とする共同事業 ＊COVID-19 に伴う中止：妊産婦救急救命基礎研修（BLSO プロバイダーコース）の運営
6. その他看護・社会福祉連携活動 なし

★は新規事業

(3) 事業評価および次年度への課題

看護と社会福祉の連携強化として、社会福祉部会で毎月行われている事例検討会での連携に取り組み始め、2 年目となる。徐々に看護の教員および大学院生の参加回数が増加してきている。特に、大学院生にとっては、社会福祉やソーシャルワークに関して深い学びの機会となっている。今年度は COVID-19 の感染拡大の影響により、Zoom での Web 開催や開催中止となったが、数少ない機会ではあるものの事例検討会のテーマと話題提供者を看護学部内で広報し、看護学部教員、健康長寿センター看護職員、大学院生の参加を得ることができた。事例検討を通して社会福祉と看護の視点を織り交ぜ、対象者理解や関わりのプロセスを深く振り返るだけでなく、互いの専門領域の考え方や活動を知ることで刺激になっており、今後も引き続き連携を図る予定である。

看護部会では、今年度も両施設の連携の下で、COVID-19 の感染状況を考慮しながら、可能な範囲での活動を行った。対面での実施が不可能なことが多くあったが、開催時期の変更や Zoom を活用するなど柔軟に対応し、全 79 事業計画のうち 17 件の中止、3 件の未開催、3 件の不参加にとどめることができた。また、新規事業が 7 件あり、創意工夫を凝らし実施することができた。

今年度は COVID-19 感染対策のため、さまざまな制限が課される中、中止または未開催となった事業は 30%にとどまっており、両施設の連携、協力体制が強化できた結果であると考える。今年度やむなく実施できなかった事業に関しては、継続して次年度の活動として計画されてい

るため、今年度開催できなかった要因や開催方法について検討し、開催実現への方法を立案、実施していく必要がある。また、年度末の活動評価では事業の開催方法についていくつかの課題や提案があり、これらを踏まえて、次年度もより効果的な活動が展開できるよう高知医療センターとのさらなる連携強化を図っていく。

2) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ

(1) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボの相互利用の概要

高知医療センター2 階 205 に高知医療センタースキルズラボが開設されている。本学からは、医療センター看護局を通じて高知医療センターのイントラネットを使用して事前予約をおこなってから使用することになっており、主に学部生実習などの目的で使用している。高知医療センターの医師や看護師も事前予約の上、本学に設置している設備および備品（シミュレータなど）を使用できる。申込書類は総務企画課に提出されるため、設備および備品の管理責任者は総務企画課から連絡があった場合、設置室、設備および備品を確保する。

(2) 高知医療センタースキルズラボの利用実績

令和 2 年度（9 月末現在）における高知医療センタースキルズラボ使用実績として使用人数は施設使用 241 件、使用人数 679 名であった。昨年度より減少が見られる。コロナ禍での交流制限の中、今後の利用促進が課題である。

(3) 高知県立大学スキルズラボの利用実績

本年度の高知医療センターによる本学施設の利用実績はなかった。コロナ禍での交流制限の中、今後の利用促進が課題である。

(4) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ運営委員会

本学からの委員として、池田教授と井上講師が参加している。本年度は令和 2 年 10 月 26 日（月）に第 1 回スキルズラボ運営委員会が開催された。令和 2 年度スキルズラボ備品等決算、令和 2 年度使用実績・報告、令和 3 年度スキルズラボ備品等予算について話し合われた。運営委員会での議論は、高知医療センターとの包括的連携協議会において報告された。

(5) 次年度の課題

本年度は昨年度に比べて、本学からのスキルズラボ使用実績が少なかった。コロナ禍において医療センター職員、学生（学部・大学院）や教員の相互乗り入れに制限が加わる状況下でやむを得ないない部分もあるが、両機関の積極的な相互利用が望まれる。例えば機材や物品を相互提供しあって、人ではなく物の交流を図ることはできないだろうか。今後も、両機関のスキルズラボの相互乗り入れを促進していく必要がある。

(6) スキルズラボ備品

本年度のスキルズラボの備品は昨年度と同様である。

10. 健康長寿センターにおける看護学部の活動

委員：久保田聰美、小原弘子、高橋真紀子

1) 看護学部の活動方針

健康長寿センターは、高知県立大学の関連学部が連携して、地域の人々の健康長寿の推進および健康長寿社会の構築に貢献する専門職者の知識や技術の向上に努めることを目的として設置されている。看護学部では、運営委員を中心に健康長寿センターの運営及び活動に参画し、他学部や地域教育研究センターの教員と連携して地域健康啓発研究活動を展開している。また、看護学部教員や領域、学部全体等の単位で健康長寿センター事業を実施することで、高知県内の看護その他保健医療福祉分野に係る人材育成と県民の健康づくりに貢献することを目指している。センターの活動ポリシーである５領域【高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動】【高知県民の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動】【高知医療センターとの包括的連携を推進する活動】【高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動】【高知県の健康長寿を研究する活動】を中心として、事業を展開してきた。

今年度は、感染対策のために出前型の健康長寿体験型セミナーや対面での公開講座は中止となったが、高知県立大学健康長寿センターの公式 SNS から発信を継続した。詳細は、後述の「おうちで健康長寿体験型セミナー」の報告を参照して頂きたい。

次年度は、高知県立大学の SDGs 行動計画において「理解を深める期間」から「行動し協働する期間」への移行期として、重要な意味を持つ年となる。学部と健康長寿センターとの連携をさらに強化し、「誰一人取り残さないための、次世代に大切なことをつなぐための考え方や知識、技術」を基盤に活動を推進していきたい。

2) 高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動（域学共生）

(1) おうちで健康長寿体験型セミナー　presented by 健康長寿センター

COVID-19 の感染拡大を受け、出前型の健康長寿体験型セミナーを開催できない状況であった。そのため、今年度は、健康への取り組みへの動機付けをもたらす教育動画を作成し、健康長寿センター公式 YouTube チャンネルを用いて、配信した。「‘転倒予防体操’を皆さんのもとにお届けしますーお元気ですか、一緒に足元体操をしてみませんかー」および「肺炎予防を日々の生活に取り入れよう」の２つをテーマに教育動画を配信した。

① ‘転倒予防体操’を皆さんのもとにお届けしますーお元気ですか、一緒に足元体操をしてみませんかー

コロナ禍以前より、高齢者の事故の７割は家屋内で起きている。居室や階段、台所といった室内移動を目的とする歩行時の転倒事故が高齢者には多い（国民生活センター）。言うまでもなく高齢者は骨折などの重篤化のリスクが高く、回復にも時間がかかり、これをきっかけとして寝たきりへと移行することが多い。よって、体力を維持するための身近にできる体操やストレッチ等を日頃の生活のなかに取り入れていくことを目的に、全８回の教育コンテンツを作成した。各回それぞれ、10分～15 分程度の動画である。看護学部は、第１回と第２回を担当した。

第１回　転倒予防にむけた運動の重要性（担当看護学部：小原講師）
第２回　運動前の健康チェックとクールダウンの重要性（担当看護学部：小原講師）
第３回　かんたん体操基本編（担当社会福祉学部：辻講師）
第４回　セラバンド体操編（担当社会福祉学部：辻講師）
第５回　運動の効果を最大限にできる大切な食事（担当健康栄養学部：荒牧准教授）
第６回　新聞紙棒体操編（担当社会福祉学部：辻講師）
第７回　ボール体操編（担当社会福祉学部：辻講師）

第８回　タオルで足首体操編（担当社会福祉学部：辻講師）

②　肺炎予防を日々の生活に取り入れよう

高齢者には、加齢変化による嚥下反射の遅れ、嚥下にまつわる筋肉の筋力低下が少なからず存在する。冬期しかもコロナ禍において、高齢者の外出機会は減少する。外出機会の減少は、「身体を動かす」「話す」という行為も減少する。高齢者にとって、このことが、嚥下にまつわる筋肉の筋力を低下させ、誤嚥性肺炎（顕性および不顕性誤嚥による）を生じさせる要因となる。このことから、冬期しかもコロナ禍において外出機会が減少している高齢者に対し、誤嚥性肺炎の予防に向けた日々の取り組みへの動機付けをもたらす動画を作成し、全４回のコンテンツとし、ユーチューブ配信を行った。全４回を通じて看護学部が中心となり作成した。

第１回　高齢者における肺炎予防の重要性（担当看護学部：小原講師）

第２回　肺炎を予防するために必要なこと（担当看護学部：小原講師）

第３回　日々の生活に取り入れよう①-お口の体操の実演-（担当健康長寿センター：乾専門職）

第４回　日々の生活に取り入れよう②-食べるときの姿勢のコツの実演-（担当社会福祉学部：辻講師）

(2) 土佐っこ健診プロジェクト

土佐市では、小中学生に対する健康調査の実施とその後の指導を通して、小中学生とその家族が成長後も健康的な生活を送れるよう、健康の改善を促すことを目的に、平成24年度からとさっ子健診を実施している。本プロジェクトは連携事業の一つとして行われており、大学の担う役割として、学会・論文発表を通じた社会への情報発信や、児童および保護者に対する効果的な支援方法を検討するため受診者の健康観・健康行動に関するアンケート調査の実施、アンケート及び検査結果データの解析、受診者にとってピアである学生の力を活用したお楽しみコーナーや食事バランスチェックの実施、とさっ子健診への助言等を行ってきた。今年度は、Covid19の感染拡大により、大学教職員及び学生のとさっ子健診への参加を見送ることとなった。土佐市では規模を縮小し、感染防止に注意しながら夏2回、冬2回の計4回、土佐市保健福祉センターを会場にとさっ子健診を実施し、受診者は計163人であった。平成26年度から実施している自記式のアンケート調査用紙を用いた子どもの健康に関する意識調査を、土佐市の保健師の協力を得て今年度も継続して行った。本学からは、感染予防策として、個人に配付する筆記用具の提供を行った。

また、「子どもの保健行動を促進するための支援の検討－とさっ子健診の結果を踏まえて－」というテーマで共同研究を行った。本研究の目的は、健診データの推移や個別支援による効果を明らかにし、その結果を踏まて、子どもの保健行動を促進する有効な支援を検討することである。【研究目標1】健診結果を統計的に分析し、子どもの身体的特徴を明らかにするに関しては、貴重な検査データを蓄積するためのデータ蓄積システムの作成を外部業者に依頼している。これによって、年度ごとのデータ分析が容易となる。また、【研究目標1・2】に関しては、今年度開催された「第25回日本在宅ケア学会学術集会」で発表した。【研究目標2】子どもへのアンケート調査結果を分析し、子どもの健康観、生活習慣に関する考え・行動の特徴、健診を受けたことでの効果を明らかにするについては、受診者計163人のデータを分析中である。【研究目標3】個別支援を担当する保健師、栄養士へ面接調査を行い、支援の現状を明らかにするについては、1月に保健師、栄養士8人へのインタビューを終え、現在、分析中である。今後は、研究目標1～3の結果を踏まえて、子どもの保健行動を促進するための支援を検討する。Covid19の感染拡大により、教職員及び学生のとさっ子健診への参加はできなかったが、土佐市と大学が連携し協働することにより、子どもの健診結果の蓄積、健康意識調査の継続、とさっ子健診後の個別説明会の充実に向けての検討という成果が得られた。

(3) 地域ケア会議推進プロジェクト

本プロジェクトは、高齢者の介護予防を促進するために土佐市が平成25年度後期より行っている「地域ケア会議」の効果的効率的な方法の確立を目的に、会議運営に関する助言、作成した会議に使用するアセスメント様式をもとに会議内容の課題分析の支援を行うものである。今年度も引き続き、看護学部教員が看護師アドバイザーとして地域ケア会議に参加した。今年度、Covid19の感染拡大により、4～5月は本学が学外での活動自粛のため参加なし、1月は感染対策にて地域ケア会議自体が開催なしであったが、それ以外の月に、小原講師と中井助教が計9回参加した。1回につき4事例検討された。会議で提示されている事例は、リハビリテーションによってADL（日常生活動作）を拡大している中、心不全の既往があり循環状態のモニタリングが必要である事例や、心不全により入退院を繰り返しACP（アドバンス・ケア・プランニング）の支援が必要な事例、心不全と診断されてはいないが降圧剤や利尿剤を服用しているなどの事例がほとんどであった。このように、身体状態と生活動作を統合したアセスメント及び、予後予測が必要な事例が多いため、看護職アドバイザーの担う役割は大きい。次年度も継続して参加する予定である。会議では、要介護および要支援高齢者へのケアマネジメントについて検討、看護の視点からアドバイスを行った

また、「地域ケア会議評価指標」を用いて評価も行った。今年度は、「市全体」「会議の仕組み」レベルの評価まで行った。これは、プロジェクト開始7年目にして初めてである。この結果は、土佐市地域ケア会議による市全体の影響と、今後の会議のあり方への示唆となりうる。結果を土佐市地域包括支援センター職員と共有し、今後の地域ケア会議のあり方について検討予定である。

3) 高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

(1) 中山間地域等訪問看護師育成講座

① 事業概要

本講座は、平成 27 年度から高知県中山間地域等の訪問看護師の確保･育成･定着及び小規模訪問看護ステーションの機能強化を目的に、大学の教育力・学習環境を活かして、「中山間地域等における新任･新卒訪問看護師育成プログラム」を運用し、中山間地域等の訪問看護ステーション（以下訪問看護 ST）と協働し、新任・新卒訪問看護師育成に取り組んでいる。

② 事業成果

i. 訪問看護スタートアップ研修（35 科目 138 時間）

【開催日時】前期：令和 2 年 6 月 18 日（木）～令和 2 年 9 月 17 日（木）
後期：令和 2 年 10 月 6 日（火）～令和 3 年 3 月 16 日（火）

【参加者】15 名：新卒枠 2 名、中山間枠 4 名（スタンダード枠 1 名、サード枠 3 名）
全域枠 9 名（うち通年 2 名）

ii. 学習支援者研修会・検討会

新卒者が所属する訪問看護 ST の学習支援者となる管理者等を対象に、学習支援に関する研修会・検討会を 5 回開催し、新卒訪問看護師育成の課題や対処を検討した。

iii. 新卒・新卒 2 年目および修了者フォローアップ研修

新卒および新卒 2 年目を対象に、フィジカルアセスメントフォローアップ研修を約 3 ケ月に 1 回、合計 6 回開催した。新卒 2 年および修了者対象には 1 ケ月に 1 回、家族支援、事故予知トレーニング、倫理研修、症状マネジマント、ACP と看取り、エンゼルケア、退院支援などをテーマにフォローアップ研修を開催した。ケースプレゼンテーションは 14 回実施し、コンサルテーションは 15 件の相談があった。

1) 保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議

須崎、中央西福祉保健所管内の 2 ヶ所で開催し、各保健所管内の在宅医療・訪問看護の現状と課題、訪問看護師育成に関する課題や期待について情報共有や意見交換を行った。

2)　参画団体による企画会議

関係協力団体による企画会議を2回開催し、新卒訪問看護師育成の課題や対策、新卒者や修了者のフォローアップ研修、事業計画について協議し、高知県の訪問看護推進や人材育成における関係機関の役割について検討された。

③　活動評価

中山間地域等訪問看護師育成プログラムは新型コロナウイルス感染拡大のなかオンライン併用の学習支援であった。令和 2 年度の訪問看護スタートアップ研修 35 科目 157 項目の学習目標の到達度を「とても思う」から「まったく思わない」までの 5 段階で評価した自己評価点の平均は 3.75 ± 0.60（標準偏差）であった。また、新卒枠 2 名、中山間スタンダード枠 1 名の修了時の目指す姿および学習課題の自己評価は、ほぼ全員が「できた・まあまあできた」と捉えており、プログラムを活用して単独訪問も可能となり、訪問看護 ST の一員としての役割を担い訪問看護に携わることができていた。なお、本講座の事業内容、実施体制、プログラムの詳細、事業評価については、本学健康長寿センター報告書に掲載している。

(2) 高知県介護職員喀痰吸引構築事業

＜開催日時＞

第1回　令和2年10月17日（土）　9：30～16：00　・　10月18日（日）　9：00～16：00

第2回　令和2年12月　5日（土）　9：30～16：00　・　12月 6日（日）　9：00～16：00

第3回　令和3年 2月 18日（木）　9：30～16：00　・　2月19日（金）9：00～16：00

＜開催場所＞第1回：高知県立大学池キャンパス看護学部棟　C220・C209・C211

第2回：ふくし交流プラザ5階　研修室D

第3回：高知県立大学池キャンパス看護学部棟　C220・C209・C211

＜講師＞　川上理子・竹中英利子・源田美香

＜対象＞　介護福祉士、障害者(児)サービス事業所及び障害者(児)施設等（医療機関を除く）で福祉サービスに従事している介護職員、特別支援学校の教員、保育士等（以下「介護職員等」という。）、特定の者に対してたんの吸引等の行為を行う必要のある者

＜受講者数＞　19名　（第1回：6名　　第2回：4名　　第3回：9名）

＜活動内容と成果＞

本研修は、平成24年4月1日から施行された介護職員等によるたんの吸引又は経管栄養（以下「たんの吸引等」という）の実施のための研修の制度化を受けて、居宅及び障害者支援施設等において必要なケアをより安全に提供するため、特定の者に対して適切にたんの吸引等を行うことができる介護職員等を養成することを目的としている。基本研修と現地で実際のたんの吸引等を指導する実地研修から構成される。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、学内施設の利用や対面での研修に制限があった。一方で、入院・入所中の面会制限のため、医療処置や介護が必要ながらも在宅療養を選択する方が増え、居宅や施設でたんの吸引等を実施できる介護職員等の養成の必要性は高まっていた。そのため、県と協議し、大学では基本研修を3回行うこととし、研修時期や施設を調整した。感染予防対策として、講師、受講者とも体温測定などの体調管理、マスク着用や手指消毒を徹底した。収容人数に余裕のある研修室に距離をとって座り、常時換気し三密を回避した。実技研修では、さらにガウン、フェイスシールドも使用した。

基本研修は、講義研修と実技研修(2時間)で構成し、全講義終了後に筆記試験を行い、90点以上(100点満点)を合格とし、実技研修を行った。今年度は受講者19名のうち18名が合格した（合格率94.7%）。実技研修は、シミュレーターを使用し、喀痰吸引（鼻・口・気管切開部）と胃瘻注入（液体栄養・半固形栄養）を実施した。

受講者は、訪問介護ステーションや共同作業所などで勤務されており、次年度初めて喀痰吸引の必要な方を受け入れる予定の施設もあった。近年受講者が減少していたが、今年度はやや増加傾向であった（平成 30 年度：25 名・令和元年度 17 名）。在宅療養者、施設入居者が重症化の傾向にあり、今後も介護職員等によるたんの吸引等のニーズは高いと考えられる。開催回数や日時、場所を検討し、感染予防対策をとりながら研修を継続していく必要があると考える。

(3) 入退院支援事業

①活動の概要

入退院支援事業は、県より委託を受けて実施しており、平成 28 年度に本学が策定した「地域・多職種協働型の退院支援の仕組み作りガイドライン（以下、ガイドライン）」の普及・啓発を推進するとともに、ガイドラインを活用して病院の入退院支援体制の構築及び、退院支援・退院調整における院内の横断的な調整役、かつ地域のコーディネーターとなる人材を育成するための研修等を行っている。平成 29 年度は回復期病床を有する病院とその地域が協働して入退院支援の仕組み作り、平成 30 年度からはガイドラインの定着化及び急性期・回復期・在宅へとシームレスに移行する地域・病院・多職種協働型入退院支援体制の構築に取り組み、令和元年度はその波及・定着、今年度は、ガイドライン Ver.3 に改訂し洗練化を行った。まず、地域ごとの運営メンバー会議を基盤として、地域と病院が考える「入退院支援における優先課題」を抽出し「共に目指す姿」を決定、次に入退院支援の流れを活用したツール「退院支援可視化シート」を作成するとともに、そのシートに基づき事例展開を繰り返し、洗練化を行った。今年度の事業参加病院は、高知市に回復期（図南病院）と安芸福祉保健所管内での急性期（あき総合病院）からの入退院支援のシステム構築を目指した。

研修事業では、【管理者研修】【看護管理者研修】【多職種協働研修（全 5 回）】【入退院支援コーディネート能力修得研修（全 3 回）】及び【入退院支援コーディネーターフォローアップ研修】を県内 2 か所（高知市・四万十市：遠隔）で実施した。相談支援事業では、各病院と地域の退院支援の優先課題、地域とともに目指す姿を軸に、病院機能や地域特性を踏まえた退院支援の仕組みを目指し、支援を行った。

②活動成果及び評価

ⅰ．急性期病院からの入退院支援システム構築

平成 30 年度より 2 年間で取り組んだ幡多地域における「急性期から回復期リハ病床・地域包括ケア病床を経て在宅へと継続したシームレスな入退院支援システム構築」のプロセスや結果を基盤として、今年度は、安芸福祉保健所管内の仕組みづくりを 2 年計画で開始した。ガイドライン Ver.3 に沿って、基盤整備、運営メンバーを選定し、運営メンバー会議で「優先課題」「目指す姿」を検討した。会議の開催にあたっては、新型コロナウイルス感染症対策のためにオンラインを活用して実施した。本事業開始が遅れた影響から、次年度は、ステップ 2 から開始し、「入退院支援可視化シート」の作成とシートを活用した事例展開を繰り返していく予定である。

ⅱ．回復期病棟からの入退院支援システム構築とモニタリングシートの洗練化

高知市の図南病院と地域における仕組みづくりをガイドラインのステップを丁寧に踏んで、現実可能なシステムにするうえで有効な支援を継続していく必要がある。また、昨年度開発した、自施設で点検する地域病院多職種協働型入退院システムモニタリングシート（以下、モニタリングシート）を活用し、過去本事業に参加した 2 病院の入退院システムの評価とモニタリングシートの評価を行った。今後は、ガイドラインとモニタリングシートがつながる仕組みを検討していく必要がある。

ⅲ．研修事業、報告会

今年度は、上述の 5 種類の研修を開催するにあたり、集合研修の場合には人数制限を行い、アクリル板の設置、入室時の健康チェック等の感染対策を徹底した。また、一部の研修と報告会は、オンラインで実施した。特に、幡多地域からの参加申し込み者からは、移動の時間が削減できオンライン研修の継続を希望する声が多かった。今後も、オンラインを活用しつつ、効果的な展開方法について検討していく必要がある。

(4) 糖尿病保健指導連携体制構築事業

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が課題となっている。昨年度より高知県から委託を受け、「糖尿病保健指導連携体制構築事業」を開始した。本事業は、地域の特定健診ハイリスク者、糖尿病重症化ハイリスク者及び治療中断者に対して、多職種との連携･協働体制のもと継続的かつ効果的な保健指導と生活支援を行う「血管病調整看護師」を育成し、その活動を支援するものである。

今年度は、第 2 期にあたる高知県内の 5 つの基幹病院をモデルに、糖尿病療養指導士の資格を持つ看護師等を対象に育成研修会を開催した。第 6 回では第 1-2 期モデル基幹病院で事例検討会を開催した。報告会では第 1-2 期モデル病院が活動報告を行った（表 1 参照）。また、第 1 期モデル基幹病院である 2 施設の活動支援として活動に有効なツールである IM-CAG スケールの説明会と、実践状況と活動に関するフォローアップ訪問を各病院 1 回実施しコンサルテーションを実施した。さらには、血管病調整看護師の活動手順書の洗練化を目的に学内ワーキングを開催した。

活動評価としては、研修者は研修会や事例検討会を通して様々な背景をもつ患者の理解を深め、支援方法を検討し、自施設での血管病調整看護師の現状を踏まえ今後の活動の方向性を検討することができたと考える。活動手順書については来年度さらに病院の実情を踏まえながら洗練化していく必要がある。

表 1．令和 2 年度糖尿病連携体制構築事業「血管病調整看護師」育成研修会

第 1 回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 20 名 スタッフ 4 名	Web 開催/ 高知県立大学池キャンパス	2020 年 7 月 16 日 13:00～17:00
第 2 回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 17 名 スタッフ 4 名	Web 開催/ 高知県立大学池キャンパス	2020 年 8 月 27 日 13:00～17:00
第 3 回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 14 名 スタッフ 6 名	Web 開催/ 高知県立大学池キャンパス	2020 年 9 月 14 日 13:00～17:00
第 4 回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 16 名 スタッフ 4 名	Web 開催/ 高知県立大学池キャンパス	2020 年 11 月 16 日 13:00～17:00
第 5 回　「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム事例検討会 （各病院で開催）	①参加者 3 名 スタッフ 6 名 ②参加者 2 名 スタッフ 6 名 ③参加者 3 名 スタッフ 6 名 ④参加者 4 名 スタッフ 3 名 ⑤参加者 4 名 スタッフ 6 名	Web 開催/ 高知県立大学池キャンパス	①高知記念病院 1 月 12 日 ②仁淀病院 1 月 18 日 ③JA 高知病院 1 月 19 日 ④高知高須病院 1 月 29 日 ⑤くぼかわ病院 2 月 3 日

第 6 回　「血管病調整看護師」育成研修会プログラム　合同事例検討会	参加者 24 名 スタッフ 8 名	ちよてらホール /Web 開催併用	2 月 8 日 13:00～17:00
令和 2 年度度高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業報告会	参加者約 100 名	Web 開催/ 高知県立大学池キャンパス	3 月 16 日 13:30～16:30

4)　高知医療センターとの包括連携を推進する活動

(1)シミュレーション教育学習会（キャリア・サポート「シミュレーション教育事例検討会」）

高知医療センターとの包括的連携事業として7年間継続して取り組みを続けてきた。今年度は9月に「看護実践能力を高めるオンラインでの学びを支援する～インストラクショナルデザインの活用～」（講師：熊本大学大学院教授　鈴木克明氏）を開催し、41人（高知医療センター5人を含む）が参加し、インストラクショナルデザインを活用した研修設計について考える機会を得た。学んだことをシミュレーション研修に生かすために、11月に「学習評価とデブリーフィング」に焦点を当て、オンラインでシミュレーション教育セミナー（講師：東京慈恵会医科大学 救急医学講座講師　万代康弘氏）を開催した。18名が参加し、参加者自身がオンライン講義を経験し、学習者の立場を経験することで、オンラインでも相手の反応を注意深く観察しながら、進めていくことの重要性を学ぶ機会となった。学習者のよりよい成果を引き出すためには、システマティックなデザインの重要性を再確認した。

COVID-19の感染拡大の中、通常の学習会開催はできなかったが、オンラインでの開催により、前述のように一定の成果を得ることができた。また、今年実習中止を余儀なくされ、シミュレーション教育により実習を補完した他校の看護教員の参加もあり、日頃の疑問や課題を共有した。開催方法は変更しても、意図した学習を支援し、看護実践力を育成するために教育力を向上する機会とすることができた。

5)　高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

(1) 高知県新任期保健師研修会

高知県新任保健師支援プログラムの一環として、新任期保健師（1 年目～4 年目）に対する研修会（リカレント教育・ケア検討会）及びプリセプター能力育成研修を、高知県健康政策部健康長寿政策課と協働で、企画し、実施した。COVID-19 の感染拡大に伴い、プリセプター研修は、Web 会議の形式にて開催した。新任期の研修については、感染動向に応じ開催形式を変更しながら、前期と後期の 2 回実施した。

受講者は、自身の保健師活動を振り返る機会となるとともに、必要な知識や方法論をもとに保健活動の展開方法を学ぶ機会となった。可能な限りグループワークを実施することで、高知県内保健師同士の情報共有や、学びあう仲間として場を共有することができた。さらに、本研修をとおして、高知県内の行政機関に所属する保健師同士の横のつながりの強化を図ることができた。

今後の課題は、COVID-19 の感染拡大など不測の事態が生じた際の研修の内容・方法含めて検討していく必要があると考える。

研修内容の詳細は以下に示す。

研修内容

【第 1 回プリセプター能力育成研修】	日　　時：5 月 26 日（火曜日） 13：30～16：30　Web 会議 内　　容：講義 参 加 者：58 人

【第2回プリセプター能力育成研修】	日　　時：令和3年3月22日（月） 14：00～16：30 内　　容：講義・グループワーク・意見交換 参 加 者：22人
【1年目研修・個別支援】	日　　時：8月4日（火）13：30～16：30 内　　容：講義・グループワーク 参 加 者：31人
	日　　時：11月6日（金）13：30～16：30 内　　容：個別面談・講義 参 加 者：31人
【2年目研修・地区診断】	日　　時：6月12日（金）13：30～16：30 内　　容：講義・グループワーク 参 加 者：29人
	日　　時：12月17日（金）13：30～16：30 内　　容：ポートフォリオの発表 参 加 者：22人
【3年目研修・PDCAサイクル①】	日　　時：7月30日（木）13：30～16：30 内　　容：講義・グループワーク 参 加 者：30人
	日　　時：12月15日（火）13：30～16：30 内　　容：PDCA①シートの発表・グループワーク 参 加 者：23人
【4年目研修・PDCAサイクル②】	日　　時：6月22日（月）13：30～16：30 内　　容：講義・グループワーク 参 加 者：28人
	日　　時：2月7日（金）13：30～16：30 内　　容：PDCA②シートの発表 参 加 者：24人

6）　高知県の健康長寿を研究する活動

(1) 地域ケア会議　コンサルテーション事業

土佐市連携事業である、地域ケア会議推進プロジェクトで開発した「地域ケア会議運営ガイドライン」及び「地域ケア会議評価指標」の一部を用いて、高知県内各市町村で開催している地域ケア会議の質改善及びスタッフのスキルアップを目的に、依頼のあった市町村の地域ケア会議に参加した。市町村のニーズに合わせ、アドバイザー及び地域ケア会議の評価者として関わり、運営等の助言や研修等を行った。

また、昨年度高知県地域福祉部高齢者福祉課が地域ケア個別会議で抽出した地域課題から、政策形成に繋げることができるよう「高知県版地域ケア会議ガイドライン Ver.2」を作成したことを受け、講義を担当し、本ガイドラインの普及を行った。

各市町村の地域ケア会議については、開催開始時期も異なり、特に高知市においては直営の高齢者支援センターの開催ではなく、それぞれが抱えている課題が異なる。そのため、課題をともに共有し、解決に向けどう取り組んでいくのか話し合いをもとに実施、評価していく必要がある。今後も、市町村の地域ケア会議の発展過程をみすえ、関わっていく必要がある。

特に今年度は、上述の「高知県版地域ケア会議ガイドライン Ver.2」に基づく講義を担当し、研修時の情報交換において、いくつかの課題が明確になった。特に、地域課題から政策形成に繋げることの課題や会議の持ち方について困難を抱えていることが明らかになった。今後も、高齢者福祉課と協働しながら、支援を継続していく必要がある。

11. 高知県立大学県民大学学生プロジェクト「立志社中」の採択と活動

概要

令和 2 年度は、いけいけサロン活動、グローバルクラブ、健援隊 Bravo・Charlie チームの 3 団体が看護学部の学生を主体とした団体として採択された。

本年度は、世界的な COVID-19 の感染拡大に伴い、立志社中の募集開始が延期され、採択され活動が開始された後も、国内および県内の感染状況にあわせての活動となった。政府等の広報などで、大学生を含む若者の動向が感染拡大に大きく影響していると周知されていたこともあり、学生からは活動を行うことで万が一感染を広げることへの不安や地域の方へアクセスすること自体に躊躇する様子もみられた。

このような状況下で、各団体は、ICT を用いた活動や広報誌の配布、情報収集を中心にした活動など新たな手法を用いた活動を模索した。また、学生課や立志社中事務局の指針に沿って活動を行った。

来年度以降への課題として、前期の新入部員募集期間が遠隔授業と重なり、来年度の活動の中心となる 1 回生の募集が大幅に縮小した団体もあり、学年間での活動の継承が課題になると考えている。

1) 健援隊プロジェクトの活動

健援隊は、立志社中プロジェクト開始当初から設立され、今年で 7 年目の活動となった。コロナ禍で活動制限がかかる中、これまでの活動で築いてきた地域の方々との繋がりが維持できるよう、紙媒体を通じて健康意識を高める活動を 2 チーム合同で立志社中に申請し、実施した。これに伴い、本年度の活動は、手紙の英語の頭文字の L を基に、例年の方針に従い Phonetic code を用いて、Lima プロジェクトと命名した。

Bravo チームは、香美市物部町神池で 2 か月に 1 回、レターを通じて健康行動の普及活動の継続と、近況報告をして互いの状況を知らせ合う活動を行った。また、新たに香美市物部町柳瀬からの依頼も受けて、住民の方のニーズ調査を行い、その結果、住民の方から防災や健康行動について知識の普及を求めるニーズがあることが明らかになった。

Charlie チームは、新たに五台山保育園へアクセスし、保育士から幼児の健康ニーズを伺い、排便習慣の獲得を促進するレターやチェック表を作成した。そして、感染予防のため保育園訪問ができないため、レターやチェック表を用いた園児への教育を保育士に依頼した。その結果、排便へ興味が促進され、便の形状を知らせたり、よい排便習慣を獲得するための食事や水分の摂り方について、子どもからの発信が増えた。また同様の活動を土佐山田幼稚園でも行った。

今年度の活動で、COVID-19 で活動制限が必要になり、直接地域の方と対面して交流する機会をもてなかった一方で、健康意識の向上という点で繋がり、新たに交流を始めた住民の方々もいて、住民が学生に求める健康ニーズも明らかになった。次年度もコロナ禍という難局を、学生の創意工夫で乗り越え、地域のニーズに応える活動を継続、開発したいと考えている。

2) いけいけサロンの活動

「いけいけサロン活動」は、看護学部 2 回生 12 名、3 回生 5 名、4 回生 5 名の計 21 名で活動する結成 6 年目のチームである。このチームは平成 27 年 5 月、「地域の高齢者の方と一緒に交流したい」という看護学部学生と、住民の方の声があがり、‘地域サロン’を立ち上げたことで開始された。活動地域は高知市池地域である。令和 2 年度は、活動目的「地域全体でつながった温かい空間の中で共に学び日常の刺激となる」のもと、活動を展開した。「学ぶ姿勢」を持ち、「池地域

の住民の方と柔軟なスタイルで」、「住民の方と学生、一人ひとりに寄り添う」ことを掲げ、COVID-19 の影響下でも、楽しめる活動を検討した。

このグループは、従来から住民の方と学生が直接顔を合わせることを大切にしてきたため、コロナ禍のなかで直接会えなくてもできることを 2 回生メンバー中心に活動内容が検討された。なぜ、顔を合わせることが大切と考えてきたか、を問い直し、今年度は住民と学生の「交換日記」にて、これまでにできた交流を絶やさないことを決めた。他にも毎月届けるサロン休止のチラシには、学んだばかりの衛生的手洗いの内容を写真付きで掲載し、地域の感染予防にも取り組んだ。電話で交流を図ったり、地域の方の学生への応援メッセージが書かれた色紙が届いたり等、コロナ禍のなかで互いの思いを伝えあえた 1 年だったように感じる。

これらの活動から学生は「会えない状況でも、これまで築いてきた住民の方と学生の信頼関係・つながりを大切にすることで環境が変わっても住民の方との活動を続けていくことができる」と学び、地域の方に感謝の気持ちを持って、次年度へ続くよう活動が続けられている。この 1 年、互いに対面できないなかでの活動であったが、形を変えても、相互の思いやりを持った時間を過ごせていたように感じる。今後の展開に期待したい。

3) 「立志のたまご」グローバルクラブの活動

令和元年度後期に「立志のたまご」として採択されたグローバルクラブは、令和 2 年度から「立志社中」として活動を開始した。令和 2 年度は、COVID-19 感染予防対策のため、地域でのフィールドワークや情報収集が困難な時期が長かったが、高知で生活する外国の方の実態について県内 1 カ所でインタビューする機会を得て、予防的保健行動についての知識・理解・情報が十分でない対象者への健康講座や、災害時にパニックにならない対応についての知識普及の具体的な方法や媒体の開発を検討することができた。

今後さらに、子どもをとりまく現代的課題だけでなく、受講者の学びのニーズを捉えながら、講習内容や教授方法を工夫し受講者の確保に努めていきたいと考える。

12. 学生のボランティア活動

1) ボランティア活動への支援

高知県立大学看護学部では、教員と学生が積極的に地域社会のボランティア活動に参加している。学生のボランティア活動を支援・促進し、人間や社会への関心を高め、さらに主体性の育成を支援するため、教員 2 名がボランティア委員として活動している。ボランティア委員は、ボランティアを募集する機関・団体と学内教員との橋渡しや、高知医療センターとの活動調整を行っている。以下、本年度のボランティア活動への支援について報告する。

(1) ボランティア活動に関するガイダンス

高知県立大学看護学部で年間を通したボランティア活動について、4 月のオリエンテーション時に各学年へ資料を配布した。また、1 回生に対しては、6 月に Zoom ミーティングで開催されたクラス会にてボランティア活動について説明を行った。

具体的な紹介内容は以下の通りである。

①看護学部に関わりのあるボランティア活動の紹介

②高知医療センターでのボランティア活動について

③ボランティア活動保険について

(2) ボランティア活動に参加する学生への支援

COVID-19 のため、令和 2 年度はボランティア活動への参加の機会はなかったが、活動再開に備えて 1 回生を対象としたガイダンスを実施した。

①ボランティア活動に参加する学生のためのレクチャー・ガイダンスの実施

②学内におけるガイダンス：車いす介助・視覚障がい者のガイド（11 月に 1 回生を対象に 4 回実施、計 81 名参加）

(3) 学外ボランティア募集に関する学生への情報提供

ボランティア募集のあった以下の団体・イベントの情報について、キャンパスポータルサイト等を利用し、学生に情報提供を行った。

①令和 2 年度学習チューター派遣事業

2) 高知医療センターでの活動

例年は、高知医療センターのボランティア組織「ハーモニーこうち」の活動に参加していた。

本年度は、COVID-19 のためボランティア活動は中止となった。次年度以降、活動が再開された場合には学生が継続的にボランティア活動に参加できるように支援していく。

13. 戦略的研究プロジェクト推進費による活動

テーマ２：地域課題の解決を目指す研究

事業名「高幡保健医療圏における精神障害に対応した包括的支援マネジメントモデルの開発」

研究代表者：瀧めぐみ
共同研究者：田井雅子、藤代知美、小原弘子
稲垣佳代（社会福祉学部）

1） 事業趣旨

精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができるよう「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築」を目指すために、これまでに展開されてきた地域の実情を踏まえた方策を検討する必要がある。高知県では、精神障害者が地域で生活するために必要となる医療、障害福祉・介護などは、中央保健医療圏に集中しており、特に高幡保健医療圏は、患者数に比べて医療機関の数が少ない。そのため、症状が悪化した際、精神科救急として 24 時間対応できる病院がなく、身体的・精神的・経済的負担により、安心して自分らしい暮らしをすることは他の保健医療圏と比較して困難な状況にあると考える。

本研究では、高知県中央保健医療圏より高幡保健医療圏に退院する精神障害者への包括的支援マネジメントの現状と課題を明らかにし、地域の状況に即した精神障害者への包括的支援マネジメントモデルを作成する。

2） 活動

令和 2 年度は、研究目標 1「高幡保健医療圏における精神障害者への包括的支援マネジメントの現状と課題」を明らかにするための面接調査の成果をもとに、「高幡保健医療圏における精神障害者に対応した包括的支援マネジメントモデル」を作成し、検証することを計画していた。しかし、研究力を依頼する施設では、COVID-19 への対応が最優先されていたため、データ収集を延期し、代替えとなる研究方法を模索した。

そのため、令和元年度の計画としていた研究目標 1 は、対面以外でのインタビューの方法を変更してデータ収集を行い、現在データ分析を進めている。また、研究目標 2「高幡保健医療圏における精神障害者に対応した包括的支援マネジメントモデル」については、先進的に実践している他県でのヒアリング調査やフォーカスグループインタビューの方法は変更し、モデルを活用した包括的支援の実施は行わず、モデル案を作成し、洗練化することを最終目標とした。

3） 成果

中央保健医療圏の精神科病院に勤務している看護師・精神保健福祉士 3 名、高幡保健医療圏で生活する精神障害者を支援している保健師・訪問看護師・精神保健福祉士・相談支援専門員 10 名に面接調査を令和 2 年 8 月までに行った。面接調査のデータについては、中央保健医療圏の精神科病院から高幡保健医療圏に退院する精神障害者に行っている支援内容と、高幡保健医療圏で生活する精神障害者の地域定着のために行っている支援内容、これらの支援を行う上での課題という視点で分析を行っている。現在、データの分析を進めながら、各市町村や精神科病院ごとの特徴についてカテゴリー化を進めている。

今後はデータ分析より明らかになった高幡保健医療圏における精神障害者への包括的支援マネジメントの現状と課題を基にして、モデル案の作成をしていく予定である。

テーマ３：災害に関する課題の解決を目指す研究

事業名「新型コロナウイルス禍における人々の健康維持に向けたケア方略」

研究代表者：渡邊聡子
共同研究者：森本悦子　高谷恭子
岩崎順子　中井あい

本事業の目的は、新型コロナウイルス禍における人々の健康と生活の実態を調査し、ヘルスケアに関するニーズならびに問題点を明確化するとともに、ケア方略および今後の備えについて検討することである。調査の対象者は、新型コロナウイルス禍にある人々であり、特に、身体・情報、判断・対応力の面でハンディをもつ人々として、具体的には、高齢者、在宅療養者、有病者、妊婦および育児中の女性（産後１ヵ月）、聴覚障がい者、情報弱者になりやすい在日外国人である。

令和２年度は、第１段階として、COVID-19 およびパンデミックに関する文献検討を行い、研究の動向と課題を把握するとともに質問紙の作成を行った。その後、本学の倫理審査を経て、COVID-19 の拡大状況をみながら、12 月よりデイサービス、訪問看護ステーション、医療施設に研究協力依頼を行い、現時点では、デイサービス、訪問看護ステーション、医療機関合わせて 23 施設より同意が得られ、合計 698 部の質問紙を研究協力機関に配布した。調査期間は令和３年５月 31 日としている。

作成した質問紙は、文献検討の結果から次の６項目：Ⅰ．基本属性（8 項目、該当者のみの項目-2 項目）、Ⅱ．感染予防行動、健康行動および知識レベル（19 項目 - 4 または 5 段階リッカート尺度・選択・自由記載）、Ⅲ．健康状態および生活の変化（36 項目 - 5 段階のリッカート尺度）、Ⅳ．健康への影響（4 問 - VAS 尺度）、Ⅴ．新版 STAI（40 項目 - 4 段階リッカート尺度）、Ⅵ．生活上の工夫および価値観の変化（2 項目・自由記載）、を含めた。質問項目Ⅰ・Ⅱ・ⅢはCOVID－19 および災害関連の既存文献を参考にして、独自に作成した。Ⅳは、Yassa ら（2020）および Durankus ら（2020）を参考に改変を加えた。Ⅴは、新版 STAI（STAI-JYZ）を用いた。

次年度は、調査対象を聴覚障がい者および在日外国人に広げ調査を実施する。また、調査結果を分析し、新型コロナウイルス禍におけるケア方略と備えについて検討する。さらに、第２段階として、第１段階で検討したケア方略の妥当性について、ケア提供者を対象にインタビューを行い、精錬化のための調査を行う。

テーマ３：災害に関する課題の解決を目指す研究

事業名「災害時意思決定支援モバイル・ツール開発のための基礎調査-被災地における看護有資格者の医療知識／技術情報ニーズについて」

事業代表者：木下真里
共同研究者：山田覚、神原咲子、田之頭恵里
敷田幹文（高知工科大学）

1） 活動概要

本プロジェクトは、自然災害などで被災した看護有資格者が、自身が属する地域の災害救援活動に参加する際にどのような医療知識や技術情報を必要とするかを明らかにすることを目的として令和元年度より実施している。

今年度は、高知工科大学より敷田幹文教授の参画を得て、本研究の知見を盛り込んだモバイル・ツールの開発に向けて前進した一方で、前年度に始まった COVID-19 拡大の影響から、プロジェクトのコア・コンポーネントであった国内外調査が中止となり、計画に大幅な見直しが必要となった。

2） 活動成果

看護有資格者の医療知識／技術情報ニーズを推測する基本データが得られた

中止となった国外調査の代替手段として、携帯アプリ Disaster Nursing (米国 UnboundMedicine 社)の分析から災害看護で参照される可能性のある情報の候補を選び出し、その中から重要なものを選び出す Web 調査を令和 3 年 2 月より実施した。この結果、災害時に被災地の看護職が必要とする情報の傾向が明らかになった。

モバイル・ツール COACHES の基本デザインが作成された

上述のウェブ調査の結果及び、メンバー等関係者との活発な議論を経て、看護有資格者などの医療従事者の協力によって全被災者の健康状態を匿名で悉皆的に調査し、クラウド上のデータベースに保存、関係者で共有する情報システム COACHES (Community Oriented Approaches for Comprehensive Healthcare in Emergency Situations)の基本デザインが決定した。

COACHES を国際的に提案した

COACHES の提案を、Johns Hopkins University の Gilbert M Burnham 氏、Tener Veenema 氏、香川大学医学部の Roger Ngatu 氏らと共有を開始した。Roger Ngatu 氏とは、さらに日本と中央アフリカ地域とで COACHES を導入する共同研究を企画した。

さらに、COACHES の有用性について論じた原著論文[1]の、米国の災害保健医療専門誌である Disaster Medicine and Public Health Preparedness 誌への採用が決定した。近日中に論文を無償公開(Open Access)することにより、国際的な意見交換のプラットホームが形成される。

テーマ４：地域や臨床、自治体、産業等の組織や実践者とともに課題解決を目指す共同研究

事業名「大学-臨床連携システムによる感染症に対する地域包括的な対応能力の向上」

研究代表者：大川宣容

共同研究者：木下真里、坂元綾、神家ひとみ

田鍋雅子、西川美千代、山﨑みどり（高知医療センター）

1） 背景

高知県内では、令和 2 年 2 月末に最初の感染者が報告されて以後、令和 3 年 3 月 20 日までにのべ 912 名が感染し、うち 19 名が死亡した。この間第 4 波までの感染者増加の波を経験したが、第 2 波の終了から 70 日間以上感染報告ゼロを維持するなど、全期間の 6 割は新規感染者ゼロで推移した。一方で、地域や医療現場では、業務体制変更に対する戸惑い、物資や人員不足、院内感染や福祉施設等でのクラスター発生、感染者やその家族、医療従事者に対する差別など、特有の課題の発生が懸念された。

そこで、高知県内で最多の COVID-19 感染者の診療を受け入れた高知医療センターと高知県立大学は連携をして COVID-19 など重大な感染症に対する地域全体の対応能力の向上を目指す共同研究を実施することとした。

2） 活動

① 高知医療センターにおける COVID-19 受け入れの振返り

プロジェクトでは、令和 2 年 9 月～11 月の 3 回に分けて、高知医療センターにおいて COVID-19 受入れに関するスタッフ対象の振返りワークショップを実施した。ワークショップでは、国際協力で用いられる参加型手法であるプロジェクト・サイクル・マネジメント(Project Cycle Management, PCM)手法を取り入れることにより、上司や部下、同僚の前で意見を述べることに対しての抵抗を少なくし、全員で課題を共有することを可能にした。

② 医療従事者の心情と関連する要因の調査

令和 2 年 9 月から、高知医療センターで COVID-19 対応にあたったスタッフからの個別聞き取り（In-depth Interviews）を行った。また、令和 2 年 11 月～12 月と令和 3 年 3 月と 2 回に分けてアンケート調査を実施し、感染症受入れに対する専門職者の心情や、関連する要因、意見の推移を調査した。

3） 成果

本研究で実施したワークショップをきっかけに、高知医療センターでは担当部署の対応マニュアルの見直しが行われた。

3 件のスタッフ・インタビューが実施され、のべ 90 分にわたる、受け入れにあたったスタッフの心情を掘り下げたデータが得られた。第一期アンケート調査では、合計 279 件の回答が得られ、自由記述欄に専門職としての率直な思いの表出が散見された。

高知県内では、現在までいずれの医療機関においても医療崩壊という危機的な事態は免れているが、この共同研究プロジェクトによって得られたさまざまな知見は、医療体制崩壊の防止、地域での感染症対策に関する意識向上や体制増強のための取り組みに活用可能な示唆が得られた。

テーマ 5【学長提案事業】授業の教育目標を評価し、教育の質の向上に資する研究

事業名「学部教育における DP に対応した能力獲得を目指す学修成果の可視化と評価」

研究代表者：久保田聡美

共同研究者：池添志乃、内川洋子

本事業は、戦略的研究プロジェクトにおけるテーマ 5【学長提案事業】“授業の教育目標を評価し、教育の質の向上に資する研究”の位置づけで取り組まれた活動である。研究目的は、各授業科目で設定している到達目標の適切性を明らかにすることである。学生の視点から目標がどの程度到達されたかを評価し、教員の視点から設定した目標が達成できたか、適切であったかを問うことで授業目標の適切性を評価することを目的とした。

本年度は、前年度調査対象科目に選定された専任教員の必修科目のシラバスの達成目標を抽出した。質問項目は、全科目共通の質問項目を問 1「シラバスの達成目標は、学生に明確に示されていた」に設定し、問 2 以降は、当該科目のシラバスに記載されていた達成目標毎にその達成の程度を 4 段階リッカート尺度（4～1 点）で問う形式とした。従って、質問項目は、科目の達成目標の数に対応し 3～10 項目であった。学生への依頼は、学内のポータルサイトシステムよりメッセージにて依頼した。依頼メッセージには、研究への自由参加と匿名性の保証および成績評価とは無関係であることを明記し、オンライン学習管理システム（UOKLMS）の看護学部 1 回生～4 回生専用のコースのフィードバック機能にアクセスする URL を記載し、回答者の負担軽減に努めた。回収数は、科目や学年によりバラツキがあるが、1 回生前期 6 科目後期 9 科目延べ 460、2 回生前期 11 科目後期 10 科目延べ 509、3 回生前期 12 科目後期 9 科目延べ 240　4 回生 9 科目延べ 174 であった。回収率の平均は、27.1%（1 回生 37.9%、2 回生 32.9%、3 回生 14.8%、4 回生 23.6%）となった。

全科目共通質問である、シラバスの達成目標の明記について科目、学年間で比較すると、表 1 の結果となった。科目間の平均値の比較結果においても、1 回生：3.4-3.8、2 回生：3.5-3.9、3 回生：3.5-4.0、4 回生：3.6-3.8 であり、概ねシラバスの達成目標は学生に明確に示されていた。

表 1　問 1 の学年間比較結果

	調査科目数	平均値	標準偏差
1 回生	15	3.7	0.6
2 回生	21	3.8	0.4
3 回生	21	3.7	0.4
4 回生	9	3.7	0.5

今後は、科目毎の学生の回答結果を看護学部の教員にフィードバックし、教員と学生の両者の視点からシラバスの適切性と目標の到達度の評価を実施していく。その結果を次年度のシラバスの達成目標を学生の学習成果を意識したものに改善していきたい。

16. 看護学部ニュースレターの発行

看護学部では、平成 23 年度から、看護学部学生生活通信『fure-fure』を年 2 回、保護者の皆様に向けて発行している。『fure-fure』とは、学生を応援する気持ちと、学生が誰かを応援できるようになる願いを込めて名付けたものである。学生一人ひとりの学びの過程を教員が見守り、個性を尊重した教育を大切にし、人と人とのつながりを大切にする校風の中で、学生が力強く歩んでいる姿、エネルギー溢れる学生生活を伝えている。

令和 2 年度は 9 月に第 19 号、3 月に第 20 号を発行した。第 19 号では、藤田学部長が保護者の皆様への挨拶と、コロナ禍においても進めている看護学部としての「持続可能な開発目標：SDG s」への取り組みについて紹介した。また 6 月に開催した第 25 回日本在宅ケア学会学術集会長を務めた森下教授から、web 上での live 配信にもかかわらず全国から大勢の参加者があったこと、本学在校生も多職種による講演や先駆的な取り組みの報告を通して新たな知の創造に繋がる機会となったことが紹介された。各学年担当からは 4 月から遠隔授業が主体となったなかでも、学生各々が精一杯工夫して取り組む様子が伝えられた。大川教授からは、4 回生の総合実習が学内で行うことが決定して以降、教員が試行錯誤しながら感染予防行動の徹底とオンライン教材を駆使した教育の工夫を行ったこと、また地域災害学生ボランティアセンターの活動内容が紹介された。第 20 号では、コロナ禍における学生支援を中心に、まず本学学生支援部の中山部長より、「学生生活を支える」ために行ってきた学修機会の確保や経済的な諸支援について、さらに健康管理センターの 2 名の保健師の方より、センターが継続して行っている感染予防対策と健康管理についてご紹介いただいた。瓜生教授は、「学びを守る」ハイブリッド型授業の取り組みについて、遠隔授業と対面授業を交えながらの学習環境の具体を紹介した。さらに「つながりを保つ学生の活動」として、1 回生がコロナ禍においても新しく立ち上げた手話サークルの活動を紹介した。各学年の学生生活については、学内演習や対面授業での学習の発表の様子、領域実習の総括、国家試験出発の様子などを学年担当より紹介した。

この学生生活通信が大学からの一方通行にならないように、保護者の皆様からご意見をいただくための連絡窓口のメールアドレスを学生生活通信に掲載し、保護者との連携体制を築いている。今後は、大学のホームページを通じて適宜の学生生活の情報を広く周知していただけるような仕組みへと発展させることを課題と考えている。

17. 高知県看護協会との連携―生涯学習の拠点としての役割

1)　看護協会役員および委員

本学の教員は高知県看護協会の役員および委員の役割を担っており、高知県の看護の質を高めるために各分野において活動を行ってきた。令和 2 年度は 12 名の教員が以下の委員を担当した（表 1 参照）。

表 1　高知県看護協会役員・委員・受託事業担当者

役員・委員名	教員名
高知県ナースセンター運営協議会　委員	藤田　佐和
第 1 副会長	森下　安子
在宅ケア領域看護師研修検討会　委員長	
特別委員会：地域包括ケア検討委員会　委員	
常任委員会：災害看護委員会　委員	竹﨑　久美子
新人看護職員研修検討会　委員長	長戸　和子
常任委員会：認定看護管理者教育運営委員会　委員	山田　覚
保健師助産師看護師実習指導者講習検討会　委員	森本　悦子
職能委員会：助産師職能委員会　委員	嶋岡　暢希
高知県小児救急電話相談事業　委員	高谷　恭子
在宅ケア領域看護師研修検討会　委員	森下　幸子
職能委員会：保健師職能委員会　委員	小澤　若菜
特別委員会：ナースセンター委員会　委員	
特別委員会：3 職能生きる力を育むいのちの教育検討委員会　委員	
特別委員会：看護研究倫理審査委員会　委員	西内　舞里
常任委員会：研究学会委員会　委員	三浦　由紀子
特別委員会：3 職能生きる力を育むいのちの教育検討委員会　委員	

2)　研修会および講習会

(1) 認定看護管理者研修

本年度は、ファーストレベルが開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となった。

(2) 高知県保健師助産師看護師実習指導者講習会

看護教育における実習の意義ならびに実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導ができるように必要な知識、技術を習得することを目的に開催された。15 名の教員が講師として参加した（表 3 参照）。

表 3　高知県保健師助産師看護師実習指導者講習

科目	時間数	教員名
看護論	3 時間	森本　悦子
看護理論の実践への活用	3 時間	
ロイ看護論	3 時間	西内　舞里
セルフケア理論	3 時間	藤代　知美

小児看護学	3時間	高谷　恭子
看護倫理	3時間	有田　直子
ヘルスプロモーション	3時間	小澤　若菜
精神看護学	3時間	田井　雅子
在宅看護学	3時間	川上　理子
母性看護学	3時間	渡邊　聡子
看護過程	3時間	瓜生　浩子
	3時間	中井　美喜子
看護過程における援助論	3時間	内川　洋子
老年看護学	3時間	竹﨑　久美子
看護研究	6時間	池添　志乃
家族ケア	3時間	坂元　綾

(3)臨床看護研究基礎研修

本研修は、①臨床における看護研究の意義と研究的視点を学ぶ、②看護研究の基礎知識やプロセスを学ぶ、③看護研究の臨床への活用について学ぶ目的で開催予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため中止となった。

(4)高知県看護協会の教育プログラムにおける講師

高知県看護協会が主催する看護職員現任者を対象とした教育プログラムにおいて、7名の教員が講師として参加した（表4参照）。

表4　現任者を対象とした教育プログラム

研修名／内容	時間数	教員名
新人助産師合同研修プログラム／助産師として災害に備える	3時間	渡邊　聡子
新人助産師合同研修プログラム／周産期医療の動向　職業倫理	5時間	嶋岡　暢希
地域包括ケア推進のための人材育成研修プログラム／ 在宅移行期の看護師の役割～看護ケアでつなぐ在宅移行～	6時間	森下　安子
医療的ケア児等支援者・医療的ケア児等コーディネーター養成研修／ 総論・支援に必要な概念	1時間 30分	佐東　美緒
高知県看護協会継続教育研修／ 【意思決定を支える力】ラダーレベルⅡ～Ⅲ　事例を通して学ぶ看護倫理	3時間	三浦　由紀子
在宅緩和ケア従事者研修／ 在宅療養者の人生とともに歩む看護ケアについて	6時間	内田　雅子
実地指導者研修／ 実地指導者としての「看護技術指導」のスキルを身に着けよう！	6時間	大川　宣容

(5)災害看護支援ナース育成研修

8年目となる「地域災害支援ナース育成研修」は、令和2年度は初回受講者編3回、継続受講者編3回の開催を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の状況を勘案し、開催予定時期に比較的近隣の感染状況が落ち着いている2地区支部でのみ、継続受講者編を開催した。継続受講者編では、すでに主催地区支部が中心となり、最寄りの医療機関のDMATメンバーを講

師とする、START 法、また PAT 法の修得を中心とした研修が開催されており、地区支部ごとの近隣のつながりが形成されていることが伺える。

本学の研修への関与としては、2019 年度に県協会災害看護委員会が完成させた『広域自然災害発生時における災害支援ナース受援ガイドライン（医療施設編）』について、内容を周知するための研修会開催を支援した。上記の「継続受講者編」が午前に開催された須崎･窪川地区支部、高知市中央 1 地区支部において、同日午後にそれぞれ開催した。

この受援ガイドラインは、災害発生後も診療活動が継続することを決断した医療機関において、地域災害支援ナースや全国からの災害支援ナースの応援を上手に受け入れ、自施設の復旧をはかりながら、入院患者の対応、新たな要医療被災者の受け入れなどを継続するための、平時の備え、また発災後の対応の仕方について、まとめている。従って研修会の主旨としては、ガイドラインに則して、自施設の受援体制（支援の受け入れ態勢）について、有り方を共有し、互いにアイデアを出し合う場にすることである。実際の受講者も、看護部内で病院の災害体制を検討する立場にある人や、看護管理者が受講される。が、半数から 3 分の 2 は、支援者として応援に入る立場になると考えられる受講者が占めており、現時点では、支援者側からも自分たちをどのように活用してもらうかを提案するなど、主体的に活動できる支援ナースになってもらうことも主旨に含めることにしている。特に、活動期間に明確なルールはない地域災害支援ナースの場合、「1 週間単位で、組織の受け入れ窓口の担当者と相談しながら活動を継続する事」などを強調している。

令和 2 年度は、感染症という新たな種類の広域災害を経験することとなった。今回の経験を今後の新たな災害への備えにつなげていかなければならない。本学として、引き続き、高知県看護協会の活動を支援していく必要があると考えている。

18. 各領域の活動

＜がん看護学領域＞

1.　社会貢献活動

1）ケア検討会

看護相談室の事業の一環として、地域の看護者とがん看護学領域の大学院生とともに、がん患者と家族へのケアの質向上を目指して、継続的に「質の高いがん看護勘後実践を検討する会」を開催している。令和 2 年度は、「今後の治療や療養につなげる症状マネジメント」をテーマに、第 1 回「がん患者の身体症状のマネジメントに困難を感じた事例」、第 2 回「がん患者の精神症状やスピリチュアルな苦痛症状のマネジメントに困難を感じた事例」をサブテーマに開催を企画していた。しかし、本年度は、COVID-19 の影響により対面・集合による事例検討が難しく、開催ができなかったため、次年度の開催に向けて準備を行った。令和 3 年度は同じテーマで、コロナ禍においても地域の看護職の皆様が安心して参加できるように遠隔での開催についても検討し、実施していく必要がある。

2）卒業生との交流会およびリカレント教育

がん看護学領域では、①がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、②修了生のネットワークづくりを目的として、がん看護学領域修了生の会『アストラル』を発足し、活動を行っている。アストラルは、①学習会の開催、②メンターシップ、③メーリングリスト等による情報共有、④学会参加、⑤研究、⑥ホームページ・アストラルのブログ作成という 7 つの活動を通じて、アストラルの繋がりの強化と発展を目指している。令和 2 年度は、コロナ禍の中でもアストラル学習会を開催できるように検討し、Zoom ミーティングを活用して遠隔での開催に取り組んだ。

【第 1 回】事例検討会

日　時：2020 年 12 月 12 日（土）14:00～15:30

場　所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟 C326・Zoom ミーティング

参加者：13 名（修了生 11 名、教員 2 名）

テーマ・事例提供：

「終末期がん患者の家族支援に戸惑いを感じた同僚看護師との関わり」

社会医療法人仁生会 細木病院　藤田 歩　氏

【第 2 回】事例検討会

日　時：2021 年 3 月 20 日（土）13:00～14:30

場　所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟 C326・Zoom ミーティング

参加者：12 名（修了生 9 名、大学院生 2 名、教員 2 名）

テーマ・事例提供：

「妊娠 35 週で ALL を発症した AYA 世代患者の骨髄移植の意思決定に向けた関わり」

高知大学医学部附属病院　がん看護専門看護師　小松　美帆　氏

本年度は、遠隔で開催したことにより、県内外の修了生やがん看護専門看護師が参加することが可能となった。次年度も Zoom ミーティングを活用した事例検討会の企画を検討し、全国の修了生の参加を募るとともに、遠隔で効果的な事例検討ができるように方法を工夫し、支援していく。

3）がん看護学領域特別講義

がん看護学領域では、大学院生や修了生を対象とした特別講義を継続して開催している。特別講義では、修了生が後輩である大学院生や修了生に対して、修了後の役割開発のプロセスや日頃の OCNS としての実践活動について語る機会を提供している。

今年度は COVID-19 の影響により講師を招くことができず、開催に至らなかった。次年度は Web 開催を検討し、学びを継続させていく予定である。

4）高知県がん教育推進協議会における活動

がん対策推進基本計画に、がん教育・がんに関する知識の普及啓発が課題にあげられており、各都道府県でがん教育への取り組みが行われている。高知県では、高知県がん教育推進協議会において、がん教育の内容を充実させ、がんに関する正しい知識を理解し、がんを学ぶことを通して健康といのちの大切さに気づくことを目指し、様々な取り組みが行われており、本学の教員も参画している。令和2年度は、がん教育総合支援事業「本山町内学校保健委員会研修会」の講師および外部講師派遣事業の講師として県内の3つの高校において、4名の教員が高校生および職員を対象にがん教育を実施した。

① 本山町内学校保健委員会

日時：2020 年 7 月 28 日（火）16:00～17:00

対象：小・中学校の管理職、養護教諭、保育所所長、本山町健康福祉保健師、教育長他 18 名

講師：高知県立大学看護学部　藤田　佐和

内容：今、なぜ「がん教育なのか」-がん教育の必要性と効果的な健康教育の進め方-

② 高知県立高知北高等学校

日時：①2020 年 7 月 5 日（日）16:10～17:00
②2020 年 7 月 8 日（水）16:10～17:00

対象：①②通信制 50 名

講師：①高知県立大学看護学部　田之頭　恵里
②高知県立大学看護学部　庄司　麻美

内容：がんの基礎知識、がんと生きる、がん検診の大切さに関する授業

③ 高知県立須崎総合高等学校

日時：2020 年 12 月 15 日（火）14:30～16:00

対象：1 年生 134 名

講師：高知県立大学看護学部　森本　悦子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、がんと生きるに関する授業

④ 高知県立山田特別支援学校高等部

日時：2021 年 2 月 16 日（火）11:30～12:15

対象：高等部 86 名

講師：高知県立大学看護学部　有田　直子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、たばことがんに関する授業

本年度初めて外部講師派遣事業に参画し、一定の教育効果や貢献はできたと考える。しかし、学校ごとの評価や振り返りが不十分であり、高知県や高校の担当教員と連携をとり、学校や学生の特性および課題に応じて講義内容や方法を工夫するなど、よりよりがん教育に向けて取り組む必要がある。

2.　研究活動

令和 2 年度は、2019 年度にがんプロフェッショナル養成基盤推進プランの一貫として開講したがん高度実践看護師コースⅠ・Ⅱの教育効果について分析を行い、「『がん高度実践看護師コースAYA 世代がん患者のケアとキュア』における看護介入モデルの作成を取り入れた教育効果」としてまとめ、高知県立大学紀要看護学部編に投稿した。次年度は、領域で取り組んでいる科学研究費基盤Ｂの分析を進め、結果を公表できるように取り組む。

＜慢性期看護学領域＞

1.　社会貢献活動

1)　高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業の実施

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に令和元年度より高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

(1)　第 2 期モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化（5 施設）

第 2 期モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化として、web 会議システムを活用した血管病調整看護師の育成研修を 6 回実施した。また県に地域連絡会の開催を要請した。

(2)　第 1 期モデル基幹病院の活動支援（2 施設）

第 1 期血管病調整看護師活動支援として、活動に有効なツールである IM-CAG スケールの説明会と、実践状況と活動に関するフォローアップ訪問を実施し相談支援を行った。

(3)　活動手順書の洗練化

医療機関で糖尿病看護にあたる看護師がハイリスク患者に対して行う生活指導や関係機関との地域連携等を行うため、昨年度作成した活動手順書をさらに洗練化するために、学内ワーキングを開催した。

(4)　事例検討会及び合同事例検討会の開催

第 2 期モデル基幹病院 5 施設に対し、web 会議システムにて事例検討会を開催した。後日、第 1 期・第 2 期モデル基幹病院 7 施設に対し、対面及び遠隔にて合同事例検討会を開催し、血管病調整看護師の患者への理解を深めるために、社会的決定要因を内包した事例報告と、第 1 期モデル基幹病院からの活動報告を行った。

(5)　事業報告会の開催

事業報告会は、COVID-19 の感染拡大の可能性を受け、参加者や地域の皆様への健康と安全を考慮し、web 開催とした。

2)　令和 2 年度リカレント教育の開催

慢性期看護領域では、2019 年度から高知県からの受託事業である糖尿病保健指導連携体制構築事業の昨年度の活動を高知県内の医療職者に知っていただき、事業への参加、およびネットワークづくりを目的に活動報告会を開催した。

日　時：2020 年 9 月 19 日（土）13：30～15：30

方　法：高知県立大学池キャンパスをホストに Zoom を用いた開催

発表者および内容

①令和元年度糖尿病保健指導連携体制構築事業について

高知県立大学看護学部　教授　内田雅子

②血管病調整看護師の取り組み

高知県あき総合病院　病棟看護師長・血管病調整看護師　川竹実佳氏

佐川町立高北国民健康保険病院　病棟副看護長・血管病調整看護師　国澤忍氏

③質疑応答

参加者：34 名（看護師 31 名、保健師　3 名）、教員 4 名

2 施設から血管病重症化予防としての 2019 年度の活動だけでなく 1 年目から 2 年目へと発展した活動となっていることを紹介していただいた。質疑応答では、介入が必要な対象者が多いこと、限られた人材でどこまで支援できるのか、多くの該当者からどのように対象者を絞る

のか、多忙な業務の中で継続して活動できる仕組みづくり、地域の保健師の方々との連携の仕方など、報告者と参加者との間で活発な意見交換がなされた。

① 研究活動について

2017～2018 年度に実施した高知県立大学学長助成事業・戦略的プロジェクト研究 「高知県の血管病ハイリスク群への重症化予防推進モデルの開発―慢性疾患看護専門看護師による病院と地域の看看連携を中心に―」（study Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで構成）の成果の一つである「高知県における生活習慣病重症化プロセスにおける社会的決定要因の影響」を報告した。

＜急性期看護学領域＞

1.　社会貢献活動

1)　ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質的向上を図ることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。今年度はテーマを「鎮める力」とし、1 回のケア検討会を計画した。

今年度は COVID-19 感染状況を鑑み、テーマを「鎮める力」とし、1 回のケア検討会のリモート開催を 10 月に予定したが、参加希望者はおらず、開催中止とした。

2)　リカレント教育

①CCNS 申請への支援

今年度はリモートにて CCNS 認定審査に向けた学習会を 5 回開催し、のべ 13 名の参加者があった。個々に自身の課題を抽出し、それに対して取り組むことができ、今年度は 2 名の CCNS が誕生した。

3)　高知医療センターとの包括的連携事業

(1) 5B フロアのリーダー看護師のシミュレーション学習会支援

5B フロアでは、これまで新人看護師を対象としたシミュレーション学習支援を年 2 回、実施し、新人看護師の成長を実地指導者や病棟管理者とともに実感してきた。今年度はシミュレーション教育支援を新人看護師からリーダークラスの看護師へと拡大し、予期せぬ状況への対応としてアセスメント、報告ができることを目的とし、計画した。しかし、高知県内の COVID-19 感染拡大やフロアの状況より、今年度は計画、打合せのみとし、次年度の開催へと変更した。さらに今後は看護師自らが計画、運営できるように徐々に支援へと方法を変更していく予定である。

(2) 7B フロアのシミュレーションを活用した 3～4 年目看護師の育成

７B フロアでは、昨年度に引き続き、パートナーシップ・ナーシング・システムでチーフリーダーを担う時の、急変時の判断や行動、対応についてシミュレーション学習を実施した。チーフリーダーとして急変時にどのように対応するとよいか、活発な意見交換、学びの場となった。設定された状況について、落ち着いて考えることにより、参加者より様々な視点があげられ、思考する幅の広がりがうかがえた。会を進めるうちに参加者の発言回数も増え、チーフリーダーとしてどのように動くといいか、イメージすることができ、病棟管理者も含めて今後どのように急変時にリーダーとして役割を果たしていくといいかを考える機会となった。次年度も継続する予定である。

(3) ICU 異動看護師の成長を OJT で効果的に支援する

3A フロアでは他部署から異動してきた看護師の教育について以前から指導について様々な方法で取り組んできたが、部署より要望があり今年度より実地指導者への効果的な支援について、包括的連携事業として取り組んだ。OJT を用いて支援する方法を活用できる学習会を開催した。3 名の参加者があった。今年度は 1 回の開催にとどまっているが、次年度も継続して学習会を開催する予定である。

2.　研究活動

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費等の助成を受け研究活動に取り組んでいる。平成 28 年度から 4 年間の計画で「家族の体験を基盤としたクリティカルケアにおける悲嘆ケアガイドラインの開発」（研究代表者：大川宣容）では、昨年度最終年度を迎えているが、さら

にデータ分析、集約をすすめ、「救急外来看護師が行う悲嘆ケアの実態調査～自由記述内容のテキストマイニングによる分析」（大川宣容, 井上正隆, 田中雅美, 森本紗磨美, 岡林志穂, 西塔依久美）として高知県立大学紀要 70 巻（2021 年 3 月発刊）へ投稿した。2020 年度から 3 年間の計画で「術前の心理的準備性向上による術後認知機能障害を防ぐケアモデルの開発」(研究代表者：井上正隆)、平成 30 年度から 3 年間の計画で「消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの開発」（研究代表者：森本紗磨美）の研究に取り組んでいる。

大学院修了生の学会発表支援を行い、第 16 回日本クリティカルケア看護学会にて修了生 1 名が、第 22 回日本救急看護学会学術集会にて修了生 1 名が発表を行った。また、1 名が高知女子大学看護学会誌 46 巻 1 号に原著論文を投稿し、掲載された。大学院生の修士論文としては「救命治療過程にある患者への ICU 看護師のケアリング」、学部生の看護研究としては「ドレーン廃液の客観な観察指標の開発」について取り組んだ。

3. 大学院関連

急性期看護学領域では、令和 2 年度にクリティカルケア看護学領域 CNS コース 1 名の大学院修了生を輩出した。

4. 評価および次年度の課題

今年度は COVID‐19 の影響もあり、予定事業の中止や開催方法の変更を余儀なくされたが、おおむね計画通り事業や学習会を開催することができた。ケア検討会や学習会などの事業の運営に際し、リモートを効果的に活用することでさらに領域活動を活発に行うことができるであろう。しかし、研究成果を十分に公表することができていないことが課題としてあげられる。領域としてそれぞれが研究に取り組むための工夫を行っていく。

＜小児看護学領域＞

1．社会貢献活動

1）赤ちゃん同窓会

令和 2 年 11 月 3 日（火）に規模を縮小して開催を計画していたが、COVID-19 の感染拡大により中止となった。参加者は、易感染性のある子どもであり、今後はオンラインシステムの活用についても、高知医療センターと協議していく予定である。

2）高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

（1）継続教育支援

毎年、高知医療センターすこやかＡフロアと連携し、新人看護師を対象とした「けいれんの子どもへの対応」をテーマに、シミュレーション勉強会を年間 4 回計画し、実施してきた。しかし、本年度は Covid19 の感染拡大に伴い中止となった。今回の継続教育支援の中止の理由として、①教員が病院内で研修会を行うことが、感染予防対策上困難であったことと、②継続教育の対象者である看護師が COVID-19 への対応で研修会に参加できないという 2 つの理由がある。病棟管理者とも今後の継続教育支援について検討し、オンラインシステムを活用した継続教育支援について、来年度は検討する予定である。

3）小児看護の魅力を語る会

COVID-19 の感染拡大により中止となった。来年度に向け、オンラインシステムを活用した開催などを検討していく。

4）修了生の会

例年、日本小児看護学会学術集会 1 日目に開催していたが Covid19 の感染拡大により中止となった。修了生のニーズを把握しながら、次年度開催を検討していく。

5）大学院事例検討会・特別講義

(1) 小児看護学領域事例検討会

修了生や在校生を対象として、例年、年 3 回程度開催していたが、今年度は Covid19 の感染予防および拡大防止対策として、学外者が参加しての対面での会合等は原則開催しないという全学的な方針に従い、開催を中止した。

(2) 小児看護学領域特別講義

講師：高増哲也氏（神奈川県立こども医療センター　アレルギーセンター副センター長）

日時：令和 2 年 12 月 20 日（日）10 時 30 分～16 時 30 分　オンライン講義

参加者：8 名（大学院生、修了生、教員）

内容：今年度は小児アレルギーの専門医である高増哲也氏より、アレルギー疾患、小児の栄養について、講義を受けた。小児看護専門看護師として、専門的なケアを提供するために、病態生理、検査、治療、およびその結果の解釈をする能力を養うための講義であり、大学院生、小児看護専門看護師である修了生、教員が受講した。本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響のため、広報規模を縮小しオンラインで実施した。また、小児看護領域では平成 30 年度より小児看護専門看護師による特別講義を修了生のキャリア支援として位置づけ行っている。本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響のため、キャリア支援講義は開催しなかった。

２．研究活動

１）高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 臨床実践能力及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究

開催日時：Zoom によるオンラインにて毎月開催
（6/21・7/19・8/23・9/22・10/24・12/19・1/31・2/23・3/27）

開催場所：高知県立大学看護学部または研究メンバー職場・自宅、高知医療センターNICU・GCU

参加人数：17 名（医療センター1 名さらに増員予定、県大 11 名）

内　　容：「命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護支援モデルの構築と活動」（研究代表者：高知県立大学看護学部教授 中野綾美）における、家族を対象とした研究を NICU・GCU の看護師とともに共同研究として開始した。しかし、COVID-19 感染拡大に伴い、インタビュー日程が未定となっている。今後、感染状況によって再開していく予定である。また、看護師を対象としたアンケート調査も県外施設の協力を得て実施しており、3 施設から 328 通のデータを得た。今後は施設を増やして実施する予定であり、1 施設の協力依頼中、2 施設依頼予定、追加 2 施設の協力を得ている。次年度が研究期間最終年度であり、得られたインタビューデータとともにアンケート調査結果に基づく、「命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護支援モデルの構築と活用」のためのガイドラインや指針の作成を遂行していく。

3. 活動の評価

今年度は、Covid19 の感染拡大の伴い、NICU 退院後の子どもや家族の支援として高知医療センターと共催で開催している赤ちゃん同窓会や、専門職者や修了生を対象とした事例検討会は開催することができなかったが、オンラインを用いて特別講義の開催、研究活動、アンケート調査は継続することができた。

4. 次年度の課題

地域貢献活動については、CCOVID-19 の感染拡大状況に合わせて、参加者の安全に考慮し、継続可能な方法を検討していく。COVID-19 の感染拡大状況にもよるが、Web ミーティングツールの活用により遠方の修了生や専門職者が参加しやすくなるという利点があるため、活用を検討していく。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿、ガイドラインの作成などに取り組んでいく。

＜母性・助産看護学領域＞

１．社会貢献活動

１）病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース（BLSO）の運営支援

高知医療センター包括連携事業としてBLSOコースの開催が検討されていたが、今年度は、COVID-19拡大により中止となった。

２）リカレント教育

今年度はCOVID-19拡大を鑑み、開催を中止とした。

３）令和2年度母性助産看護学領域交流会

今年度はCOVID-19拡大を鑑み、開催を中止とした。

２．学習会

母性・助産看護学領域の教員が参加し、母性・助産看護学に関する論文の抄読会を行った。今年度は3回開催し、意見交換を行った。

［第1回］令和2年11月11日：産婦の主体的取り組みに関する量的研究

［第2回］令和2年12月2日：母性・助産看護学における尺度開発・活用

［第3回］令和3年1月7日：周産期の臨床判断力・フィジカルアセスメント教育のミニマム・エッセンシャルズに関する研究・教育への活用

＜老人看護学領域＞

1.　社会貢献活動

CCOVID-19 感染拡大の影響により、従来実施していた社会貢献活動（病院・施設の方々とのケア検討会）が行えなかった。次年度は、COVID-19 感染の状況を踏まえ、ケア検討会およびリカレントの開催方法を検討する。

2.　研究活動

「急性期病院に入院中の認知症高齢者に対する効果的ケア･パッケージの開発」（2019～2022 年、基盤研究 C、研究代表者、竹崎久美子)に取り組んだ。今年度は、認知症患者の看護についての現任教育、院内デイケアおよび身体抑制をテーマに文献検討を行った。その結果から、ケア・パッケージの構成を検討し、現在ケア・パッケージ（案）を作成中である。次年度は、ケア・パッケージを急性期病院に勤務する看護師に意見を聞き、洗練化する予定である。研究成果として、「日本における身体抑制に関する看護研究の動向：テキストマイニングを用いた論文表題の分析」を、高知県立大学紀要看護学部編（70 巻）に発表した。

3.　教育活動

今年度は、COVID-19 感染拡大の影響により、講義科目において、前期はオンデマンド型の遠隔授業、後期は遠隔授業と対面授業のハイブリッド型授業にて展開した。従来対面で実施していた高齢者疑似体験演習（2 回生前期科目「老人の健康と看護」）は全て遠隔、ゲストスピーカーによる「老人看護における最新課題」の講義および様々な疾患状態に対する高齢者ケアの特徴のグループワーク（2 回生後期科目「老人看護援助論」）は、遠隔と対面とのハイフレックス型で行った。

＜精神看護学領域＞

1.　社会貢献活動

1）　看護相談室（ケア検討会）

令和 2 年度は、1 回の看護相談室を開催した。本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を実施した。

①　第 1 回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

開催日時：令和 3 年 3 月 25 日(木) 19:00-21:00

場所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加人数：13 名〈本学大学院生 3 名、本学大学院修了生 5 名、元教員 1 名、教員 4 名〉

内容：

参加者が所属する施設における、CNS の活動報告をしていただき、その活動を踏まえた看護理論の組織への定着に向けた方策について、参加者で意見交換を行った。その方策としては、組織における CNS の役割開発として、看護管理者の理解や協力を得ることなど、組織に根付くための働きかけを積み重ねていくことも、必要になることが話し合われた。他の参加者にとっても、自身の活動について振り返るきっかけとなり、新たな視点で今後の活動や役割開発について考える機会となった。

2）　精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

日本精神保健看護学会学術集会の開催に合わせて、交流会を実施してきたが、令和 2 年度の開催は COVID-19 の感染拡大予防のため、Web 開催となったことから、現地で集合することができなかったため、交流会の開催は中止した。来年度は、COVID-19 の感染予防策をとりながら、卒業生・修了生との交流を深める機会を設けたいと考えている。

3）　リカレント教育

高知県西部地区の精神科医療従事者への教育機会の提供を目的として毎年実施しているが、令和 2 年度は COVID-19 の感染拡大予防のため、中止となった。来年度は、Web 会議システムを活用し、オンラインでの実施を検討している。

4）　精神科病院におけるボランティア活動

精神科病院の催し物に、学生がボランティアとして参加していたが、令和 2 年度は COVID-19 の感染拡大予防のため、ボランティア募集がなかったことから、活動は実施していない。

2.　研究活動

令和元年度高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト「高幡保健医療圏における精神障害に対応した包括的支援マネジメントモデルの開発」（研究代表者：瀧めぐみ）の研究活動を実施した。詳細は「戦略的研究推進プロジェクト推進費による活動」に記載している。

研究参加に同意が得られた、中央保健医療圏の精神科を標榜する病院から高幡保健医療圏に退院する精神障害者への包括的支援を行っている看護師・精神保健福祉士 3 名と、高幡保健医療圏で生活する精神障害者を支援している保健師・訪問看護師・精神保健福祉士・相談支援専門員 10 名に面接調査を行った。面接調査のデータは、中央保健医療圏の精神科病院から高幡保健医療圏に退院する精神障害者に行っている支援内容と、高幡保健医療圏で生活する精神障害者の地域定着のために行っている支援内容、これらの支援を行う上での課題という視点で分析を行っており、

各市町村や精神科病院ごとの特徴についてカテゴリー化を進めている。

今後はデータ分析より明らかになった高幡保健医療圏における精神障害者への包括的支援マネジメントの現状と課題を基にして、モデル案の作成をしていく予定である。

3. 評価

令和 2 年度は、COVID-19 の感染拡大予防のため、毎年実施してきた活動がほとんど実施できなかった。しかし、学内だけでなく、個人や施設において Web 会議システムが使用できる環境の整備が整ってきたことで、3 月には看護相談室を Web 開催することができた。今回は、話題提供者が所属する施設における活動に関する検討がテーマであったため、Web 上で資料を共有できた。しかし、今後も継続的に看護相談室を実施していくためには、Web 会議システムを活用して、事例に関する検討において個人情報が保護できる開催方法を事前に検討しておくことが必要である。

4. 次年度の課題

COVID-19 感染予防における本学の対応に沿って、これまで行ってきた様々な活動は、対面での実施だけでなく、Web 会議システムなどを活用した新しい方法での開催を検討し、継続して実施していくために、Web 開催で看護相談室のような事例検討を行うための事例の情報を保護する方法や、インターネット通信にかかる費用を参加者が負担することなどが課題として挙げられる。他に看護相談室を開催している領域の実施方法等も情報収集して参考にするなど、開催方法を検討していく。

また、高知県立大学戦略的研究推進プロジェクトが目標に到達していないことも課題として挙げられるため、包括的支援マネジメントモデル案の作成に向けて次年度も継続して進めていく。

＜家族看護学領域＞

1.　社会貢献活動

1)　ケア検討会

今年度はCOVID-19の感染予防および拡大防止対策として、不特定多数の学外者が参加する会合等は原則開催しないという全学的な方針に従い、開催を中止した。

2)　リカレント教育

大学院修了生への継続的なサポートの一環として、リカレント教育を行っている。今年度は、毎月第３金曜日にWebミーティングツールを活用し５回開催した。修了生から提供された事例について、家族アセスメント、家族への看護支援の方略、家族との援助関係の形成、多職種との協働における看護者の役割など、様々な視点からディスカッションを行った。参加者にとって、自身の実践を振り返ったり、課題に気づき解決に向けた取り組みのヒントを得たりする機会となった。Webミーティングツールを用いた開催は、昨年度から取り入れているが、遠方の修了生も負担なく参加でき有効であった。

【第１回】
日　時：令和２年７月30日（金）18：30～20：30
参加者：修了生３名、教員３名
テーマ：COVID-19による面会制限がある中での看取り期にある患者・家族への家族看護実践

【第２回】
日　時：令和２年10月16日（金）18：30～21：20
参加者：修了生２名、大学院在学生１名、教員４名
テーマ：家族看護実践の中での困りごとについて

【第３回】
日　時：令和２年11月20日（金）18：30～21：15
参加者：修了生５名、大学院在学生１名、教員６名
テーマ：家族の拠り所である家族員を失う不安から現実を受け止められず動揺する家族の事例

【第４回】
日　時：令和３年１月15日（金）18：30～20：30
参加者：修了生２名、大学院在学生１名、教員４名
テーマ：患児と家族の捉えが部分的であったことにより、医療者が家族との関わりに困難を感じていた事例

【第５回】
日　時：令和３年２月19日（金）18:30～20:40
参加者：修了生２名、大学院在学生１名、教員５名
テーマ：医療者が患者の配偶者との関係形成に困難感を感じた終末期のがん患者と家族の事例

2.　研究活動

1)　教員の研究活動

家族看護領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「慢性心不全患者・家族のアドバンス・ケア・プランニング支援ガイドラインの開発」（研究代表者：長戸和子、2020～2022年度）、「患者・家族と看護者間のコンフリクトの発生・悪化を予防する教育プログラムの開発」（研究代表者：瓜生浩子、2020～2022 年度）、「糖尿病足病変予防のための看護師のアセスメント力を高める教育プログラムの開発」（研究代表者：坂元綾、2018～2020年度）、「ICUにおける人工呼吸器装着患者

の集中治療後症候群予防のケアガイドライン開発」(研究代表者:神家ひとみ、2020～2023 年度)、「人工呼吸器を装着した児と家族のヘルスケア機能を増進するためのケアガイドライン開発」(研究代表者：中井美喜子、2019～2021 年度）に取り組んでいる。

研究成果として、高知女子大学看護学会誌に原著論文 2 編、高知リハビリテーション専門職大学紀要に 1 編の論文投稿を行った。学会発表は、日本家族看護学会第 27 回学術集会 1 題、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会 3 題、第 40 回日本看護科学学会学術集会 1 題の発表を行った。また、日本家族看護学会第 27 回学術集会において修了生 2 名が発表を行った。

2) 修了生を対象としたアンケート調査の実施

今後の家族看護学領域の活動の活性化に役立てることを目的として、修了生全員を対象に Web によるアンケート調査を実施し、8 名からの回答を得た（教育機関に所属している方 1 名、病院等で看護師として勤務している方 7 名)。調査内容は、現在の所属部署、職位、役割、家族看護に関して実践していること（実践、教育、研究など)、課題や困っていること、今後高めていきたい能力や学びたいこと、そのために大学からどのようなサポートがあればよいか、リカレント教育で学びたいことなどである。

アンケート結果では、課題や困っていることとして、実務と複数の教育活動に追われ、研究活動ができていないなど､多忙な中で様々な活動に思うように取り組めないことが挙げられていた。今後高めていきたい能力や学びたいこととして、CNS としての直接介入とコンサルテーションの見極めと移行の仕方、スタッフの機能を最大限に活かし部署の家族看護実践を高める方法、研究への支援や自身の研究活動などが挙げられていた。大学に求めるサポートやリカレント教育で学びたいこととして、アサーションやコミュニケーション技術、コンサルテーション能力、研究活動などであり､「大学院で学んでいた時の様に、最新の知見に関する講義に参加できる機会が欲しい」などの意見があった。

3. 活動の評価

今年度は、COVID-19 の影響により地域の専門職者を対象とした事例検討会を開催することはできなかったが、修了生対象のリカレント教育を定期的に開催した。リカレント教育においては、家族支援専門看護師の資格を有している修了生の参加もあり、相互研鑽や情報交換の機会としても位置づけることができたと考える。また、在学生にとっては、修了生の家族看護実践の実際やその中での課題を知り、ロール・モデルを知る機会となった。例年、日本家族看護学会学術集会の開催に合わせて実施している修了生・在学生・教員の交流会は、学術集会も Web 開催となったため開催できなかったが、リカレント教育で Web ミーティングツールを活用したことにより、遠方からの参加も可能となり、相互交流の機会としても有効であった。

研究活動に関しては、毎週月曜日に研究ミーティングを開催し、現在取り組んでいる研究に関して相互に意見交換を行いながら研究を進めている。それぞれが取り組みの目標を立てて計画的に取り組むことはできたが、成果の公表については十分とは言えない。

4. 次年度の課題

リカレント教育は次年度も継続する。COVID-19 の感染拡大状況にもよるが、Web ミーティングツールの活用により遠方の修了生が参加しやすくなるので、引き続き活用しながら実施することを考えている。また、修了生対象のアンケート調査の結果に基づき、各回のテーマと内容を決めて年間の活動計画を年度当初に提示し、より多くの修了生が参加できるようにする。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿の促進、教員の研究への修了生の参画などに取り組んでいく。

＜在宅看護学領域＞

1.社会貢献活動

1)第 25 回日本在宅ケア学会学術集会

令和 2 年 6 月 27 日（土）「ライフ・デザインと多職種協働～主体的選択を地域で支える仕組みづくりに向けて～」をテーマとして、森下安子学術集会長はじめ、領域の教員が事務局を務め、修了生も企画委員に加わってもらい、Web にて開催した。参加者は 546 名であり、盛況のうちに終了した。なお、詳細の事業報告は、第 1 部「1.第 25 回日本在宅ケア学会学術集会」にて報告している。

2)ケア検討会

在宅看護ケアの質向上、在宅看護のネットワーク作りを目指し、看護学部看護相談室事業として、在宅看護学領域ケア検討会を年 4 回、定期開催する予定であった。しかし、訪問看護ステーションからの聞き取りにて、CCOVID-19 の影響で訪問看護ステーション利用者が増加し、業務が多忙な状況があることが明らかになったため、ケア検討会の開催を見合わせた。また、訪問看護ステーションでは、COVID-19 の影響で病院の面会制限の継続に伴い、自宅で過ごすことを希望される療養者やご家族が増えていること、特にターミナルケアを必要とする方が増加しており、看取りに向けてのケアニーズが高まっていること、医療的ケアが必要な方が増えたため、技術や知識においてより専門性が求められている状況を把握した。

3)健康長寿センター事業の展開

以下の健康長寿センター事業に領域教員が中心となって事業展開を行なった。なお、詳細の事業報告は、第 1 部「10.健康長寿センターにおける看護学部の活動」にて報告している。

(1) 地域医療介護総合確保基金事業

①入退院支援体制推進事業、

②高知県介護職員喀痰吸引等研修、

③中山間地域等訪問看護師育成講座、

(2) 地域連携事業

①土佐市連携事業：地域ケア会議推進プロジェクト、

②地域ケア会議コンサルテーション事業

4)中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築への支援

中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築に向け、公立病院連絡会、中央西在宅医療連携委員会等にアドバイザー等として参画し、支援を行なった。

2.研究活動

1)研究発表

高知女子大学看護学会誌に原著論文 2 編が掲載された。また、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会で、12 件の研究を発表した。

2)活動中の研究

科学研究費助成事業（以下、科研）では、今年度 5 件の研究が新規採択された。継続して取り組んでいる研究と合わせ、研究代表者として 8 件の研究を行っている。また、高銀地域経済振興財団からの研究助成に 1 件採択され、その結果を発展すべく学内の戦略的研究推進プロジェクトにも申請し、採択された。

(1) 科研

課題名	期間	代表者
慢性心不全高齢者の再入院を予防するシームレスケアを創る退院支援ガイドラインの開発	2018.4.1-2021.3.31	森下安子
独居高齢者のエンド・オブ・ライフ期の在宅療養を支える多職種協働プログラム開発	2017.4.1-2020.9.30	川上理子
新卒訪問看護師と学習支援者の期待不一致を解決する学習支援プログラムの構築	2017.4.1-2021.3.31	森下幸子
慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメント能力を育成する教育プログラムの開発	2019.8.30-2021.3.31	竹中英利子
組織学習を支える訪問看護管理者のコンサルテーション力を高める教育支援モデル構築	2020.4.1-2023.3.31	森下幸子
学童期にある発達障害児の家族の家族ストレングスを促進するケアプログラムの開発	2020.4.1-2024.3.31	源田美香

(2) 高銀地域経済振興財団

課題名	期間	代表者
高齢者の在宅看取りに対する自己効力感と先行要因の明確化	2020.4.1-2021.3.31	川上理子

(3) 戦略的研究プロジェクト

課題名	期間	代表者
高齢者の在宅看取りを促進する地域文化の創生を目指す教育プログラムの開発	2020.4.1-2022.3.31	川上理子

また、地域看護学領域、家族看護学領域、看護管理学領域、小児看護学領域、災害看護学領域の科研の研究分担者として 7 件に参画している。

3.評価

社会貢献活動では、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会を通じて、領域で積み上げてきた多職種協働の知見を全国に発信し、高知県内の他職種協働の取り組みを全国に発展する機会を持つことができた。また、Web 上での Live 配信、会期の短縮という開催方法の変更に伴い、企画委員、実行委員、講師と共に、視聴者側をより意識したプログラム編成と配信の工夫を行うことで、新たな学術集会を開催することができた。また、ケア検討会については、訪問看護ステーション等から、COVID-19 の影響による医療環境の変化で自宅退院を希望される療養者とご家族が増え、在宅ケアのニーズは一層高まっている状況が把握できた。このような現状から、COVID-19 の感染状況の動向と、参加者の業務状況を踏まえつつ看護職のニーズに対応できるよう、ケアマネジメントや看護実践を検討する機会を設ける。健康長寿センターの事業展開では、コロナ禍においても、感染対策を徹底し、予定どおり実施することができた。しかし、研究活動においては、コロナ禍においてなかなか進んでいない現状がある。また今年度は修了生を対象とした研修会開催や修論の投稿への支援が実施できなかった。

4.次年度の課題

・ターミナルケアを必要とする療養者やその家族へのケアや、医療依存度の高い療養者が住み慣れた場所で暮らすことを支えるケアについてケア検討会を実施する。
・科研等、研究活動を計画的に行っていく。
・修了生の支援ニーズを把握し、支援を充実していく。

＜地域看護学領域＞

１．社会貢献活動

1）高知県保健師人材育成

高知県保健師人材育成プログラムによる活動として、高知県健康長寿政策課と協働で取り組んでいる。以下、領域で取り組んだ人材育成支援について、報告する。新任期保健師育成支援に関する詳細は、「10.健康長寿センターにおける看護学部の活動」の「5)高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動（1)高知県新任保健師研修会」を参照されたい。

(1) 新任期保健師育成に係わる OJT 担当者会

プリセプターや管理者を対象にした研修では、プリセプター能力育成研修として、年に 2 回実施した。令和 2 年度は、COVID-19 の影響により、第 1 回は Web 開催となった。この研修では、高知県新任期保健師支援プログラム Ver.3 の説明と共に、目標管理、組織管理や人材育成を効果的に実施するための講義と、「管理期・プリセプターの役割」に関する資料提供を行った。第 2 回プリセプター能力育成研修は、プリセプター、管理者、研修担当者が、2020 年度の人材育成について各市町村の評価を共有し、評価視点に沿って総合的に評価し、今後の取り組みについて検討した。

第 1 回プリセプター能力育成研修 Web 開催	令和 3 年 5 月 26 日（火）13：30～15：30　参加者：58 名 講義　　「『新任期保健師支援プログラム』行動目標とは何か」小澤若菜 資料配布「管理者・プリセプターの役割」
第 2 回プリセプター能力育成研修	令和 3 年 3 月 22 日（月）14：00～16：30　参加者：22 名 講義「管理者・プリセプターの役割」時長美希 保健師育成の評価等についてのグループワーク・意見交換のサポートおよび助言：時長美希・小澤若菜・川本美香・高橋真紀子

(2) 中堅期保健師育成支援

高知県の行政機関に所属する中堅期保健師育成支援として、保健活動評価研修への参画を計画していたが、COVID-19 の影響で令和 2 年度は、中止となり開催されなかった。

(3) 福祉保健所管内新任期保健師研修

福祉保健所が開催する管内新任期保健師・中堅期保健師の人材育成に関する研修では、集合研修の課題提出に向けたフォローアップとして個別課題の取り組み状況ついて確認を行った。また、プリセプターや管理者が支援する能力を高める講義やグループ討議での助言を行った。

中央東福祉保健所	11 月 25 日（水）13：30～16：30　参加者：7 名 3・4 年目保健師 内容：課題に関するグループワーク・意見交換：川本美香
中央西福祉保健所	11 月 11 日（水）10：00～12：00　参加者：12 名 １・2 年目保健師とプリセプター 講義「普段の気づきを活かした展開―新任期保健師研修の課題を活用して―」　課題に関する意見交換：川本美香
須崎福祉保健所	新任期保健師及びプリセプター支援研修会　参加者：17 名 9 月 17 日（木）13：20～16：30 講義「ＰＤＣＡサイクルと業務の展開」：髙橋真紀子 グループワーク：小澤若菜・髙橋真紀子
幡多福祉保健所	管内新任保健師研修会 11 月 30 日（月）13 時～16 時 30 分　参加者：11 名

	講義「保健師の記録の書き方」 集合研修の課題に関する発表・グループワークの助言：小澤若菜

2）地域保健活動支援

高知県健康長寿政策部健康長寿政策課、高知県健康政策部健康対策課・福祉保健所地域支援室と協働し、各管内の地域保健活動の取り組みに関する研修会の講師や助言を行った。また、市町村が取り組む保健活動への参画、助言を行った。福祉保健所の地域保健活動報告会では、市町村の様々な事業や保健活動に関する報告を通して、参加者同士、活発な意見交換や質疑応答がなされた。報告会での助言を通して、参加者が、保健活動の評価の視点や方法を学び、より効果的な実践を目指す機会となった。市町村に対しては、高知市において、COVID-19 に係る応援派遣として、1 名を現地派遣し、現地での保健師業務の支援にあたった。高知県国民健康保険団体連合会の保険者への保健事業支援・評価等を行っている。国保連合会の事務局と事前協議、実施後の振り返りを行いながら、効果的な保健事業の推進を図るための支援を行った。

(1) 高知県

・幡多福祉保健所管内保健福祉活動報告会

令和 3 年 3 月 1 日（月）13：30～16：00　報告 10 題、参加者 40 名

講評・助言者：小澤若菜

(2) 市町村

・高知県立大学と高知市の連携に関する協定書に基づく新型コロナウイルス感染症に係る専門職の応援派遣

【派遣先】　高知市　　【期　　間】令和 3 年 1 月 13 日～2 月 5 日

【業務内容】保健師業務の支援　【派遣教員】髙橋真紀子

(3) 高知県保健師人材育成評価検討会

第 1 回は、令和 2 年度の保健師人材育成関係事業計画について、行政保健師確保対策について、高知県保健師 80 周年記念行事について、情報共有および意見交換を行った。第 2 回は、令和 3 年度事業計画、保健師確保対策の 1 つとしての県内 3 教育機関の地域看護に関する実習の実績および実習計画、保健師の研究活動支援について、高知県保健師 80 周年記念誌の作成について、令和 3 年度高知県保健師人材育成評価検討会の開催予定について、意見交換を行い、検討した。

第 1 回　7 月 28 日（火）　第 2 回　令和 3 年 3 月 9 日（火）

(4) 高知県国民健康保険団体連合会保健事業支援評価委員会

高知県国民健康保険団体連合会の委員として国保・後期高齢者ヘルスサポート事業への支援を行っている。今年は、前年に策定したデータヘルス計画の中間評価に関する助言等をおこなった。また、新たに高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施に向けての打ち合わせと保険者への支援を行うと共に、関係者との連携や体制整備に関する課題の共有をおこなった。今年度は、委員会の開催方法として、事務局による個別訪問と書面開催となった。最終の面談・情報交換会のみ人数制限をおこない、対面で開催された。

【開催状況】2020 年 7 月 16 日（木）、9 月 4 日（金）、10 月 30 日（金）、11 月 16 日（月）
2021 年 1 月 29 日（金）、3 月 11 日（木）、3 月 18 日（木）

【対象保険者】27 保険者

3）学生のボランティア支援

高知市一宮トーメン団地自治会「第 6 回桜まつり（桜ウォークラリー）」への参加を計画していたが、COVID-19 感染拡大防止を考慮し、学生参加を中止した。

4）高知県看護協会保健師職能委員の活動

高知県内の保健師職能委員と共に、保健師のネットワークの強化や、人材育成に関する課題解決、地域包括ケアの構築に向けた役割の明確化を図るため、さまざまな組織の委員と共に、教育機関として活動し、事業運営や研修の企画を行っている。今年度は、3 職能生きる力を育むいのちの教育特別検討委員会の発足に伴い、次世代育成事業における活動方針の協議や研修会の企画・運営等をおこなった。

5）高知県市町村衛生職員協議会保健師部会・高知県看護協会が行う研修会への協力

市町村衛生協議会保健師部会高知ブロック・須崎ブロック研修会の企画・実施・評価に協力した。また、令和 2 年度高知県看護協会保健師職能委員会アフターミーティング研修会では、研修の企画・実施・評価に関する研究活動報告を行った。これらの活動では、看護管理領域および基礎看護領域と協力し、研修に使用する冊子の作成や、研修評価に取り組んだ。

高知県市町村衛生職員協議会保健師部会ブロック研修会	高知ブロック：参加者数 62 名　（第 1 回目 36 名、第 2 回目 26 名） 第 1 回　10 月 1 日（木）13：30～16：00 「事例検討とファシリテーターの役割」 第 2 回　11 月 13 日（金）13:30～16：00 「対象の捉え方」 須崎ブロック：参加者数 64 名　（第 1 回目 34 名、第 2 回目 28 名） 第 1 回　10 月 2 日（金）13：30～16：00 「事例検討とファシリテーターの役割」 第 2 回　11 月 12 日（木）13:30～16：00 「対象の捉え方・効果的な保健指導
高知県看護協会保健師職能委員会アフターミーティング研修会	令和 3 年 2 月 6 日（土）13：00～16：00　参加者 17 名 研究活動報告①「アンケート調査結果」坂元　綾 研究活動報告②「研修冊子について」川本美香

6）全国保健師教育機関協議会の活動

令和 2 年度は、全国保健師教育機関協議会中国・四国ブロック委員として、2020 年度中国・四国ブロック研究会・オンライン研修の準備に携わった。新型コロナウイルス感染症の影響で運営が模索されるなか、中国四国ブロック理事の他校の先生方と連絡をとりながら、主にメール会議での活動を行った。

ブロック委員：時長　美希

２．研究活動

1）高知県市町村衛生職員協議会保健師部会・高知県看護協会と協働した研究的取り組み

テーマ：「経験学習モデルを活用した保健師の経験を成長につなぐ研修プログラム」の評価に関する研究

経験学習モデルを活用した保健師の経験を成長につなぐ研修プログラムの運用からその有効性を評価し、研修プログラムを成立させることを目的として、地域看護学領域の教員が研修代表者となり、看護管理領域・基礎看護学領域の教員、高知県市町村衛生職員協議会保健支部会の保健師、高知県看護協会の保健師が協働して、研修に使用する冊子の作成、研修の評価を行った。

2)科学研究費、大学の戦略的研究、その他の研究的取り組み

第 2 部で教員の活動、研究に関する報告に記載。

３．活動の評価

地域貢献活動の 1）高知県保健師人材育成、については、高知県保健師人材育成ガイドラインに基づいて、ＰＤＣＡサイクルを運用している。アウトカム評価として、新任期の人材については、各自治体において、個人の目標達成を評価し、高知県が集約している。プロセス評価として、「新任期保健師育成に係わる 0JT 担当者会」において、評価検討会を行っている。それらの評価結果を次年度の人材育成活動に反映させている。また、「高知県保健師人材育成評価検討会」において、高知県内の公衆衛生看護に携わる人材（学生の教育、公衆衛生看護実践者の継続教育など）の育成を担っている関係者が、2 回／年の会議を開催して、年間計画の検討と評価を行っている。地域看護学領域の教員はこれらの委員会の主要なメンバーとしてアウトカム評価、プロセス評価を行っている。

地域貢献活動の **2）地域保健活動支援**、については、それぞれの活動ごとにアウトカム評価を中心にして、評価を行っている。

研究活動、については、領域として取り組んだ研究活動の成果を社会に公表できていないものがあること、教員各自が取り組む様々なその他の研究については、領域独自で取り組みの状況や成果公表について評価をしておらず、看護学部の研究促進委員会にゆだねている。

４．今後の課題

地域貢献活動については、今後も地域の関係者とＰＤＣＡサイクルの運用全体について協働的に取り組んでいく。協働的に取り組む中で、大学の貢献について継続的に検討をしていく。

研究活動については、各教員が取り組む研究活動について領域活動として、研究のための時間を確保していくこと、成果の公表を支援していくことを強化していく。

＜看護管理学領域＞

1.　社会貢献活動

1）ケア検討会（看護相談室）

令和 2 年度は、COVID-19 対策のため、例年 3 回実施していたケア検討会の年間計画を 2 回に縮小し、遠隔会議システムを使用した運用を準備した。しかし、開催予定当日の台風接近やその後の感染再拡大に伴い、中止を余儀なくされた。次年度は、臨床現場の看護管理者を支援する仕組みにつながるテーマを選定し、無理のない運営を目指していきたい。

2）高知医療センターとの包括的連携事業

令和 2 年度は、看護管理学領域からは、継続教育支援としてマネジメントリフレクション（1 回）、QC サークル活動コンサルテーション（オンライン会議システムとメール）を実施した。

3）健康長寿センター事業への参加

入退院支援事業の研修事業「管理者研修」「看護管理者研修」「入退院支援コーディネート能力修得研修」「入退院支援コーディネーターフォローアップ研修」の講師を務めた。

4）抄読会

看護管理学領域専攻の博士前期、後期課程の学生と看護管理学領域の教員が中心となって、を週に 1 回実施している。本年度は、例年より開始時期は遅れたが、5 月から遠隔会議システムを活用して、実施した。夏季、冬季休業期間を除いて、2 月末まで毎週継続した。プレゼンターは領域の博士前期課程の院生に加えて、領域外（DNGL）の院生や教員も分担し、研究のレビューとクリティーク、実践への活用について活発に討議した。本年の対象論文は、28 本であった。

2.　研究活動

看護管理学領域では、それぞれの教員が学内の戦略的研究プロジェクト推進費や科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

看護管理領域において共同して取り組む研究には「看護管理実習における学生の学びに基づく実習プログラムの評価」があり、研究成果は、日本看護教育学会第 30 回学術集会において「看護管理実習における学生の実習の評価と学習」（内川洋子、山田覚、久保田聰美）を発表している。

また、大学院修了生の学会発表支援を行い、第 24 回日本看護管理学会、第 15 回医療の質・安全学会学術集会、第 40 回日本看護科学学会学術集会、第 58 回日本医療・病院管理学会学術集会にて修了生 2 名が発表を行った。大学院生の修士論文としては「看護師長の成長につながる経験と同僚師長からの支援」、「スタッフの看護実践能力発揮感とその影響要因に関する研究」、「看護計画を立案している看護師の思考に影響を及ぼす電子カルテの画面デザインセルフケア」について取り組んだ。

3.　評価

看護管理学領域における社会貢献活動の中でも、年に 3 回のケア検討会を企画運営することを目標にしてきたが、今年度は、COVID-19 感染拡大に加え、開催日当日の大型台風接近により、中止を余儀なくされた。前年度より、幡多地域等の遠隔からの参加も可能とするために遠隔会議システムを活用したケア検討会開催の準備は進めてきたが、今年度の状況から臨床現場の個々の看護師のネットワーク環境には個人差があり、所属病院の会議室等に集合したサテライト的な場所が必要であることが明らかになった。

また、当日中止になったものの、準備段階での申し込み状況から評価すると、昨年度まで参加者の多かった施設（高知医療センター、国立高知病院、幡多けんみん病院）に加えて、本学の健康長寿センター等の事業に参加している病院（あき総合病院、細木病院）からの申し込みも増加している。リカレント教育・交流会については、本年度は実施を見送った。

本年度の看護管理学領域の抄読会は、遠隔会議システムを活用したため、昨年度までの課題であった実践リーダーコースの学生も職場から参加できる環境が整い、博士前期課程は研究コースと実践リーダーコースの計 3 名がほぼ毎回全員出席した。また、9 月以降は、次年度に入学予定の博士後期課程の学生の参加者も加わり、クリティークの際の議論の深まりが実感できた。

その他、令和 2 年度には、看護管理学領域修了生 1 名が認定看護管理者資格を取得した。

4. 次年度の課題

社会貢献活動に関しては、臨床現場のニーズを把握しながら、教育研究活動とバランスをとっていくことが課題といえる。特に、ケア検討会については、高知県下の看護管理の学際的ネットワークの構築・維持と同時にケア検討会での議論の深まりを期待して、昨年度までは 20 名程度の参加を目指してきた。しかし、今後は、遠隔会議システムを活用した会議が中心となることが予測されるが、参加人数だけでなく、テーマ選定とのバランスをとる必要がある。また、テーマに沿った話題提供や議論を深める論文提供を院生の学びの場と繋げる仕組みためにも事前の準備が鍵といえる。全学的な取り組み（医療センターとの包括連携事業や健康長寿センターの事業等）とのつながりを視野に入れたテーマ選定と事前準備に注力したい。

抄読会に関しては、次年度は、博士前期課程の学生が少ないため（M1 実践リーダーコース 2 名）、他の科目や学生の業務とのバランスを視野に入れた運営が求められる。今後も看護管理学領域の院生にとって、学びの基盤となる仕組み創りを目指していく。

＜共創看護学領域＞

1.　本年度の活動総括

本年度は共創看護学領域開設の年であり、1 名の学生を迎え、新カリキュラムの運営と共に、学生の学修環境の整備を中心に行っていった。同時に、それぞれの教員が、競争的研究資金を獲得し以下の研究活動に取り組んでいる。

共創看護学領域は、CNS の養成を行うことを目的としない研究コースであるため、ケア検討会のような卒後（修了後）教育的な活動は行っていない。今後修了生が増え、博士後期課程に進学する者が出るようになれば、バラエティに富んだ研究方法を駆使できる領域集団が形成され、看護学の殻を打ち破るような研究を行い、広く社会貢献ができるようになる。

1)　研究活動

(1)テーマ：障害文化と健常文化を超えて共創する支援のパターンランゲージ

科研基盤研究（C）2021 年－2024 年

研究代表者：畦地博子

本研究の目的は、障害者の多様性を認め、障害文化と健常文化を越えて共創する支援のあり方を探究することであり、多様性・文化の差異に配慮した優れた障害者支援（good practice）の実践知に内在しているパターンを明らかにし、説明力あるランゲージを提案することである。小児看護、精神看護、養護、老年看護などさまざまな看護領域の研究者と、文化人類学を専門とする研究者が学際的に協働して実施している。本年度は、中心のコンセプトとなる「共創」と「障害文化」についての概念分析を行った。

(2)テーマ：がん化学療法による手足症候群および爪囲爪炎の早期検出と新規外用剤による予防的介入

科研基盤研究(C) 2018 年－2021 年

研究代表者：池田光徳

がん化学療法薬であるマルチキナーゼ抑制薬の投与により高頻度に発症する手足症候群／爪囲爪炎病変の発症機序を、皮膚生理学的検査方法を用いて明らかにし、本症の最早期病変が何であるかを検討した。手足症候群／爪囲爪炎の発症を抑制するためには、どの時期にどのような看護介入を行うのが適切かを検討した。手足症候群／爪囲爪炎をモデルとして、看護師が皮膚をアセスメントする際に簡便かつ有用な手段を見出すことにより、EBN に基づいた看護技術を展開できるのではないかと考えた。

2.　本年度の評価と次年度の課題

修士課程第１期生１名の第１学年を終了することができた。次年度には本課程に３名の入学生が決定している。次年度に実施予定の第１学年と第２学年の並行した教育は我々にとって初めてであり、教育、研究（学生および教員）および社会貢献を遅滞なく推進することに課題がある。

＜災害・国際看護学領域＞

1.　社会貢献活動

1)　ケア検討会

令和 2 年度のケア検討会は、災害・国際看護学領域としては初めての開催となった。初年度ということで、地域のニーズも探りながら 2 回のケア検討会を企画・実施した。検討会では、地域の看護職ばかりではなく、行政職、院生も含め多くの参加者があり、情報を共有し、類似した状況、問題に対する異なる見方、解決のためのアイデア等について、活発な意見交換を行った。参加者は、情報提供に基づいた現象の多面的な理解、そして個々の状況に応じた解決への手掛かりを見出すことができた。

(1)　第 1 回ケア検討会

【日時】令和 2 年 9 月 18 日（金）18：30～20：00

【場所】Zoom による web 会議

【参加者】外部参加者 19 名、大学院生 3 名、
　　教員 3 名、計 25 名参加

〈ケア検討会内容〉

先ず初めに、以下の演者から情報提供があった。

・趣旨説明：「災害時行動要支援者対策と地区防計画の現状」高知県立大学 神原 咲子　教授

・話題提供：「出水期の災害時要支援者避難訓練を通して見えきたこと」
　　（一社） EpiNurse EpiNurse 山中弓子　氏

演者からは、災害時要支援者と地区防災計画に関し、「ここに避難」ではなく「ここで生活」という生活の視点が重要であることが示された。また、COVID-19 流行下での自然災害対策を前提として、一般的な避難所のマニュアルはほぼできているが、場所によりニーズが異なり、一律ではないので多様な対応が必要であること、全国の自治体の避難所ガイドラインに掲載されている項目の調査で、女性関係の掲載割合が低いことなどを例示し、特に個別ニーズが重要で、マイノリティーのニーズを考慮すべきことが示された。最後に、どこに避難すればよいかなどが検討できるので、マイタイムラインを事前に作成しておくとの重要性が示された。

意見交換では、自治体を超えた地区防災計画を実際に立てている地域の情報を求める声があり、マンション、福祉コミュニティ、ショッピングモールなどの例が示された。内閣府の地区防災計画のページや地区防災計画学会のセミナーなどで紹介されたいるなどの情報提供もあった。また、ケアマネジャーが個別避難計画を立てることになっているが、ケアマネは避難所のことをどの程度理解しているのかとの疑問が提示され、避難所は場所によって環境が異なり、トイレの状況や使って良いスペースなどが異なること、体育館の段差の有無など、ケアマネと防災に明るい地域住民や民生員などが共に取り組むなどの対策が議論された。

議論を通し、行政に頼るのではなく、様々な避難所の状況の中で、共助のためのデータを整理し、それらも含めた避難所開設キットの必要性が示された。

(2)　第 2 回ケア検討会

【日時】令和 2 年 12 月 18 日（金）　18 時～19 時 30 分

【場所】Zoom による web 会議

【参加者】県下の訪問看護ステーションの看護職を中心に、教員も含め 24 名

〈ケア検討会内容〉

新型コロナウイルス感染症は全国に拡大し、高知県内でも感染者が急速に増加しており、医療・福祉・保健それぞれが対応を進めているが、経験のない事態に多くの従事者が不安を抱え

ている状況にある。そこで、現在の状況を「災害」ととらえ、感染看護を中心に、人員と物資の管理体制について課題を共有し対策を検討する検討会を企画した。

先ず、木下准教授から、把握している情報として、消耗備蓄品をどの程度備蓄したらよいかという目安、また、不足時にどこにどのようにして依頼したらよいか、予防策としてどこまでPPEの着用をすればよいか、濃厚接触者へはどのような対応をすればよいか、等の情報が臨床から寄せられていることの説明があった。更に、本学の取り組みに加え、現在行っている県下の訪問看護ステーションを対象とした調査の結果の一部として、新型コロナウイルスの感染拡大の状況に不安である、将来の人員の不足が予想される、現状でも個人防護具が不足しているが将来更にそうなると思われる、などが報告された。また、世界や日本の感染状況に加え、医療従者の感染リスクと感染状況についてデータを基に説明があった。

その後、参加している各ステーションから、他のステーションからの協力を得ている、グループ内での協力体制を検討しているなどの状況報告があった。また、各ステーションと訪問看護の協議会との連携や、そのための日頃からのネットワーク構築の必要性等の意見交換がされた。特に、重度のケアを必要とする患者の、主たる介護者が濃厚接触者となった場合のレスパイト入所先の確保が喫緊の課題であることが確認・共有された。

2) 領域活動

(1) リカレント教育、交流会

令和2年度現在、修了生は3名であり、修了生を集めてのリカレント教育等は行わなかった。修了生が未だ少ないこと、在学生に関しては以下の定期的なミーティングがあることにより、具体的な交流会の開催は企画しなかった。本領域の場合、DNGLの学生は本学の学生ばかりではなく、他の4大学の学生もおり、学生同士の交流は日常的にあるが、教員を含めた交流はあまり活発ではない。例年、日本災害看護学会や世界災害看護学会、あるいはEAFONSなどではDNGLの学生が学術的な交流会を企画したり、情報交換や意見交換をする場を設けることがあり、教員も参加していたが、今年度はCOVID-19の拡大により、それらの企画はなかった。

(2) 定例月曜ミーティング

毎週月曜日の12時～12時50分に、定例ランチョンミーティングを開催している。令和元年度は対面で行っていたが、今年度はCOVID-19の関係でZoomによる遠隔ミーティングとなった。内容は、隔週で学生の研究の進捗状況の報告と相談、隔週で学生が博士論文、研究計画書、インターンシップや災害看護活動の報告などのプレゼンテーション、教員の研究報告や教育的なレクチャーなどを行った。報告されたテーマは「2018年西日本豪雨の教訓から見るwith/after コロナの2020年九州豪雨の考察」「高知での県・市町村・看護協会による災害看護協力協定　～災害支援ナース等の活用について～」「日本原子力研究開発機構でのインターンシップからの学び」「放射線災害被災地域で生きる ―高齢者にとっての復興―」「被災地で収集されるデータとその活用に関する課題」「数値シミュレーション」「福島スタディツアー～東日本大震災から10 年、今の福島を見つめる」「高知における防災を通じた産官学連携の取り組み」などであった。

2. 研究活動

災害・国際看護学領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて「災害に関連する専門職者・行政と住民とのリスクコミュニケーションガイドラインの提案」(研究代表者: 山田覚、2020～2023年度)、「全被災者の健康状態把握を支援するモバイル・ツール開発研究」(研究代表者: 木下真理、2020～2023年度)、「地域の全体

最適を目指した減災ケアの可視化とツールの開発」(研究代表者: 神原咲子、2018～2022 年度)、「住民参加型モニタリングによる生活環境評価法の開発」(研究代表者: 神原咲子、2018～2021 年度)、高知県立大学戦略的研究の助成を受けて「大学-臨床連携システムによる感染症に対する地域包括的な対応能力の向上」(研究代表者: 木下真理、2020 年度)、「災害時意思決定支援モバイル・ツール開発のための基礎調査-被災地における看護有資格者の医療知識／技術情報ニーズについて-」(研究代表者: 木下真理、2019～2020 年度)に取り組んでいる。

研究成果として、Malaria Journal 1 編、European Journal of Molecular & Clinical Medicine 1 編、International Journal of Environmental Research and Public Health 1 編、Disaster Medicine and Public Health Preparedness 1 編、Sustainability 1 編、高知女子大学看護学会誌 1 編、高知県立大学紀要 看護学部編 1 編、日本公衆衛生雑誌 1 編、法律のひろば 1 編、自治実務セミナー1 編、河川 1 編の論文投稿を行った。

学会発表は、6th International Research Conference of World Society of Disaster Nursing 1 題、5TH IFIP CONFERENCE ON INFORMATION TECHNOLOGY IN DISASTER RISK REDUCTION ITDRR 2020 1 題、iSAI-NLP-AIoT2020 1 題、日本災害看護学会 4 題、第 24 回日本看護管理学会学術集会 2 題、第 30 回日本看護教育学会学術集会 1 題、第 58 回日本医療・病院管理学会学術集会 1 題、第 15 回医療の質・安全学会学術集会 1 題、第 40 回日本看護科学学会学術集会 2 題、第 11 回 日本プライマリケア連合学会学術大会　1 題、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会 1 題の発表を行った。

3. 活動の評価

災害・国際看護学領域では、今年度初めてケア検討会を企画・運営した。COVID-19 の拡大の中、DNGL の教員や院生は遠隔授業に慣れていることから、迷わず Zoom によるウェッブケア検討会をすることとなった。参加者も合計 49 名であり、想定よりも多くの参加者を得ることができた。一方、これまで本領域の学生や教員は、国内外の地域で活動することが比較的多かったが、COVID-19 により今年度は殆ど活動ができなかった。特に、学生の教育として、地域の小中学校や高等学校での減災教育ができなかった。

DNGL の学生募集は令和 2 年度入試をもって停止し、災害・国際看護学の学修を希望する学生に対しては、令和 3 年度入試からは看護学研究科看護学専攻の前期およご後期課程を設置し対応した。令和 3 年度入試では、両課程に合格者があり、共同災害看護学専攻から看護学専攻への移行ができた。今後は、両専攻の教育・研究を推進するとともに、新領域としての実績を重ねて行く必要がある。

4. 次年度の課題

次年度から大学院の看護学専攻に災害・国際看護学領域が正式に設置され、前期課程 4 名(海外 1 名)、後期課程 1 名の大学院生を迎える予定である。共同災害看護学専攻の学生は 6 名(海外 2 名)在籍しており、計 11 名となり大学院生のマンパワーは確保されるが、前述の地域での活動の活発化は更なる課題となる。また、継続的に大学院生を受け入れ、これまで共同災害看護学専攻の活動で築いて来た県内外、あるいは国外のネットワークを維持していることは、大きな課題である。

19. 高知女子大学看護学会

高知女子大学看護学会は、看護学の進歩発展と、地域の看護職者の研鑽および看護の質向上に貢献することを目的として、看護学会の開催、公開講座の開催、高知女子大学看護学会誌の発行、奨学金の貸与などの活動を行っている。本学会の運営委員の約半数は、本学部の教員が引き受けており、学外の様々な現場で活躍している運営委員とともに活動に取り組んでいる。また、運営委員以外の学部の教員からも多くの協力を得て、これらの諸活動をスムーズに展開することができている。

1）第 46 回高知女子大学看護学会の開催

令和 2 年 7 月 18 日、昨年度に引き続き『人生百年時代の看護の SHIFT（シフト）』をテーマに実施を予定していた第 46 回高知女子大学看護学会は、COVID-19 の蔓延防止と参加者の安全と健康を第一に考え中止した。第 46 回のテーマや内容は来年度 47 回学会に引き継ぎ、若干の修正を加えて実施する予定である。また、COVID-19 がなかなか収束しない状況を鑑み、開催方法についても、遠隔と対面を組み合わせたハイブリッド方式など検討していく。

2）高知女子大学看護学会誌の発行

学会誌を 2 巻発行した。詳細は以下の通りである。

・高知女子大学看護学会誌　第 45 巻 2 号：令和 2 年 6 月発行
原著論文 8 編、総説 2 編、研究報告 3 編、文献検討 1 編、令和元年度高知女子大学会公開講座報告

・高知女子大学看護学会誌　第 46 巻 1 号：令和 2 年 12 月発行
原著論文 5 編、総説 1 編、研究報告 5 編、令和 2 年度高知女子大学看護学会総会報告

3）2020 年度　高知女子大学看護学会「公開講座」について

高知県立大学と共催で実施する 2020 年度の公開講座も COVID-19 の蔓延防止と参加者の安全と健康を第一に考え中止した。県外からの参加者も多いこと、また、「実践的に研究方法を学ぶ」という趣旨に則り、講義方法としてグループワークやディスカッションなどを多く取り入れており、遠隔での実施も難しいと考えられたことが理由である。2021 年度については、遠隔での実施を考慮し、講師とも講義方法について相談しながら実施を検討していきたいと考えている。

4）奨学金の貸与

2020 年度は奨学金への応募者は 0 名であった。広く学会員に奨学金について知ってもらえるよう広報等につとめる。

20. 卒業生・修了生への支援活動

1） 再就職や進学・就職・国家試験への支援

看護学部では、在学生に対して、就職・進学・国家試験への支援を行い、3 回生からは重点目標を設定して取り組んでいる。卒業生に対しても、在学中の学年担当教員と看護研究指導教員を中心に、キャリアアップ支援を継続している。

令和 2 年度は、例年開催している高知女子大学看護学会や高知県立大学看護学部同窓会がコロナ禍の影響で開催できず、卒業生や修了生と対面での積極的な交流は叶わなかった。学部や大学院でおこなった看護研究の成果については、学会発表や誌上発表できるように卒業・修了前から支援を継続した。さらに、キャリアアップのための新たな就職や進学の相談に対しても、メールだけでなくオンラインを活用し支援した。日常的には、就職した施設において、在学生が実習する機会を捉えて卒業生の相談に応じた。国家試験についても、卒業生が受験の必要がある場合は、各種受験手続きの支援、模擬試験受験の支援、学習意欲継続への支援を行った。さらにそれぞれの専門領域の教員が、卒業後 5 年前後の人を対象にして、大学院進学への相談を実施したり、大学で実施している教育研究活動・地域貢献活動・ケア検討会への参加を促進して、卒業生のキャリアアップ支援を行った。

2） 高知県内の卒業生に対するキャリア支援

高知県内の卒業生に対するキャリア支援に関しては、年間目標に基づき、①文献の配布、②図書の紹介、③キャリア・進学相談の活動を行った。例年は、学内での技術練習を行っていたが、COVID-19 感染拡大の防止に伴い、実施しなかった。

2020 年 3 月卒業の新たな登録者は、県内就職者を中心に 28 名であった。

③のキャリア・進学相談を 9 月半ばから告知し、SNS、電話で相談を受け付けた。大学院等キャリア支援相談に関しては、延べ 10 件の相談があった。その中で 2 名は本学大学院を受験した。また、本年度の特徴として、首都圏に就職していた卒業生が、地元に戻ることへの相談を新たに受けた。延べ、12 件の相談があり、必要時は関係する教員と連携するようにした。

近年の傾向として、大学院進学等の将来のキャリア支援に関するニーズが高まる状況にあり、来年度以降も継続して活動を行う。また、登録者を増やすためにも卒業式前後に集中して活動の告知と募集を行って行くよう計画している。

3） CNS・認定看護管理者認定等の支援

看護学研究科博士前期課程では、平成 12 年 3 月に 1 期生が修了して以来、専門看護師の認定試験に向けて支援を行っている。大学院修了前に主指導教員は、大学院生の背景や個別性を尊重し、修了後の資格認定までの計画を学生とともに立案している。修了後は、その計画に沿って定期的に事例検討会や勉強会の開催、コンサルテーション、大学院の特別講義の連絡や講師依頼、共同研究、先輩 CNS の紹介などを行い、CNS 認定及び認定更新への支援をしている。

令和元年までに専門看護師コースを修了し、認定試験に合格した専門看護師は、9 領域 120 名であり、研究コース、実践リーダーコースにおいては修了後、25 名が認定看護管理者の資格を得て、活躍している。令和 2 年度は、がん看護 CNS1 名、小児看護 CNS2 名、家族支援 CNS1 名、急性・重症患者看護 CNS2 名計 6 名の修了生が CNS 認定試験に合格し高度実践看護師として活動している(表 1)。また、認定看護管理者の認定試験には 2 名が合格した。

表 1 修了生の専門看護師・認定看護管理者認定数

領 域	がん看護	慢性疾患看護	急性・重症患者看護	小児看護	精神看護	家族看護	地域看護	在宅看護	老人看護	看護管理	合 計
令和 2 年度	1		2	2		1				2	6
総計	40	3	4	23	20	16	2	10	3	25	CNS:120 名 認定看護管理者:25 名

4） 看護学部同窓会活動

2020 年度、看護学部同窓会役員一覧は、表 2 の通りである。

表2 2020年度同窓会役員

役員名	氏 名	卒業・修了期	所 属
会長	梶原和歌	10期生	近森病院 顧問
副会長	藤田佐和※1	28期生	高知県立大学看護学部長
	中野綾美	27期生	高知県立大学看護学部
書記	田鍋雅子	38期生・修士13期生・博士18期生	高知医療センター看護局
	山中福子	修士7期生	高知県立大学看護学部
会計	川上理子	35期生・博士9期生	高知県立大学看護学部
	西内舞里	46期生・修士12期	高知県立大学看護学部
会計監査	野田真由美	34期生	高知市保健所
	矢野智恵	38期生・修士1期生・博士17期生	高知学園短期大学
庶務	角谷広子	25期生,修士5期生	芸西病院看護部
	池添志乃	34期生,修士2期生,・博士1期生	高知県立大学看護学部
	川本美香※2	修士13期生・博士18期生	高知県立大学看護学部

但し、※1：看護学部長、※2：看護学会役員は当て職である

(1) 2020 年度の活動

①第 10 回同窓会総会の開催
②役員会の開催
③講演会（高知女子大学看護学会との共催）
④会報（第 21・第 22 号）の発行
⑤高知女子大学看護学会への支援
⑥学生及び同窓生活動への支援
⑦緊急奨学金貸与
⑧給付型特別奨学金

(2) 活動の実際

① 第 10 回同窓会総会の開催

COVID-19 感染拡大防止と会員皆様の健康と安全面への配慮から、令和 2 年度の同窓会総会の対面での開催を中止し、文書（議決権）送付による総会とし、議案賛否のお返事をいただく形とした。議事として、(1)令和元年度活動報告、(2)令和元年度決算報告、(3)令和元年度会計監

査報告があった。また、審議事項として、⑴令和 2 年度活動計画案、⑵令和 2 年度予算案、⑶令和 2 年度同窓会役員について審議し、承認された。

② 役員会の開催

役員会は、4 回開催した。第 1 回役員会は 7 月にメール開催し、本年度の活動、会報、総会および懇親会の企画、学部生の緊急奨学金貸与等について審議し、役割別年間スケジュールが確認された。同窓会総会、懇親会、同窓会報第 21 号について審議された。第 2 回、第 3 回役員会は 12 月 11 日、12 月 21 日にオンラインで行い、給付型特別奨学金申請に関して審議された。第 4 回役員会は 2020 年 1 月 6 日にオンラインで開催され、同窓会報第 22 号、2020 年度活動案、給付型特別奨学金申請等について審議された。

③ 講演会の開催（高知女子大学看護学会との共催）

講演会は、7 月開催予定であった高知女子大学看護学会が中止となり、開催されなかった。

④ 会報の発行：2020 年度は、第 21 号と第 22 号の 2 回の会報を発刊した。

a. 第 21 号の発行

第 21 号は、第 10 回総会の報告に合わせて令和 2 年 10 月 26 日に発行した。本号では、令和 2 年度同窓会総会報告、同窓会役員紹介、令和元年度活動・会計報告・令和 2 年度予算案、第 45 回高知女子大学看護学会報告、6 月 27 日に開催された、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会（学術集会長:高知県立大学看護学部教授　森下安子）報告、COVID-19 予防対策への取り組み等を掲載した。

b. 第 22 号の発行

会報第 22 号は 2021 年 3 月に発行した。本号では、COVID-19 感染拡大の中で懸命に取り組まれている卒業生による報告、メッセージで構成した。

卒業生が活躍している所属機関を紹介する記事では、駒木野病院、土佐市で活躍している卒業生から、さらに幅広い領域で活躍する修了生では、ハストロ氏（DNGL 期生）、高樽由美氏（修士期生）、さらに、全国で活躍する卒業生・修了生では、66 期生の山口央人氏、山﨑早恵氏、中森未空氏、野里姫佳氏の卒後 1 年目の同窓会員にメッセージをいただいた。

⑤ 高知女子大学看護学会との共催

平成 25 年度より、高知女子大学看護学会へ毎年資金支援を行っており、令和 2 年度は、30 万円の支援であった。同窓会発足当時より、高知女子大学看護学会との共催で講演会を開催しており、今後も、両者の連携を図りながら、学術の進化、ネットワークの拡大に努めていく方針である。

⑥ 学生及び同窓生活動への支援

卒業生、修了生が学会長として開催した第 25 回日本在宅ケア学会学術集会への支援を行った。

⑦ 緊急奨学金貸与

2020 年度の緊急奨学金貸与の申請はなかった。

⑧ 給付型特別奨学金

看護学部生からの申請に基づき、役員会での審議のうえ 4 名の学生へ給付支援を行った。

第２部

看護学部教員の活動

中野　綾美(教授)

■審議会や学会活動

- 公益財団法人大学基準協会基準委員会委員
- 公益財団法人大学基準協会大学評価委員会
- 一般在団法人日本看護学教育評価機構評価基準検討委員会委員
- 日本看護系大学協議会専門看護師教育課程認定委員会分科会（小児看護）副委員長
- 日本家族看護学会理事（教育促進委員会委員長）
- 日本看護倫理委員会評議員
- 日本家族看護学会専任査読委員
- 日本小児看護学会専任査読委員
- 高知県小児保健協会理事
- 高知県周産期医療研修会理事
- 高知県母性衛生学会理事

所属学会等：日本看護科学学会、日本小児看護学会、日本家族看護学会、日本小児保健学会、日本災害看護学会、日本看護倫理学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 副学長（研究・教育担当）としての活動
- 教育研究審議会委員・部局長会議メンバーとしての活動
- 学術戦略委員会委員長としての活動
- 大学教育改革プロジェクト委員会委員としての活動
- 大学院あり方検討会委員長としての活動
- 法人評価専門部会長としての活動
- IR 検討プロジェクト委員長としての活動
- 非常勤採用審査委員会委員長としての活動
- 共同教育課程運営員会委員としての活動
- 進化型実務家教員養成プログラム運営委員会委員としての活動
- 教員評価委員としての活動
- 自己点検評価委員としての活動
- 看護学研究科委員としての活動
- 看護学部総務委員会委員としての活動

■領域活動

- 博士論文の投稿(原著)支援
- 修士論文の投稿(口頭発表・原著)支援
- 修了生の CNS 認定申請への支援

■著書及び研究論文

【著書】

1) 中野綾美(編著), 田中克枝, 益守かづき, 上野昌江, 高谷恭子, 佐東美緒, 幸松美智子, 勝田仁美, 二宮啓子, 平林優子, 川島美保, 岡田洋子, 染谷奈々子, 日沼千尋, 宗村弥生, 鈴木千衣, 三宅一代, 品川陽子, 萩原綾子, 濵田裕子, 濱田米紀, 有田直子, 石浦光世, 加藤依子, 長谷部貴子, 三浦由紀

子：ナーシング・グラフィカ小児看護学　1 章 5 節(p.57-73),3 章 2 節 2-7(p.195-221) 3 章 8 節(p.277-287),4 章 1 節(p.310-319),資料 3(p.408-409),2020

2) 中野綾美(編著) ,石浦光世,佐東美緒,萩原綾子,染谷奈々子,濱田米紀,有田直子,幸松美智子,高谷恭子：ナーシング・グラフィカ小児看護学　小児看護技術，10 章(p.246-258)，メディカ出版,2020.

3) 片田範子編集 有田直子，石浦光世，及川郁子，勝田仁美，加藤令子，河俣あゆみ，栗林佑季，鍬田晃子，小室佳文，近藤美和子，笹山睦美，佐東美緒，添田啓子，高谷恭子，田村恵美，田村佳士枝，手塚園江，中野綾美，西川奈央，沼口知恵子，橋倉尚美，原朱美，眞鍋裕紀子，山﨑麻未:子どもセルフケア看護理論　5 章：こどもと家族，p.130-164，第 1 版第 1 刷，医学書院,2020.

4) 中野綾美(編著) ,瓜生浩子(編著)，：家族看護学－家族のエンパワーメントを支えるケア 1 章 家族を看護するということ，第 1 版第 1 刷，メディカ出版,2020.

【論文】

1) 嶋岡暢希,中野綾美,野嶋佐由美：乳児期の子どもを育てる親の Mastery－構成要素と関連要因の探索－,高知女子大学看護学会誌、Vol46(1)、pp15-30,2020.

2) 池添志乃,瓜生浩子,田井雅子,中野綾美,中村由美子,大川貴子,中山洋子,中平洋子,畠山卓也,森下幸子,坂元綾,野嶋佐由美：災害後の家族レジリエンスを促す“立ち上がる力を発揮できるように導く”看護アプローチ,高知女子大学看護学会誌,Vol45(2),pp27-36,2020

3) 瓜生浩子,池添志乃,畠山卓也,田井雅子,中野綾美,大川貴子,中山洋子,中村由美子,中平洋子,森下幸子,坂元綾,野嶋佐由美：被災した家族が経験する苦悩と“苦悩の連鎖が止まるように導く”看護アプローチ,高知女子大学看護学会誌,Vol45(2),pp37-48,2020

4) 永井友里，高谷恭子，中野綾美：学童期に新たな経管栄養法を必要とした重症心身障がい児を育むは親のベネフィット・ファインディング,高知女子大学看護学会誌,Vol45(2),pp69-77,2020.

5) 染谷奈々子，中野綾美：我が国の小児看護専門看護師の実践に関する文献検討,高知女子大学看護学会誌,Vol45(2),pp105-115,2020.

6) 田井雅子,池添志乃，瓜生浩子，中野綾美，大川貴子，中山洋子，中村由美子，中平洋子，畠山卓也，森下幸子，坂元綾，永井眞寿美，野嶋佐由美高知女子大学看護学会誌、Vol46(1)、pp15-30,2020.

藤田　佐和(教授)

■審議会や学会活動

- 日本がん看護学会　理事　代議員
- 日本看護科学学会代議員　専任査読委員　学術集会演題査読
- 日本緩和医療学会、日本慢性看護学会　代議員・学術集会演題査読
- 日本看護倫理学会評議員　学術学会演題査読
- 聖路加看護学会評議員　査読委員
- 日本家族看護学会、高知女子大学看護学会　専任査読委員
- 大学改革支援・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員
- 日本看護系大学協議会専門看護師教育課程認定委員会分科会委員
- 日本死の臨床研究中国四国支部世話人
- NPO高知県緩和ケア協会理事　学術委員会委員長
- 高知県がん教育推進協議会委員
- 高知がん診療連協議会委員
- 高知県国民健康保険運営協議会委員
- 高知県ナースセンター運営協議会委員
- 高知県の看護を考える会委員
- 高知医療センター治験審査委員会委員
- 高知医療センター地域医療支援病院運営委員会委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本がん看護学会、日本緩和医療学会、日本臨床腫瘍学会、日本癌治療学会、日本慢性看護学会、日本看護倫理学会、日本生命倫理学会、日本災害看護学会、日本家族看護学会、高知女子大学看護学会、聖路加看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部長として学部全般の運営
- 教育研究審議会委員・部局長会議メンバーとしての活動
- 学部長に規定される委員会活動
- 看護学部総務委員会委員長としての活動
- カリキュラム検討チームとしての活動
- 高知医療センター包括連携第1部会・第2部会の活動
- 高知医療センター包括連携看護学部幹部会・委員会としての活動
- 高知県立大学看護学部同窓会副会長としての活動

■領域活動

- 修士論文指導（修士1年2名,修士2年2名）　修士論文の投稿（口頭発表・原著）支援
- 博士論文指導　主査（4名）ならびに他領域の副査（3名）として研究指導、博士論文投支援
- がん高度実践看護師APNセミナー（7回シリーズ）、がん看護学特別講義の企画
- 修了生の会(アストラル)の支援
- 看護相談室「質の高いがん看護実践を検討する会（2回/年）」の企画
- 文部科学省多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プランの活動
  - ①　中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム理事、がん高度実践看護師コース幹事校、カリキュラム企画運営委員
  - ②　インテンシブコースⅠ：訪問看護師育成の15日間研修の企画・運営
  - ③　インテンシブコースⅡ：遺伝性腫瘍と生きる患者へのがん看護の講演会の企画・運営
  - ④　がん高度実践看護師（APN）Ⅰ・Ⅱコースの企画・運営

⑤　QUARTERLY REPORT他

- NPO高知緩和ケア協会 第19回研究発表会の企画
- 高知県におけるがん教育推進事業の活動

■非常勤講師等

- 徳島大学大学院医歯薬学研究部保健科学部門非常勤講師

■著書及び研究論文

【書籍】

1) 荒尾晴恵編集 ケアを可視化 中範囲理論・看護モデル : 藤田佐和,マステリ, 112-123,2021.3,南江堂

【論文】

1) 岡西幸恵, 藤田佐和 : 調和の概念分析　がんサバイバーへの看護実践・研究における概念活用の有用性, 高知女子大学看護学会誌, 45(2), 1-14, 2020.6
2) 小松美帆, 森本悦子, 藤田佐和 : 頭頸部がんの手術を受け機能障害を抱えた高齢者が日常生活に適応していく力, 高知女子大学看護学会誌, 45(2), 49-56, 2020.6
3) 庄司麻美, 藤田佐和 : 熟練看護師が行う全人的呼吸困難感を体験しているがん患者のアセスメント, 高知女子大学看護学会誌, 45(2), 78-88, 2020.6
4) 岩本真紀, 萱原沙織, 渡邊美奈, 藤田佐和 : 再発・転移を経験したがんサバイバーがストレングスを発揮して生きるプロセス, 日本がん看護学会誌, 34 巻,145-154,2020
5) 中谷信江 ,藤田佐和 : 健康維持・回復のための自己調整の概念分析 -がん看護における概念活用の有用性- , 高知女子大学看護学会誌, 46(1), 2-14, 2020.12
6) 田代真理, 藤田佐和 : がん患者のアドバンスケアプランニングの看護支援についての実態調査, 高知女子大学看護学会誌, 46(1), 31-40, 2020.12
7) 有田直子, 藤田佐和, 門田麻里, 庄司麻美, 森本 悦子 :「がん高度実践看護師コース AYA 世代がん患者のケアとキュア」における看護介入モデルの作成を取り入れた教育効果, 高知県立大学紀要(看護学部編) ,70 巻, 33-42,2021.3

【学会発表】

1) 島田美華, 藤田佐和, 森本悦子 : 造血器腫瘍患者のエンパワーメントを支える退院支援 ～自由記載の内容を通して～, 第 35 回日本がん看護学会学術集会, 神戸, 2021.2
2) 竹内奈々恵, 藤田佐和, 森本悦子 : 中山間地域における 終末期がん患者の在宅移行支援を行う看護師の困難と対処,第 35 回日本がん看護学会学術集会, 神戸, 2021.2
3) 松山円, 遠藤久美, 高橋利明, 森本悦子, 藤田佐和 : 外来化学療法を継続して受ける再発・転移がん患者の心理的体験, 第 35 回日本がん看護学会学術集会, 神戸, 2021.2

大川　宣容（教授）

■審議会や学会活動

- 日本がん看護学会代議員
- 日本看護科学学会代議員
- 日本看護シミュレーションラーニング学会理事　研究活動推進委員会委員長

所属学会等：日本看護科学学会、日本がん看護学会、日本家族看護学会、日本クリティカルケア看護学会、日本救急看護学会、日本看護シミュレーションラーニング学会、日本災害看護学会、日本医療教授システム学会、日本集団災害医学会、日本救急医学会、日本集中治療医学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学研究科長として研究科全般の運営
- 教育研究審議会･部局長会議委員としての活動
- 高知県立大学研究倫理委員会委員としての活動
- 高知県立大学教員評価部会委員としての活動
- 看護研究倫理審査委員会委員長
- 学部・研究科自己点検評価委員
- 看護学部総務委員
- 臨床実習委員会委員長
- 高知医療センター包括的連携・看護部会委員
- 学術戦略的研究事業による、大学−臨床連携システムによる感染症に対する地域包括的な対応能力の向上
- 看護学部シミュレーション教育プロジェクトチームリーダー
- 看護学部遠隔教育プロジェクトメンバー

■領域活動

- クリティカルケア看護学領域修了生の専門看護師資格認定、資格更新に向けた支援
- 大学院教育、学部教育それぞれの教育目標にあわせた、シミュレーション教育の充実と発展に向けて領域の教員と協力して取り組んだ。
- 高知医療センターとの包括的連携事業：ＩＣＵにおける教育セミナー講師

■非常勤講師

- 岡山県看護協会　新人看護職員育成研修講師「看護技術の指導と評価」
- 高知県看護協会　新人看護職員育成研修講師「看護技術の指導と評価」

■研究論文

【研究論文】

1) 井上 正隆, 田中 雅美, 森本 紗磨美, 岡林 志穂, 大川 宣容：救急外来看護師が行う悲嘆ケアの実態調査,高知女子大学看護学会誌,45（2）,p89-98,2020
2) 大川宣容,井上正隆,田中雅美,森本紗磨美,岡林志穂,西塔依久美：救急外来看護師による悲嘆ケア：看護師の属性からみた自由記述内容の傾向～自由記述内容のテキストマイニングによる分析～,高知県立大学紀要　看護学部編,2021

3) 藤本王子,大川宣容：人工呼吸器装着患者のポジショニングにおける ICU 看護師の臨床判断,高知女子大学看護学会誌 46 巻 1 号,p41-48,2020

【学会発表】

1) 森下幸子,万代康弘,大川宣容,小原弘子,源田美香,竹中英利子,森下安子,池田光徳：新卒訪問看護師の力を引き出すシミュレーション研修の評価,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会（高知市）,2020 年 6 月
2) 馬屋原健裕,大川 宣容：ICU 看護師のせん妄ケアにおける臨床判断,第 16 回日本クリティカルケア看護学会学術集会,2020 年 7 月
3) 坂野真美, 大川宣容：救急外来に配置転換した救急看護師の成長,第 22 回日本救急看護学会学術集会,2020 年 12 月
4) 西塔依久美,大川宣容,菅原美樹,中村惠子：院内トリアージにおける看護ケアモデルの開発に関する研究　第 1 報－トリアージにおける看護ケアとは何か？－,第 22 回日本救急看護学会学術集会,2020 年 12 月
5) 西塔依久美,大川宣容,菅原美樹,中村惠子：院内トリアージにおける看護ケアモデルの開発に関する研究　第 2 報－トリアージにおける看護ケアに至る思考過程の分析－,第 22 回日本救急看護学会学術集会,2020 年 12 月

森下　安子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本在宅ケア学会理事
- 第25回日本在宅ケア学会学術集会長
- 日本災害看護学会評議員
- 日本在宅ケア学会査読委員
- 日本在宅看護学会査読委員
- 日本看護系学会協議会専門看護師教育課程認定委員会委員・在宅看護専門部会委員長
- 高知県教育委員
- 高知県看護協会第一副会長
- 高知県高齢者保健福祉推進委員会委員
- 高知県訪問看護推進協議会会長
- 高知市地域高齢者支援センター運営協議会委員
- 高知市地域密着型サービス運営委員会委員
- 伊野、吾北、日高村介護認定審査会委員
- いの町地域包括支援センター運営協議会委員
- いの町地域密着型サービス運営委員会委員
- 日高村地域包括支援センター運営協議会委員長
- 日高村地域密着型サービス運営委員会委員
- 日高村障害程度区分認定審査委員
- 高知県介護支援専門員研修等向上委員会会長

所属学会等：日本看護科学学会、日本地域看護学会、日本在宅ケア学会、日本在宅看護学会、日本ケアマネジメント学会、日本災害看護学会、高知女子大学看護学会、日本家族看護学会、日本医療マネジメント学会

■大学・看護学部企画活動

- 学生部長としての活動
- 学部、大学院、センター試験に関する入試実施委員長としての活動
- 教育研究審議会委員・部局長会議メンバーとしての活動
- 看護学部総務委員としての活動
- 健康長寿センター運営委員、健康管理センター運営委員としての活動
- 健康長寿センター事業：高知県中山間地域等訪問看護師育成講座責任者としての活動
- 健康長寿センター事業：基金事業「退院支援体制推進事業」（高知県医療政策課からの受託）責任者としての活動
- 健康長寿センター事業：基金事業「介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修（特定の者)」（高知県障害保健福祉課からの受託）の運営、研修講師としての活動
- 健康長寿センター：土佐市連携プロジェクトメンバーとしての活動

■領域活動

- 修了生への支援
  - ①　修士論文の投稿（口頭発表・原著）支援
  - ②　CNS継続認定への支援
  - ③　自主勉強会企画運営に関する支援

- 高知県看護協会との連携・協働（在宅ケア従事者研修運営委員長、地域包括ケア委員会委員、研修講師）
- 高知県社会福祉協議会との連携・協働（介護支援専門員、実務研修、更新研修、主任ケアマネジャー研修、指導者育成研修の企画及び講師）
- 高知県高齢者福祉課との連携・協働（地域包括支援センター研修企画会議の委員として企画及び講師、地域包括ケアマネジメントリーダー研修講師）

■著書及び研究論文

【著書】

1) 森下安子（鈴木志津枝・藤田佐和編）：成人看護学 慢性期看護論第 3 版－療養生活を支える社会資源の活用,ヌーベルヒロカワ,p138-147,

【学会発表】

1) 源田美香,森下幸子,森下安子,池田光徳：訪問看護スタートアップ研修における家族看護の学び-研修後の自己記入式評価の内容分析、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020
2) 中井美喜子,森下安子,森下幸子,源田美香,廣末ゆか：中山間過疎地域における看取り体制の構築-アクションリサーチを用いた事例検討会の評価、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020
3) 久保田聡美、乾由美、森下安子、西内章、大松重宏：地域・多職種協働型退院支援事業における CD 能力修得プログラム開発と評価－つなぐ人材育成を目指して－、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020
4) 竹中英利子、川上理子、森下安子：慢性腎臓病患者の在宅療養を支える外来看護－多職種連携の視点から－、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020
5) 村田ゆかり・宮地広美・岡田茜・乾由美・竹中英利子・森下安子：入退院支援での地域と病院の連携強化を目指して－地域へのインタビューを通して－、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020
6) 乾由美、森下安子、久保田聡美、西内章、山中福子、廣内智子、井上健朗：地域・病院・多職種協働型の入退院支援体制構築に向けた職種協働研修の評価、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020
7) 森下幸子,万代康弘,大川宣容,小原弘子,源田美香,竹中英利子,森下安子,池田光徳：新卒訪問看護師の力を引き出すシミュレーション研修の評価、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020

池田　光徳（教授）

■審議会や学会活動

- 日本皮膚科学会高知地方会幹事
- 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム臨床治験推進委員会委員
- 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムファカルティ・ディベロプメント委員会委員
- 相模女子大学・相模女子短期大学部の研究活動に係る不正防止規程及びヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会規程に定める外部委員
- 高知県健康づくり推進協議会委員
- 高知県地方薬事審議会委員
- 高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会委員
- 高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会健康長寿・地域連携部会委員
- 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ運営委員

所属学会等：日本皮膚科学会、日本研究皮膚科学会、日本免疫学会、日本乾癬学会、日本臨床皮膚科医会、日本皮膚科学会西部支部、日本皮膚科学会高知地方会、日本臨床皮膚科医会四国支部、Society for Investigative Dermatology（米国研究皮膚科学会）

■大学・看護学部企画活動

- 高知県立大学健康長寿センター長
- 高知県立大学教育研究審議会委員
- 高知県立大学部局長会議委員
- 高知県立大学研究倫理委員会委員長
- 高知県立大学健康長寿センター運営委員会委員
- 高知県立大学入学試験実施委員会副委員長
- 高知県立大学大学院看護学研究科委員
- 高知県立大学教員評価部会委員
- 高知県立大学看護学部教務委員会委員（医学知識強化委員）
- 高知県立大学看護学部FD委員会委員

■領域活動

- 訪問看護スタートアップ研修において「皮膚疾患と褥瘡治療」を担当した。

■非常勤講師等

- 高知大学医学部臨床教授
- 高知大学医学部非常勤講師
- 高知学園短期大学非常勤講師

■著書及び研究論文

【論文】

1) Ngatu NR, Kanbara S, Renzaho A, Wumba R, Mbelambela EP, Muchanga SMJ, Muzembo BA, Leon-Kabamba N, Nattadech C, Suzuki T, Oscar-Luboya N, Wada K, Ikeda M, Nojima S, Sugishita T, Ikeda S: Environmental and sociodemographic factors associated with

household malaria burden in the Congo. Malar J 2019,18(1):53. doi: 10.1186/s12936-019-2679-0. https://doi.org/10.1186/s12936-019-2679-0

2) 坂元　綾, 池田光徳: 高知県内における糖尿病患者のフットケアに関する調査. 高知女子大学看護学雑誌 44: 136-144, 2019
3) 森下幸子, 野村陽子, 森下安子, 川上理子, 小原弘子, 池田光徳: 中山間地域等の新任・新卒訪問看護師育成のための「訪問看護師スタートアップ研修」の評価. 高知県立大学紀要 看護学部編 68: 25-39, 2019
4) Masuda S, Ikeda M: Verification of finger moisture retention after using vaseline and wearing gloves while sleeping. Nur Primary Care 2020, 4(3):1-5. doi: NPC-20-143. ISSN 2639-9474
http://scivisionpub.com/pdfs/verification-of-finger-moisture-retention-after-using-vaseline-and-wearing-gloves-while-sleeping-1308.pdf
5) Ngatu NR, Muzembo BA, Choomplang N, Kanbara S, Wumba R, Ikeda M, Mbelambela EP, Muchanga SM-J, Suzuki T, Wada K, Mahfuz HAL, Sugishita T, Miyazaki H, Ikeda S, Hirao T: Malaria rapid diagnostic test (HRP2/pLDH) positivity, incidence, care accessibility and impact of community WASH Action programme in DR Congo: mixed method study involving 625 households. Malar J 2021,20:117　https://doi.org/10.1186/s12936-021-03647-9

【学会発表】

1) 渡邊美保, 井上さや子, 廣末ゆか, 乾あき, 井上健朗, 荒牧礼子, 池田光徳: 認知症当事者と家族にとって優しい地域づくりの取り組み～住民参画型ワークショップを通して～. 第19回日本認知症ケア学会, 新潟市, 2019年6月17日
2) 石元達士, 池田光徳: 原因薬剤中止後も発熱のみが遷延した薬剤性過敏症症候群 (DIHS) の1例. 第73回日本皮膚科学会高知地方会, 高知市, 2019年2月23日
3) Masuda S, Ikeda M: A review of literature on hand-foot syndrome care in Japan. 22nd EAFONS, Singapore, 2019
4) Ngatu RN, Ikeda M, Hamamachi F, Kanbara S, Nojima S: Tosa-SBM and AY-Limo: Food-based Immuno-modulators for Metabolic Disorders? 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019年10月23～25日
5) 石元達士, 寺石美香, 池田光徳: 有棘細胞癌を疑ったクロモミコーシスの1例. 第74回日本皮膚科学会高知地方会, 高知市, 2020年2月15日
6) 小原弘子, 森下幸子, 野村陽子, 森下安子, 池田光徳: 新卒訪問看護師育成におけるシミュレーション教育. 第1回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会, 東京都, 2020年3月1日
7) 源田美香, 森下幸子, 森下安子, 池田光徳: 訪問看護スタートアップ研修における家族看護の学び. 第25回日本在宅ケア学会学術集会 in高知, 高知市, 2020年6月27日～28日
8) 畠山典子, 佐東美緒, 池添志乃, 池田光徳, 荒牧礼子 : 生活習慣病予防健診を受診した小中学生の保健行動に関する認識. ～健診直後と健診3か月後の生活に関するアンケート分析から～. 第25回日本在宅ケア学会学術集会 in高知, 高知市, 2020年6月27日～28日
9) 大澤梨佐, 石元達士, 池田光徳: Spiny keratodermaの1例. 第75回日本皮膚科学会高知地方会, 高知市, 2020年11月14日

時長　美希（教授）

■審議会や学会活動

- 高知県人材育成ガイドライン評価検討会委員
- 高知女子大学看護学会運営委員長

■大学・看護学部企画活動

- 健康管理センター長として活動した
- 教育研究審議会委員として活動した
- 看護学部総務委員として活動した
- 看護学部臨床実習委員会委員として活動した
- 看護学研究科委員会委員として活動した

■領域活動

- 高知県健康福祉部健康長寿政策課が実施している「新任保健師育成に関わるOJT研修会」の企画・実施・評価に継続的に関わり、コンサルテーション、研修会講師、担当者会助言者として活動した
- 高知県中堅期保健師育成支援として、高知県保健活動評価研修において、集合研修およびファシリテーション、各地域に出向いて保健師に対するコンサルテーションを実施した
- 高知県人材育成ガイドライン推進検討会にメンバーとして活動した

＜学会報告・論文投稿の支援＞
- 修了生の論文投稿の支援

■著書及び研究論文

【論文】
1) 中島信恵,時長美希：　教育機関と協働で取り組む保健師人材育成,保健師教育,4巻1号,pp22-28,2020.
2) 川本美香,時長美希：Place Attachmentの概念分析　看護への活用,高知女子大学看護学会誌45(2),pp15-26,2020.
3) 髙橋真紀子,時長美希：地域ケア会議における保健師のファシリテーション,高知女子大学看護学会誌45(2),pp57-68,2020.
4) 廣野祥子,時長美希,野嶋佐由美:「接近困難（hard-to-reach）」と称される人々に関する文献検討.高知女子大学看護学会誌,45(2),pp139-148,2020.

【学会発表】
1) 野村美紀,時長美希：生活習慣病予防に焦点をあてた保健師のヘルスコーチングの構造,日本公衆衛生看護学会学術集会講演集 9 回, p 203,2020.
2) 川本美香,時長美希：看護での活用に向けた Place Attachment 概念の検討―住民による健康な地域づくりに向けて―,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知市,2020.

長戸　和子（教授）

■審議会や学会活動

- 日本看護系大学協議会高度実践看護師教育課程認定委員会（家族看護）委員
- 公益社団法人日本看護科学学会代議員
- 高知県看護協会新人看護職員研修事業運営委員会委員長
- 高知看護教育研究会会長
- 査読委員　高知女子大学看護学会,日本家族看護学会,日本 CNS 看護学会員

所属学会等：日本家族看護学会、日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、
日本がん看護学会、日本災害看護学会、日本看護管理学会、
高知看護教育研究会

■大学・看護学部企画活動

- 全学教務部長
- 教育研究審議会・部局長会議メンバー
- 大学教育改革委員会メンバー
- 教員評価委員会委員
- 自己点検評価・運営委員会委員
- 非常勤講師採用審査委員会委員
- 学部自己点検評価委員
- 看護学部総務委員
- 看護学部カリキュラム検討プロジェクトメンバー

■領域活動

＜家族看護学領域＞

- 家族看護学領域修了生・在学生対象のリカレント教育（事例検討会）を５回開催した

＜基礎看護学領域＞

- 「基本的な看護技術」の習得度調査を実施した

■非常勤講師等

- 愛知県立大学大学院看護学研究科　非常勤講師「家族看護論」
- 順天堂大学大学院看護学研究科　非常勤講師「クリティカルケア看護学特論Ⅰ（対象論）」

■著書及び研究論文

【著書】

1) 中野綾美,瓜生浩子編：家族看護学　家族のエンパワーメントを支えるケア　4 章 4 節,97-108, メディカ出版,2020.

【学会発表】

1) 永井真寿美,佐東美緒,藤代知美,長戸和子：医療者が捉える精神障害をもつ女性の妊娠・出産・育児体験の特性とニーズ,第27回日本家族看護学会学術集会,2020
2) 松石由美子,長戸和子,瓜生浩子,池添志乃：集中治療室で関わりが難しいと感じる 家族に関わる看護者の体験, 第27回日本家族看護学会学術集会,2020

3) 永井真寿美,佐東美緒,藤代知美,長戸和子：妊娠・分娩・産褥・育児期の精神障害をもつ女性と家族への医療者の支援,第 40 回日本看護科学学会学術集会,2020

畦地　博子（教授）

■審議会や学会活動

- 日本看護科学学会代議員
- 日本看護科学学会和文誌専任査読委員
- 日本精神保健看護学会代議員
- 日本精神保健看護学会理事
- 日本精神保健看護学会編集委員長
- 高知女子大学看護学会運営委員会企画委員長
- 高知女子大学看護学会査読委員
- 日本精神科看護協会査読委員
- 社会福祉法人ファミーユ評議員
- 大学設置・学校法人審議会専門委員

所属学会等：日本精神保健看護学会、日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、日本災害看護学会、日本家族看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 入学試験実施委員（博士後期）
- 大学院国際交流委員
- 大学院広報委員
- 看護研究倫理審査委員会委員
- カリキュラム検討チーム

■非常勤講師等

- 愛媛県立医療技術大学大学院非常勤講師「精神看護学特論Ⅱ」
- 土佐清水市地域生活支援拠点等整備事業　人材育成研修講師
- 土佐清水市地域生活支援拠点等整備事業　広報啓発講師
- 学研メディカルサポート講師
- ケース検討会ファシリテーター　土佐病院
- ケース検討会ファシリテーター　芸西病院
- 研究講評　土佐病院
- 研究指導および講評　渭南病院

■著書及び研究論文

【誌上発表】

1) 井上さや子・畦地博子：思春期やせ症をもつ人が体験している身体体験，高知女子大学看護学会誌，45(2)，99-108，2020

【学会発表】

1) 田井雅子・畦地博子・塩見理香・井上さや子・瀧めぐみ：統合失調症の若年者のセルフマネジメントを促進する看護師の姿勢，日本看護科学学会学術集会 39 回

池添　志乃（教授）

■審議会や学会活動

- 大学設置・学校法人審議会専門委員
- 日本養護教諭養成大学協議会副会長
- 日本学校保健学会理事
- 日本学校保健学会編集委員会委員
- 日本家族看護学会評議員
- 日本看護倫理学会評議員
- 中国・四国学校保健学会理事
- 高知県公立学校教員採用候補者選考審査筆記審査問題調査研究員
- 高知県スクールヘルスリーダー連絡協議会委員
- 高知県衛生研究所疫学倫理審査委員会委員
- こうちの子ども健康・体力支援委員会委員
- 十津小学校　開かれた学校づくり推進委員
- 日本家族看護学会学会誌専任査読員
- 高知女子大学看護学会査読員

所属学会等：日本看護科学学会、日本家族看護学会、日本学校保健学会、日本健康教育学会、日本小児看護学会、日本看護倫理学会、日本地域看護学会、日本公衆衛生学会、日本災害看護学会、日本医学看護学教育学会、全国養護教諭連絡協議会、日本養護教諭養成大学協議会、日本養護教諭教育学会、中国・四国学校保健学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 教務委員（学部・教職）
- 看護学部研究環境促進委員会委員長
- 看護研究倫理審査委員会副委員長
- 学部国際交流プロジェクト委員
- 教職試験対策委員
- 高知県立大学看護学部同窓会庶務
- 教職課程専門委員
- 教員免許更新講習実施部会委員
- 高知県看護協会保健師・助産師・看護師等実習指導者講習会講師：「看護研究」について

■領域活動

- 第 72 回高知県養護教員後期研究協議大会講師
- 学生のボランティア活動参画への支援：高知市教育委員会主催の「学習チューター」参加への支援

■研究論文

【著書】

1) 瓜生浩子，池添志乃：家族看護学－家族のエンパワーメントを支えるケア，中野綾美，瓜生浩子編，　2 章　家族の病気体験を理解する，36-54，株式会社メディカ出版，東京，2020

2) 池添志乃，野嶋佐由美：家族看護学ー家族のエンパワーメントを支えるケア，中野綾美，瓜生浩子編，4 章　家族への看護アプローチ　1　家族のセルフケアの支援，76-86，株式会社メディカ出版，東京 2020

【論文】

1) 田井雅子・池添志乃・瓜生浩子他：被災した家族に現れる家族の境界の様相ー災害後における家族レジリエンスを促す看護援助の実践からー，高知女子大学看護学会誌，45(1)，37-47，2019
2) 源田美香，瓜生浩子，長戸和子，池添志乃：先天性の心臓病のある子どもと共に生きる家族の対処行動，高知女子大学看護学会誌，45(1)，85-95，2019
3) 池添志乃，瓜生浩子，田井雅子他：災害後における家族レジリエンスを促す「立ち上がる力を発揮できるように導く看護アプローチ」，高知女子大学看護学会誌，45(2)，27-36，2020
4) 瓜生浩子，池添志乃，畠山卓也他：被災した家族が経験する苦悩と“苦悩の連鎖が止まるように導く”看護アプローチ、高知女子大学看護学会誌，45(2)，37-48，2020
5) 中野靖子，池添志乃：発達障害をもつ子供を支える学校・専門機関との連携における養護教諭のわざ．高知女子大学看護学会誌，45(3)，59-71，2021
6) 井口光希，奥田愛梨，加藤愛理，竹村麻里，谷口七海，塩見理香，池添志乃：脳血管障害をもつ療養者とともに生活する介護者の折り合い，高知女子大学看護学会誌，45(3)，96-104，2021

【学会発表】

1) 松村晶子、池添志乃：注意欠陥多動性障害（ADHD）の学童期の子どもの「安心」を支える養護教諭のかかわり，第 51 回中国・四国学校保健学会，22Suppl，2019
2) 中野靖子、池添志乃：発達障害をもつ子供を支える学校・医療・専門機関等との連携における養護教諭のわざ～捉え、伝え、チーム支援の輪を広げ、繋がりのねじれを調整する～，第 51 回中国・四国学校保健学会，48Suppl，2019
3) 池添志乃，高谷恭子，山﨑麗子他：在宅における子どもの命に向き合う子どもと親のエンド・オブ・ライフを支える看護ケア，第 25 回日本在宅ケア学会，2020
4) 佐東美緒、高谷恭子、田之頭恵里、有田直子、池添志乃他：NICU に入院した子どもとその親が最善の生を生きることを支える看護援助，日本小児看護学会第 30 回学術集会，2020
5) 塩見理香，井口光希，奥田愛梨，加藤愛理，竹村麻里，谷口七海，池添志乃：脳血管障害をもつ療養者とともに生活する介護者の折り合い，第 25 回日本在宅ケア学会，2020
6) 畠山典子，佐東美緒，森本典子，池添志乃他：生活習慣病予防健診を受診した小中学生の保健行動に関する認識～健診直後と健診 3 か月後の生活に関するアンケート分析から～，第 25 回日本在宅ケア学会，2020

内田　雅子（教授）

■審議会や学会活動

- 平成 31 年度日本慢性看護学会評議員
- 平成 31 年度日本慢性看護学会専任査読委員
  所属学会等：日本慢性看護学会、日本看護科学学会、日本看護管理学会、
  日本赤十字看護学会、日本透析医学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部教授会委員
- 看護学研究科委員会委員
- 看護学部総務委員会委員
- 高知県立大学 FD 委員会委員長（大学院委員）
- 看護学部 FD 委員会委員長
- 高知県立大学学生委員会（大学院委員）
- 看護学研究科学生委員
- 看護学部学生委員会委員
- 看護学部 3 回生学年担当
- 地域連携部会委員（大学院）
- 高知医療センター包括連携看護部会教育委員会
- 基金事業委員
- 高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業責任者

■領域活動

- 高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業　血管病調整看護師育成研修会

■非常勤講師等

- 公益社団法人香川県看護協会看護研修センター講師「事例研究とは、事例研究のすすめ方」
- 第 25 回高知県難病セミナー　パネルディスカッション　パネリスト「膠原病患者の日常生活」.
- KUTV番組　解説者「キケン！ハッケン！血管病～日本一の健康長寿件を目指して～」
- 高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業　血管病調整看護師育成研修会　講師
- 高知県立大学健康長寿センター寄附講座 中山間地域等訪問看護師育成講座 訪問看護スタートアップ研修講師「慢性疾患をもつ在宅療養者の看護」
- 高知赤十字病院「3 年目研修ケースレポート」コンサルテーション
- こうち難病相談支援センター 専門相談員

■著書及び研究論文

【研究論文】

1） 篠岡初音，山陰風里，坊寺真梨子，近藤早紀，福原寛絵，高樽由美，内田雅子：外来化学療法を受ける高齢がん患者が折り合いをつけていくプロセス．高知女子大学看護学会誌，45（1），163-173，2019年.

2） 山中智尋，杉田綾乃，溝渕千帆，山本麻衣，高樽由美，内田雅子：慢性心不全をもつ高齢者が

セルフモニタリングを形成していくプロセス．高知女子大学看護学会誌44（1），156-165，2018年

【学会発表】

1） 内田雅子，古賀明美，山中福子，高樽由美，田村美和，永渕美樹，藤井純子：交流集会「ＳＤＧｓ時代の地域医療における慢性看護実践」．第13回日本慢性看護学会学術集会，神戸市，2019年.

2） 内田雅子，東めぐみ，木下幸代，小長谷百絵，森田夏実，段ノ上秀雄，長谷佳子，河口てる子，黒江ゆり子，伊波早苗，山本真矢：交流集会「慢性看護実践における事例研究法」．第13回日本慢性看護学会学術集会，神戸市，2019年.

3） 内田雅子：特別講演「事例研究法の意義と可能性」．日本看護研究学会第24回九州・沖縄地方会学術集会，大分市，2019年.

瓜生　浩子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本看護科学学会　代議員
- 日本家族看護学会　評議員
- 日本家族看護学会　教育促進委員会委員
- 日本家族看護学会　学会誌専任査読者
- 高知女子大学看護学会　学会誌査読委員
- 日本専門看護師協議会　日本CNS看護学会誌専任査読者
- 高次脳機能障害リハビリテーション講習会2020高知　実行委員

所属学会等：日本家族看護学会、日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、
日本災害看護学会、日本医療教授システム学会、
日本看護シミュレーションラーニング学会、NPO法人脳損傷友の会高知 青い空

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部教務委員長としての活動
- 総合情報センター図書館委員会委員（副委員長）としての活動
- 総合情報センター運営委員会委員としての活動
- 総合情報センター・図書館改革委員会委員としての活動
- 看護学部カリキュラム検討プロジェクトチームのリーダーとしての活動
- 高知医療センターと高知県立大学との包括的連携看護・社会福祉連携部会委員、部会事務局としての活動
- 看護学部シミュレーション教育プロジェクトチームのサブリーダーとしての活動

■領域活動

＜家族看護学領域＞

- 大学院家族看護学領域修了生を対象としたリカレント教育を 5 回開催
- 大学院家族看護学領域修了生を対象としたアンケート調査を実施

＜基礎看護学領域＞

- 「4 年間で習得する概念」「基本的な看護技術」の習得状況調査を実施

■非常勤講師等

- 愛知県立大学大学院看護学研究科　「家族看護援助論」非常勤講師
- 関西医科大学大学院看護学研究科　「家族看護学」非常勤講師
- 高知県看護協会　保健師助産師看護師等実習指導者講習会「看護過程」講師
- 熊本大学医学部附属病院　看護部研修「家族看護」講師
- 高知県介護支援専門員連絡協議会主催　介護支援専門員研修「介護支援専門員として家族の中にどうかかわっていくか」講師
- 日本家族看護学会　教育促進委員会主催「家族看護セミナー」「第 27 回学術集会での委員会企画」「家族看護教育について検討するネットワークづくり」の企画・運営
- 高次脳機能障害リハビリテーション講習会 2020 高知「高次脳機能障害者の安全基地をつくろう」の講演演者・シンポジウム司会
- 田野町の介護支援専門員との事例検討会の開催

■著書及び研究論文

【著書】

1） 中野綾美,瓜生浩子編集：家族看護学　家族のエンパワーメントを支えるケア,瓜生浩子,池添志乃：第 2 章 家族の病気体験を理解する,p36-54,メディカ出版,東京,2020

【論文】

1） 石元美知子,和田寿美,瓜生浩子：高次脳機能障害をもつ当事者の視点からみた社会適応,高知リハビリテーション専門職大学紀要,1 巻,p9-15,2020
2） 池添志乃,田井雅子,中村由美子,中山洋子,畠山卓也,坂元綾,瓜生浩子,中野綾美,大川貴子,中平洋子,森下幸子,野嶋佐由美：災害後における家族レジリエンスを促す"立ち上がる力を発揮できるように導く"看護アプローチ,高知女子大学看護学会誌,45(2),p27-36,2020
3） 瓜生浩子,畠山卓也,中野綾美,中山洋子,中平洋子,坂元綾,池添志乃,田井雅子,大川貴子,中村由美子,森下幸子,野嶋佐由美：被災した家族が経験する苦悩と"苦悩の連鎖が止まるように導く"看護アプローチ,高知女子大学看護学会誌,45(2),p37-48,2020

【学会発表】

1） 瓜生浩子,和田寿美,石元美知子：高次脳機能障害の当事者・家族のための女子会参加がもたらす効果,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知(Web),2020 年 6 月
2） 岩田明日香,瓜生浩子：胎児異常を告知された家族が告知から出産までの過程で形成する家族コミットメント,日本家族看護学会第 27 回学術集会,名古屋(Web),2020 年 9 月
3） 松石由美子,長戸和子,瓜生浩子,池添志乃：集中治療室で関わりが難しいと感じる家族に関わる看護者の体験,日本家族看護学会第 27 回学術集会,名古屋(Web),2020 年 9 月

神原　咲子(大学院教授)

■審議会や学会活動

- 防災学術連携体　委員
- 日本災害看護学会英文査読委員
- 日本災害看護学会国際交流委員
- 日本災害看護学会第20回学術大会企画委員
- 日本公衆衛生学会　健康危機モニタリンググループ委員
- Health Emergency and Disaster Nursing 査読委員
- 高知市南海トラフ地震長期浸水対策連絡会アドバイザー
- 土佐町総合計画審議会委員　有識者委員
- 高知県　水防協議会 委員
- 高知市　総合計画審議会委員
- 日本看護科学学会　和文査読委員
- 日本災害看護学会　理事
- 高知県　避難路における液状化対策検討会
- 日本国際保健医療学会　代議員
- 高知大学海洋コア総合研究センター　評議員
- 公衆衛生学会　健康危機モニタリンググループ委員
- 高知男女参画共同センター　女性防災プロジェクトコーディネーター
- 日本学術会議防災学術連携体　連携委員
- 日本災害看護学会　英文査読委員
- 高知県　南海トラフ地震長期浸水対策連絡会アドバイザー
- Health Emergency and Disaster Nursing　査読委員
- 日本災害看護学会誌　査読委員
- 土佐市　災害時要支援者支援連絡協議会
- Health Emergency and Disaster Nursing Reviewer
- 日本学術会議 連携会員
- （一社）次世代基盤政策研究所
- （一社）EpiNurse
- インドネシア・ウダヤナ大学
- 疫学班 公衆衛生班，JICA国際緊急援助隊・感染症対策チーム
- 高度自然言語処理プラットフォーム 研究開発運営委員会

所属学会等：日本公衆衛生学会、日本健康学会、地域安全学会、日本看護科学学会、日本災害看護学会、日本災害医学会、日本国際保健医療学会，地区防災計画学会

■大学・看護学部企画活動

- 国際交流委員会
- DNGL教育課程連絡協議会委員

■領域活動

- 看護学研究科　国際化の推進
- ネパールでの災害看護普及・教育活動
- 倉敷市真備町における災害対応復興支援活動を行った。
- 南海トラフ対策課と連携した啓発活動

- 高知市防災政策課と共同し、女性防災の具体的なマニュアルを検討
- 高知大学医学部公衆衛生学教室とのグローバルヘルスに関する研究会の開催
- 防災製品開発 WG セミナー
  要配慮者の避難所、分散避難　マッピングアプローチ
- まちケアワークショップ
  ホテル避難体験、ローリングストック(3 日分チョイス体験)
- こうち減災女子部
  プロジェクトベースドラーニング

■非常勤講師等

- グローバル社会と災害看護 放送大学総合防災論 (名古屋大学)
- 兵庫県防災リーダー養成講座講師
- 高知女性防災リーダー養成講座講師, 助言・指導
- データクレイドル　暮らしに備える　まちケアワークショップ講師
- 四国隣保館連絡協議会　災害研修会　災害の多様性と備え講師
- 高知県知的障害者福祉協会　ＷＥＢ職員研修　災害時に必要な多様な支援講師
- 高知県工業振興課　防災製品開発ＷＧ（避難所関連）セミナー講師
- 香南市　避難所における新型コロナウイルス等感染症対応講師

■著書及び研究論文

【著書】

1) 災害看護　心得ておきたい基本的な知識　共著　平成30年12月　南山堂　神原咲子（担当:分担執筆, 範囲:避難所におけるパブリックヘルス、国際看護）
2) Das, Sangita, Shaw, Rajib, Kanbara, Sakiko Disaster during a pandemic: Lessons from 2020 flooding in South Japan　2021年1月
3) CHURCH WORLD SERVICE JAPAN (CWS JAPAN)　Dwinantoaji H, Kanbara S, Widyasamratri H, Karmilah M　Community-Based Climate Change Adaptation Strategies in Primary Health Care (PHC): A Case Study of Semarang, Indonesia.
   2020年5月　Springer International Publishing

【論文】

1) Ngatu Rogers, Sakiko Kanbara, Malaria rapid diagnostic test (HRP2/pLDH) positivity, incidence, care accessibility and impact of community WASH Action programme in DR Congo: mixed method study involving 625 households, Malaria Journal 20(1) ,2021 年 12 月
2) コロナ禍からみる災害対策　河川 895 12-16　2021 年 3 月
3) Hastoro Dwinantoaji, Sakiko Kanbara, Mari Kinoshita, Satoru Yamada, Hasti Widyasamratri, Mila Karmilah：Factors Related to Intentions Among Community Health Cadres to Participate in Flood Disaster Risk Reduction in Semarang, Indonesia.,European Journal of Molecular & Clinical Medicine 7(10) 1046-1063　2021 年
4) Ebi, K.L, Harris, F, Sioen, G.B, Wannous, C, Anyamba, A, Bi, P, Boeckmann, M, Bowen, K, Cissé, G, Dasgupta, P, Dida, G.O, Gasparatos, A, Gatzweiler, F, Javadi, F, Kanbara, S, Kone, B, Maycock, B, Morse, A, Murakami, T, Mustapha, A, Pongsiri, M, Suzán, G, Watanabe, C, Capon, A,Transdisciplinary Research Priorities for Human and Planetary Health in the Context of the 2030 Agenda for Sustainable Development,International Journal of Environmental Research and Public Health 17(23) 8890　2020 年 11 月
5) Hiranya Sritart, Hiroyuki Miyazaki, Sakiko Kanbara, Takashi Hara：Methodology and Application of Spatial Vulnerability Assessment for Evacuation Shelters in Disaster

PlanningSustainability 12(8)　2020 年 9 月

6) 古屋好美, 中瀬克己, 武村真治, 長谷川学, 冨尾淳, 片岡克己, 佐藤修一, 永田 高志, 久保達彦, 小坂健, 寺谷俊康, 和田耕治, 久保慶祐, 神原咲子、わが国における健康危機管理の実務の現状と課題 67(8) 493-500　2020 年 8 月

7) 新型感染症との共存 災害避難と感染症対策　生活と環境 65(4) 9-12　2020 年 7 月

【講演】

- Webinar Nursing Science Researcher Society of Malaysia　Disaster Nursing and Rethinking Primary Health Care on COVID-19
- 名古屋大学防災アカデミー　災害と看護のいま
- Health Emergency and Disaster Nursing セミナー　これからの災害看護に必要な研究課題
- 第 40 回日本看護科学学会学術集会　災害復興に実装される看護科学
- 6 th International Research Conference of World Society of Disaster Nursing　Nurses on the Frontline of COVID-19
- 第 11 回 日本プライマリケア連合学会学術大会 平時の産官学連携によるプライマリヘルスケアの創出「まちケアコモンズ」
- The International Online Conference to Address Water-related DRR under the COVID-19 Pandemic　Role of Science and Technology to Cope with Challenges on Water, Disaster, and COVID-19”
- 次世代基盤政策研究所（NFI）　緊急シンポジウム　ポストコロナ時代の災害に次世代基盤政策が果たす役割
- International Web-Discussion between Universitas Islam Sultan Agung and University of Kochi　COVID-19 in Public Health and Spatial Planning Perspective
- 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会　災害多発時代における多様な個からの総力戦
- マスメディア・行政と大学研究者による地震防災懇話会(Network for Saving Life)　COVID-19 流行と水害と避難所対応 看護の視点から,日本災害情報学会第 34 回勉強会 「新型コロナウイルスを踏まえた水害時の避難・避難所等に係る課題」

久保田　聡美(教授)

■審議会や学会活動

- 入院機能に応じた看護職員配置に関する調査検討委員会（日本看護協会）
- 日本看護管理学会　評議員（社員)、査読委員
- 日本クリニカルパス学会　評議員、査読委員、資格認定委員会副委員長、学術・出版委員
- 日本禁煙学会特任理事、査読委員、資格制度委員会委員、ナース委員会委員

所属学会：日本看護科学学会、日本看護管理護学会、日本災害看護学会、日本看護学教育学会、日本看護倫理学会、日本クリニカルパス学会、日本禁煙学会、日本公衆衛生学会、日本キャリアデザイン学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿センター運営委員　リーダー
- 地域教育研究センター地域連携部会委員（看護学部）
- 看護学部学生委員会　委員　2 回生学年担当
- 日本在宅ケア学会企画委員
- 健康長寿センター事業：基金事業「退院院支援体制推進事業」プロジェクトメンバー

■領域活動

＜看護管理学領域＞

- 看護管理学領域大学院生へのゼミ（抄読会）を毎週火曜日に定期開催

■非常勤講師等

- 愛媛県立医療技術大学　大学院　非常勤講師「看護管理特論」
- 京都大学大学院人間健康科学専攻非常勤講師「慢性看護学特論Ⅵ・大学院」
- 看護師のキャリア支援：ひとり一人のキャリアと組織の折り合いに向かい合う、香川県立病院
- 女性職場のマネジメントについて～問題の捉え方の再考から問題解決方法を考える～、静岡医療クラークの会
- 大分県看護協会　認定看護管理者ファーストレベル教育課程「ヘルスケアシステム論」講師
- 愛知県看護協会　認定看護管理者サードレベル教育課程　看護経営者論　「管理者の倫理的意思決定」
- 名大病院看護管理者研修セカンドレベル教育課程　人材管理Ⅱ　多職種チームのマネジメント　「人財を活かすマネジメント」
- 大阪府看護協会　認定看護管理者教育課程：サードレベル医療の質と組織のあり方～第三者評価システムの目的を再考する～
- 兵庫県看護協会認定看護管理者教育課程：セカンドレベル「人材管理Ⅱ」ストレスマネジメント・タイムマネジメント
- 特定保健指導従事者育成研修会「あなた自身と大切な人を護るお話～新型タバコの最新情報を踏まえて～ 」（高知県 健康政策部 健康長寿政策課事業）

■その他　社会貢献

- 日本医療機能評価機構　看護領域サーベイヤー　合計 3 回実施
- タバコフリー高知　代表世話人：歯っぴいスマイルフェア等

- 社会福祉法人　筆山保育園　理事（外部理事）

■著書及び研究論文

【論文】

1) 久保田聰美；最先端の消化器外科クリニカルパス「看護師からみたクリニカルパスの有用性と改善点」、臨床雑誌外科、南江堂、83（1）、50-54、2021
2) 西上 あゆみ、山崎達枝、久保田聰美；日本の病院看護部の災害への備え意識の基礎的研究、日本看護科学会誌、40、529-536、2020

【学会発表】

1) 小林美亜、久保田聰美（オーガナイザー）：パネルディスカッション4「『クリニカルパスにおける看護記録～看護記録の目的を達成するために～』第20回日本クリニカルパス学会学術集会、2020
2) 今田光一、岡本泰岳、勝尾信一、久保田聰美、井上忠夫、町田二郎：学会20周年記念シンポジウム、第20回日本クリニカルパス学会学術集会、2020
3) 瀬在泉、久保田聡美、今野郁子他：「こんな時どうする？失敗事例は宝箱」、第14回日本禁煙学会学術集会、2020
4) 山本晴美、瀬在泉、加藤千洋、久保田聰美他：「看護職によるCOVID-19相談業務と動機づけ面接の活用」、第40回看護科学学会学術集会、2020
5) 内川洋子、山田覚、久保田聰美：看護管理実習における学生の実習の評価と学習、日本看護教育学会第30回学術集会、2020
6) 寺尾香里、久保田聰美、山田覚：病棟看護管理システムの運用におけるインテグレーションの構造と課題：看護スタッフの視点から、第24回日本看護管理学会、2020
7) 岡野直人、久保田聰美、山田覚：臨床における看護師のレジリエントな行動～影響する要因に焦点を当てて～、第24回日本看護管理学会、2020
8) 寺尾香里、久保田聰美、山田覚：個人要因が病棟看護管理システムの運用におけるインテグレーションに及ぼす影響ー看護スタッフを対象とした調査結果からー、第58回日本医療・病院管理学会学術集会
9) 岡野直人、久保田聰美、山田覚：臨床における看護師のレジリエントな行動の構造、第15回医療の質・安全学会学術集会、2020
10) 寺尾香里、久保田聰美、山田覚：病棟看護管理システムの運用においてインテグレーションが看護サービスに及ぼす影響：看護スタッフの視点から、第40回日本看護科学学会、2020
11) 岡野直人、久保田聰美、山田覚：臨床における看護師のレジリエントな行動～評価指標「安全の充足度」に着目して～、第40回日本看護科学学会、2020

田井　雅子（教授）

■審議会や学会活動

- 日本精神保健看護学会査読委員
- 日本精神保健看護学会学術連携委員会委員
- 高知女子大学看護学会査読委員
- 日本精神科看護協会学術集会誌査読委員

所属学会：日本精神保健看護学会、日本看護科学学会、日本看護倫理学会、
高知女子大学看護学会、日本災害看護学会、日本家族看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部学生委員会委員
- 博士前期課程教務委員
- 看護学部総務委員会委員
- 4 回生学年担当
- カリキュラム検討チーム
- 訪問看護実践開発寄附講座スタートアップ研修講師
- 高知医療センター包括連携　新人看護師研修講師

■領域活動

- 看護相談室の企画・運営（精神看護専門看護師の会との共催　ケース検討会）

■非常勤講師等

- 高知県看護協会　保健師助産師看護師等実習指導者講習会講師「精神看護学」

■著書及び研究論文

【著書】

1) 家族看護学　家族のエンパワーメントを支えるケア　第3章家族と援助関係を形成する,p56-74,メディカ出版, 大阪,2020

【論文】

1) 池添志乃,田井雅子,中村由美子,中山洋子,畠山卓也,坂元綾,瓜生浩子,中野綾美,大川貴子,中平洋子,森下幸子,野嶋佐由美:災害後における家族レジリエンスを促す"立ち上がる力を発揮できるように導く"看護アプローチ, 高知女子大学看護学会誌45(2),27-36,2020
2) 瓜生浩子,畠山卓也,中野綾美,中山洋子,坂元綾,池添志乃,田井雅子,大川貴子,中村由美子,森下幸子,野嶋佐由美：被災した家族が経験する苦悩と"苦悩の連鎖が止まるように導く"看護アプローチ, 高知女子大学看護学会誌45(2),37-48,2020

竹崎　久美子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本老年看護学会　評議委員（平成18年度～）
- 所属学会等：日本看護科学学会、日本老年看護学会、日本老年医学学会、日本老年社会科学学会、日本災害看護学会、

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部総務委員会（平成 28 年度～）
- 看護学部入試実施委員（平成 28 年度～）
- 入試実施センター部会委員（平成 28 年度～）
- 高知県立大学看護学部災害看護プロジェクト／高知県災害看護支援ネットワーク検討会メンバー（平成 16 年度～）
- 文科省職業実践力育成プログラム（ＢＰ）『多職種連携による保健福祉医療従事者の力量アップのための講座』（本学履修証明プログラム）プログラム責任者・講師

  （R2 年度未開講）

  ① 高齢者のフィジカルアセスメント
  ② 認知症患者と家族への支援
  ③ チームアプローチⅡ
- 高知県立大学地域教育研究センター　リモート公開講座「豊かな暮らしにつながる学び」第 4 回 感染症と人々の暮らし（令和 3 年 2 月 24 日）
- 高知県立大学健康長寿センター「訪問看護スタートアップ研修」、認知症を持つ人の在宅看護、（令和 2 年 7 月 29 日・11 月 18 日）
- 高知医療センター包括的連携事業、「高齢者ケア１」（令和 2 年 6 月 25 日）
- 高知医療センター包括的連携事業、「高齢者ケア２」（令和 2 年 11 月 11 日）
- 高知県看護協会主催継続教育活動支援
  ① 実習指導者講習会「老人看護学」講義（平成17年度～）
  ② 『地域災害支援ナース育成研修』（平成25年度～）
  ③ 『災害支援ナース「受援ガイドライン」』研修（令和元年度～）
  ④ 災害看護委員会、委員（平成24-29年度，令和元年度～）

■領域活動

- 「老人看護ケア検討会」：令和２年度は新型コロナウィルス感染症のため、未開催。

■非常勤講師等

- 高知学園短期大学（学部クラス 4 コマ）（令和 2 年 10 月）：災害看護について
- 高知県立高知追手前高等学校：追手前ゼミナール（出張講義）「看護学を学ぶということ」、令和 2 年 11 月 14 日
- 令和２年度　須崎福祉保健所管内災害時要配慮者対策担当者会、講演「災害時要配慮者と避難所環境～さまざまな要配慮者に必要な避難所環境とは～」、令和 3 年 1 月 21 日

■著書及び研究論文

1） 竹崎久美子、坂元綾、塩見理香、西内舞里、原田圭子、福田敏秀：南海トラフ地震に備えた福祉エリア設営ガイドラインの開発、高知県立大学紀要看護学部編、23-32、2021.

2） 小原（武島）弘子、明神拓也、木村義孝、竹崎久美子：日本における身体抑制に関する看護研究の動向:テキストマイニングを用いた論文表題の分析、高知県立大学紀要看護学部編、vol.70、53-62 、2021.

森本　悦子(教授)

■審議会や活動報告

- 高知女子大学看護学会　編集委員長
- 千葉看護学会　編集委員
- 日本がん看護学会、千葉看護学会、高知女子大学看護学会　査読委員
- 高知県看護協会　臨床指導者講習会検討委員
- がんプロフェッショナルプラン総合評価委員会内部評価委員、がん専門看護師 WG 委員

所属学会等：日本がん看護学会、日本看護科学学会、日本看護管理学会、緩和医療学会、高知女子大学看護学会、千葉看護学会、日本老年看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 学生委員会　委員
- 総合情報センター情報処理施設委員会　委員
- 看護学部学生委員会　委員長、1 回生学年担当
- 国家試験対策委員長
- 看護研究倫理審査委員会　委員
- 看護学部シミュレーション教育プロジェクトチーム
- がんプロフェッショナルプラン　プロジェクトメンバー

■領域活動

- 修士論文の投稿支援
- がんプロフェッショナルプラン（APN コース、インテンシブⅡ）における企画・運営

■非常勤講師等

- がんプロフェッショナルプラン　APN コース　管理・運営
- がんプロフェッショナルプラン　インテンシィブコースⅡ　管理・運営
- 市立池田病院（大阪府）看護部専門看護委員会　アドバイザー
- 高知県看護協会　臨床指導者臨床指導者研修　講師
- 静岡県立静岡がんセンター　認定看護教育課程　非常勤講師（がん看護学総論）

■著書及び研究論文

【論文】

1) 佐藤まゆみ，片岡純，佐藤禮子，森本悦子，高山京子，阿部恭子，塩原由美子，大内美穂子：外来通院がん患者が主体性を発揮して生活することを支援するために外来看護師が重要と考える看護実践，医療看護研究 25 ，p34-46 ，2020
2) 小松美帆，森本悦子，藤田佐和 ：頭頚部がんの手術を受け機能障害を抱えた高齢者が日常生活に適応していく力，高知女子大学会誌，45（2），p49-56，2020
3) 石橋みゆき，森本悦子，小山裕子： 地域の一般病院に通院する後期高齢がん患者と家族の療養生活上の困難と取組 ―複合的な外来看護支援モデルの構築に向けて― ，日本老年看護会誌 25（1），p113-122，2020

【学会発表】

1) 松山円，森本悦子，藤田佐和：外来化学療法を継続して受ける再発・転移がん患者の心理的体験，第 35 回日本がん看護学会学術集会，神戸，令和 3 年 2 月
2) 竹内奈々恵，森本悦子，藤田佐和：中山間地域における終末期がん患者の在宅移行支援を行う看護師の困難と対処，第 35 回日本がん看護学会学術集会，神戸，令和 3 年 2 月
3) 島田美華，藤田佐和，森本悦子：造血器腫瘍患者のエンパワーメントを支える退院支援，第 35 回日本がん看護学会学術集会，神戸，令和 3 年 2 月
4) 佐藤まゆみ，片岡純，高山京子，大内美穂子，西脇可織，森本悦子，佐藤禮子，阿部恭子：外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のための外来看護師育成プログラム:有用性及び施設での運用可能性の評価，第 35 回日本がん看護学会学術集会，神戸，令和 3 年 2 月

山田　覚(教授)

■審議会や学会活動

- 日本災害看護学会理事、代議員、査読委員
- 日本災害看護学会編集委員会委員、委員長
- 日本看護管理学会評議員、編集委員会委員、査読委員
- 日本看護科学学会代議員、査読委員
- 日本医療・病院管理学会評議員、査読委員
- 高知市防災会議幹事会委員
- 高知市防災会議委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本看護管理学会、日本災害看護学会、
日本災害医学会、日本救急看護学会、日本医療・病院管理学会、
日本経営工学会、日本人間工学会、日本看護学教育学会

■大学・看護学部企画活動

- 大学災害対策プロジェクト長
- 高知県災害看護支援ネットワーク会議代表
- 看護学部総務委員としての活動

■領域活動

- 災害看護支援ネットワーク活動のリーダー役割

■著書及び研究論文

【論文】

1) Hastoro Dwinantoaji, Sakiko Kanbara, Mari Kinoshita, Satoru Yamada, Hasti Widyasamratri, Mila Karmilah: Factors Related to Intentions Among Community Health Cadres to Participate in Flood Disaster Risk Reduction in Semarang,Indonesia、European Journal of Molecular & Clinical Medicine、2020、 7(10)、1,046―1,063
2) 山田　覚、木下真里: 災害時の医療材料の需要と供給　～シミュレーション実験を通した一考察～、高知県立大学紀要　看護学部編、2021、70、11-21

【学会発表】

1) 寺尾香里、久保田聰美、山田覚: 病棟看護管理システムの運用におけるインテグレーションの構造と課題: 看護スタッフの視点から、第 24 回日本看護管理学会学術集会、web、令和 2 年 8 月
2) 岡野直人、山田覚、久保田聰美: 看護管理実習における学生の実習目標の評価と学び、第 24 回日本看護管理学会学術集会、web、令和 2 年 8 月
3) 内川洋子、山田覚、久保田聰美: 臨床における看護師のレジリエントな行動　-影響する要因に焦点を当てて-、第 30 回日本看護教育学会学術集会、web、令和 2 年 9 月
4) 山田覚: 災害時の医療材料の需要と供給　～シミュレーション実験を通した担当者の意思決定～、第 22 回日本災害看護学会年次大会、web、令和 2 年 9 月
5) 寺尾香里、久保田聰美、山田覚: 個人要因が病棟看護管理システムの運用におけるインテグレーションに及ぼす影響　-看護スタッフを対象とした調査結果から-、第 58 回日本医療・病院管理学会学術集会、web、令和 2 年 10 月

6) 岡野直人、山田覚、久保田聰美: 臨床における看護師のレジリエントな行動の構造、第 15 回医療の質・安全学会学術集会、web、令和 2 年 11 月
7) 寺尾香里、久保田聰美、山田覚: 看護管理システムの運用においてインテグレーションが看護サービスに及ぼす影響: 看護スタッフの視点、第 40 回日本看護科学学会学術集会、web、令和 2 年 12 月
8) 岡野直人、久保田聰美、山田覚: 臨床における看護師のレジリエントな行動　～評価指標「安全の充足度」に着目して～、第 40 回日本看護科学学会学術集会、web、令和 2 年 12 月

内川　洋子（准教授）

■審議会や活動報告

- 日本看護管理学会　査読員
- 高知女子大学看護学会　査読委員
- 高知県看護教育研究会　企画委員
- 日本看護学会「看護管理」論文選考委員

■大学・看護学部企画活動

- 人権委員会委員（全学）/看護学部人権委員
- 大学院学生委員（サブ）
- 親交会
- 高知医療センター包括連携看護部会委員
- 高知医療センター包括連携災害対策連携部会委員
- カリキュラム検討チーム
- 高知県看護教育研究会企画委員

■領域活動

- 看護管理学領域ケア検討会、リカレント教育

■非常勤講師等

- 日本看護協会神戸研修センター　「主任が行うチームマネジメント」研修講師
- 高知県看護協会　保健師・助産師・看護師等実習指導者講習会「看護過程における援助論」講師
- 高知医療センター包括連携事業　「グループマネジメント」研修講師

■著書及び研究論文

【学会発表】

1）内川洋子、山田覚、久保田聰美：看護管理実習における学生の学習と実習目標の評価、日本看護学教育学会第 30 回学術集会、2020

2）白岩美咲、大城美優、神岡由季、野里姫佳、馬場智子、内川洋子：入院中の高齢者の生活に関する意思決定支援、日本看護研究学会中国四国地方会第 33 回学術集会、2020

渡邊　聡子（教授）

■審議会や学会活動

- 高知女子大学看護学会　学会誌査読委員
- 徳島大学　The Joural of Nursing Investidation 査読委員
- 日本災害看護学会　代議員
- 日本看護協会　予備代議員

所属学会：日本看護科学学会・日本災害看護学会・日本母性看護学会・高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護研究倫理審査委員会委員
- 看護学部学生委員会　委員　3 回生学年担当
- 看護学部国際交流プロジェクト
  プロジェクトメンバー
  ガジャマダ大学との共同研究チームリーダー
- 大学院入試監査委員
- 看護学研究科委員会委員
- 高知医療センター包括連携災害対策連携部会メンバー
- 戦略的研究推進プロジェクト「新型コロナウイルス禍における人々の健康維持に向けたケア方略」（テーマ 3）代表者

■非常勤講師等

- 兵庫県立大学大学院看護学研究科「災害看護対象論」講師
- 高知県看護協会　新人助産師合同研修プログラム講師
- 高知県看護協会　保健師助産師看護師実習指導者講習会「母性看護」講師
- JICA 青年研修　大洋州（混成）／地域保健医療実施管理コース講師

■著書及び研究論文

【論文】

1) 渡邊聡子（2020）:妊婦を対象にした災害への備え教育プログラムの効果検証,日本看護科学学会誌，40，224－234.
2) 渡邊聡子,藤井愛海,小澤若菜,中山洋子,南裕子（2020）：インドネシアで開発された「健康のための災害リスク管理」に関する指標の適用可能性の検討,日本災害看護学会誌，22(2) , 75－87.

川上　理子（准教授）

■審議会や学会活動

- 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会事務局長・企画委員長
  所属学会等：日本看護科学学会、日本在宅ケア学会、日本医療マネジメント学会、
  日本家族看護学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 高知県立大学国際交流センター運営委員会委員
- 看護研究倫理審査専門委員会委員
- 保健師国家試験対策委員
- 高知県立大学看護学部同窓会会計
- 健康長寿センター事業（高知県医療政策課からの受託）
  「退院支援体制推進事業」企画、運営
- 健康長寿センター事業（高知県障害保健福祉課からの受託）
  「介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修（特定の者）」運営、研修講師
- 健康長寿センター事業―中山間地域訪問看護師養成講座
  「在宅人工呼吸器装着者のケア」「難病患者の家族ケア」研修講師
- 看護学部国際交流プロジェクトリーダー

■領域活動

- 在宅看護領域看護相談室（事例検討会）開催→COVID-19 により開催中止

■非常勤講師等

- 土佐市民病院卒後 3 年目研修　研究指導

■著書及び研究論文

【学会発表】

1) 永野智絵，國本夏也子，岡田真美，花井優実，川上理子：年期脳血管疾患患者の在宅移行期におけるストレスコーピング～仕事に対するストレスコーピングに焦点を当てて～，第 25 回日本在宅ケア学会学術集会，2020,6
2) 竹中英利子，川上理子，森下安子：慢性腎臓病患者の在宅療養を支える外来看護　多職種連携の視点から，第 25 回日本在宅ケア学会学術集会，2020,6
3) 廣見静香，岡本唯奈，岡田佳乃，富樫拓子，山本真央，川上理子：介護者の身体介護に対する自己効力感と先行要因の関連，第 25 回日本在宅ケア学会学術集会，2020,6
4) 岡本唯奈，岡田佳乃，富樫拓子，廣見静香，山本真央，川上理子：介護者の自己効力感と健康状態の関連，第 25 回日本在宅ケア学会学術集会，2020,6
5) 福留千代,，川上理子他 4 名：入院時スクリーニング（総合評価票）の活用を促進する教育プログラムの開発，第 50 回日本看護学会（在宅看護）学術集会，2019,9

【論文】

1) 川上理子,小原弘子,森下安子：A 市における地域病院協働型退院支援システムの構築，高知女子大学看護学会誌，45-1，56-64，2019.6

2) 竹中英利子.川上理子.森下安子：慢性腎臓病患者の在宅療養を支える外来看護，高知女子大学看護学会誌，45-1，75-84，2019.6
3) 森下幸子，野村陽子，森下安子，川上理子，小原弘子，池田光徳：中山間地域等の新任・新卒訪問看護師育成のための「訪問看護師スタートアップ研修」の評価，高知県立大学紀要（看護学部編），68，25-39，2019
4) 井上 和江・ 田鍋 まみ子・ 石元 有弓・今橋 千穂・川上 理子：地域包括ケア病棟における患者家族が在宅移行期に感じる不安，日本看護学会論文集，49， 23-26，2019.02

木下　真里（准教授）

■審議会や学会活動

- COVID-19 流行に際しては、感染症専門家として学内外で対策への助言および研究活動を行った。学外では、高知県、宮城県等複数の自治体に対して自然災害発生時の感染症対策、学内では、防災プロジェクト、感染者・濃厚接触者発生時の対応、実習マニュアルの改訂等についてである。さらに、令和 2 年末には教職員有志による学生支援活動コロナサポート（ころサポ）を組織した。その他の活動
- 名古屋市立大学実務家教員 TEEP 実施委員（令和元年～）
- WADEM22 実行委員
- HEDN 編集委員
- 日本公衆衛生学会 MR 健康危機管理チーム
- 日米教育委員会フルブライト 21 選考委員

■大学・看護学部企画活動

- 第 7 回学術交流サロン（令和 3 年 1 月 13 日）
- 看護学部 FAQ プロジェクト（令和 3 年 1 月～）
- COVID-19 特別講義（看護学研究科、看護学部全学生対象）（令和 2 年 6 月～7 月）

■領域活動

- 災害支援ネットワーク会議講師（令和 3 年 2 月 2 日）
- 減災シリーズ第一回講師（令和 2 年 12 月 10 日）
- 第二回ケア検討会講師（令和 2 年 12 月 18 日）

■非常勤講師等

- 兵庫県立大学非常勤講師（令和 2 年 10 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日）
- JICA 青年研修講師（令和 2 年 12 月 8 日）
- 日本プライマリ・ケア連合学会ウェブワークショップ講師（令和 2 年 11 月 22 日）
- 高知医療センター第 7 回認定看護師・専門看護師実践発表会基調講演講師（令和 2 年 12 月 5 日）
- 令和 2 年度高知県市町村保健衛生職員協議会保健師部会支部研修会講師（令和 2 年 9 月 1 日）

■著書及び研究論文

【著書】

1）　共著. 災害時の外国人患者への対応.外国人患者受け入れマニュアル.看護展望.9 月臨時増刊号. メヂカルフレンド社. Pp.50-55. (2020)

【論文】（学術論文・査読あり）

1）　M Kinoshita, M Shikida. Measuring Personal Damage in a Large-Scale Disaster: A Review of the Reports Published by the Japanese Fire and Disaster Management Agency on the Great East Japan Earthquake and Tsunami. Disaster Medicine and Public Health Preparedness. (2021) (in press)

2）　山田覚, 木下真里. 災害時の医療材料の需要と供給　～シミュレーション実験を通した一考

察.高知県立大学紀要 看護学部編第 70 巻.(2021)

3) M Kinoshita. Role of private pharmacies in a rural community in Nepal - A review of findings from a public health consultation visit held in November 2019. 高知女子大学看護学会誌 2020;46 巻 1 号 116-123. (2020)

4) H Dwinantoaji, S Kanbara, M Kinoshita, et al. Factors Related to Intentions Among Community Health Cadres to Participate in Flood Disaster Risk Reduction in Semarang, Indonesia. European Journal of Molecular & Clinical Medicine, 2020, Volume 7, Issue 10, Pages 1046-1063. (2020)

【学会発表】

1) C Takada, Y Takeuchi, M Kinoshita, M Shikida. Preliminary Evaluation of Information Sharing in COACHES. S1.4. 5TH IFIP CONFERENCE ON INFORMATION TECHNOLOGY IN DISASTER RISK REDUCTION ITDRR 2020, Sophia (Online) (2020)

2) C Takada, Y Takeuchi, M Kinoshita, M Shikida. Development of a Web Service to Support the Community Oriented Approaches for Comprehensive Healthcare in Emergency Situations. iSAI iSAI-NLP-AIoT2020-0168, Bangkok (Online). (2020)

3) 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会シンポジウムⅡ座長

佐東　美緒（准教授）

■審議会や学会活動

- 日本小児看護学会査読委員
- 高知女子大学看護学会査読員
- 高知県立大学看護学部紀要査読員
- 第25回日本在宅ケア学会学術集会実行委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本小児看護学会、日本小児保健学会、日本家族看護学会、日本災害看護学会、日本子ども虐待防止学会、高知女子大学看護学会、日本看護シミュレーションラーニング学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部看護学科2回生学年担当、学生委員
- 入学試験監査委員（修士・博士）
- 総務事務
- 看護学部シミュレーション教育プロジェクトチームとしての活動
- 看護学部遠隔授業推進プロジェクトのリーダーとしての活動
- 土佐市プロジェクト（とさっ子健診リーダー）としての活動
- カリキュラム検討討プロジェクトワーキンググループとしての活動
- 土佐市共同研究　土佐っ子健診の指導内容の検討
- オンライン講演会「看護実践能力を高めるオンラインでの学びを支援する～インストラクショナルデザインの活用～」開催（シミュレーション教育PJと共催）

■領域活動

- 高知医療センターとの包括連携事業（小児看護学領域）
- 高知新聞社　高知の子育て応援ウェブメディア「ココハレ」への記事掲載

■非常勤講師等

- 令和 2 年度子育て支援員（専門研修（地域保育コース））講師
- 令和 2 年度高知県医療的ケア児等支援者・医療的ケア児等コーディネーター養成研修講師

■著書及び研究論文

【論文】

1) 永井真寿美,佐東美緒,藤代知美,長戸和子：高知県における妊娠・出産・育児期にある精神障害をもつ女性と家族への看護援助,高知女子大学学会誌第 46 巻 2 号(R3 年 6 月末発刊投稿中)

【学会発表】

1) 畠山典子,佐東美緒,森本典子,池添志乃,池田光徳：生活習慣病予防健診を受診した小中学生の保健行動に関する認識～健診直後と健診 3 か月後の生活に関するアンケート分析から～,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知, 2020 年 6 月
2) 佐東美緒,畠山典子,森本典子,池添志乃,荒牧礼子,井上正隆,池田光徳：生活習慣病予防健診に参加した子どもの健診データの年次比較-平成 24 年度と平成 29 年度の変化-,第 25 回日本在宅

ケア学会学術集会,高知, 2020 年 6 月

3) 池添志乃、高谷恭子、山﨑麗子、田之頭恵里、佐東美緒、有田直子、森下安子、中村由美子、田村恵美、中野綾美 : 子どもの命に向き合う子どもと親のエンドオブライフへの看護援助～在宅での支援に焦点をあてて～,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知, 2020 年 6 月
4) 荒尾七海、曽我明日香、萩尾咲菜、原内あすか、藤森眞琴、佐東美緒 : 思春期の子どもの保健行動,日本小児看護学会第 30 回学術集会,兵庫, 2020 年 9 月
5) 佐東美緒、高谷恭子、田之頭恵里、有田直子、池添志乃、中村由美子、鍬田晃子、笹山睦美、田村恵美、山﨑麗子、三浦由紀子、中野綾美 : NICU に入院した子どもとその親が最善の生を生きることを支える看護援助,日本小児看護学会第 30 回学術集会, ,兵庫, 2020 年 9 月
6) 永井真寿美、佐東美緒、藤代知美、長戸和子 : 医療者が捉える精神障害をもつ女性の妊娠・出産・育児体験の特性とニーズ,日本家族看護学会第 27 回学術集会,愛知, 2020 年 9 月
7) 佐東美緒、永井真寿美、藤代知美、長戸和子 : 妊娠・分娩・産褥・育児期の精神障害をもつ女性と家族への医療者の支援,第 40 回日本看護科学学会学術集会, 2020 年 12 月

嶋岡　暢希（准教授）

■審議会や学会活動

- 高知県母性衛生学会理事
- 高知女子大学看護学会査読委員
- 高知県看護協会　助産師職能委員
- 高知県看護協会　推薦委員

所属学会：日本母性衛生学会・日本助産学会・日本看護科学学会・日本災害看護学会・
高知女子大学看護学会・日本母性看護学会・日本家族看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 全学FD委員会委員、看護学部FD委員
- 看護学部臨床実習委員
- 高知医療センター包括連携看護部会委員
- 看護学部学生委員（4回生学年担当）
- 助産師国家試験対策委員

■非常勤講師等

- 高知県看護協会　新人助産師合同研修「周産期医療の動向」「職業倫理」講師
- 高知県看護協会　新人助産師合同研修　交流会運営
- 高大連携事業　高知県立安芸高校出前講座「子どもを産み育てることと看護」

■著書及び研究論文

【研究論文】

1）　嶋岡暢希・中野綾美・野嶋佐由美：乳児期の子どもを育てる親のMastery-構成要素と関連因子の探索-，高知女子大学看護学会誌、46(1)、15-30　（2020）

高谷　恭子（准教授）

■審議会や学会活動

- 令和２年度　日本小児看護学会倫理員会委員
- 令和２年度　日本小児看護学会誌専任査読員
- 令和２年度 「こども救急ダイヤル」協議会委員
- 令和２年度　高知女子大学看護学会査読員
- 令和２年度　日本看護学会　在宅看護論文査読員

所属学会等：日本看護科学学会、日本小児看護学会、日本家族看護学会、日本看護協会、日本小児循環器学会、日本小児がん看護学会、日本災害看護学会、日本学校保健学会、日本小児集中治療研究会、日本小児保健学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 令和２年度　入試実施委員（学部）
- 令和２年度　研究環境促進委員
- 令和２年度　紀要委員（全学）
- 令和２年度　看護開発研究会委員
- 令和２年度　看護研究指導教員
- 令和２年度　学部国際交流委員：エルムズ大学大学院との交流チームメンバー
- 令和２年度　高知医療センター包括連携事業（学内委員：小児看護学領域）

■領域活動

- 修士論文の学会発表支援
- 小児看護学領域修了生の会の活動
- 地域連携包括事業高知医療センター共催企画「赤ちゃん同窓会」
- 高知医療センター包括連携事業　シミュレーション勉強会

■非常勤講師等

- 令和２年度　高知県看護協会「保健師助産師看護師など実習指導者講習会」において「小児看護学」の講義を担当。
- 令和２年度　埼玉県立小児医療センター「家族看護Ⅲ」研修を担当。
- 令和２年度　四国こどもとおとなの医療センター　非常勤講師として４グループの「看護研究指導」を担当。

■著書及び研究論文

【著書】

1) 中野綾美(編著),田中克枝,益守かづき,上野昌江,高谷恭子,佐東美緒,幸松美智子,勝田仁美,二宮啓子,平林優子,川島美保,岡田洋子,染谷奈々子,日沼千尋,宗村弥生,鈴木千衣,三宅一代,品川陽子,萩原綾子,濵田裕子,濱田米紀,有田直子,石浦光世,加藤依子,長谷部貴子,三浦由紀子：ナーシング・グラフィカ小児看護学　１章５節(p.57-73),3 章２節 2-7(p.195-221) 3 章８節(p.277-287),4 章１節(p.310-319),資料 3(p.408-409),2020
2) 中野綾美(編著),石浦光世,佐東美緒,萩原綾子,染谷奈々子,濱田米紀,有田直子,幸松美智子,高谷恭子：ナーシング・グラフィカ小児看護学 小児看護技術,10 章(p.246-258),メディカ出版,2020

3) 中野綾美,瓜生浩子（編著）, 高谷恭子,山口桂子,池添志乃,田井雅子,畠山卓也,野嶋佐由美,服部淳子,長戸和子,中平洋子,加藤智子,田村恵美,長冨美知子,関根光枝,源田美香,則村良,大川貴子：家族看護学　家族のエンパワーメントを支えるケア　1 章 1 節(p.10-16),2 節 4 項(p.30-33),2020

【論文,報告書】

1) 永井友里,高谷恭子,中野綾美：学童期に新たな経管栄養法を必要とした重症心身障がい児を育む母親のベネフィット・ファインディング,高知女子大学看護学会誌,45(2),p.69-77,2020
2) 安岡優,井上仁美,上原まりの,水島愛菜,西村美早姫,高谷恭子：障がいのある子どもの主体性を高める親の取り組み,高知女子大学看護学会誌,46(1),p.85-94,2020
3) 高谷恭子：腎移植を受けて生きる思春期の子どもの体験,日本小児腎不全学会雑誌,40巻,p.328-330,2020

【学会発表：口演】

なし

【学会発表：示説】

1) 佐東美緒,高谷恭子,田之頭恵里,有田直子,池添志乃,中村由美子,鍬田晃子,笹山睦美,田村恵美,山﨑麗子,三浦由紀子,中野綾美：NICU に入院した子どもとその親が最善の生を生きることを支える看護援助,日本小児看護学会第 30 回学術集会抄録,p188,2020 年 9 月
2) 池添志乃,高谷恭子,山﨑麗子,田之頭恵里,佐東美緒,有田直子,森下安子,中村由美子,田村恵美,中野綾美：子どもの命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護援助 在宅での支援に焦点をあてて,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集,p.98,2019 年 6 月

藤代　知美（准教授）

■審議会や学会活動

- 日本精神保健看護学会査読委員
- 高知女子大学看護学会査読委員

所属学会等：日本看護科学学会,日本看護教育学会,日本精神保健看護学会,日本精神障害者リハビリテーション学会,日本地域看護学会,日本家族看護学会,高知女子大学看護学会,千葉看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 大学院人権委員／看護学部人権委員会委員長
- FD 委員
- 臨床実習委員
- 入学試験監査委員
- COVID-19　看護学部 FAQ プロジェクトメンバー
- 訪問看護実践開発寄付講座スタートアップ研修講師

■領域活動

- 看護相談室の企画・運営（精神看護専門看護師の会との共催,ケース検討会）

■非常勤講師等

- 高知県看護協会　臨床指導者研修　講師

■著書及び研究論文

【学会発表】

1) 永井真寿美,佐東美緒,藤代知美,長戸和子：医療者が捉える精神障害をもつ女性の妊娠・出産・育児体験の特性とニーズ，日本家族看護学会第 27 回学術集会，Web 開催，令和 2 年 9 月
2) 佐東美緒,永井真寿美,藤代知美,長戸和子：妊娠・分娩・産褥・育児期の精神障害をもつ女性と家族への医療者の支援，第 40 回日本看護科学学会学術集会，Web 開催，令和 2 年 12 月

有田　直子(講師)

■審議会や学会活動

- 日本小児看護学会編集委員会委員
- 日本看護協会慢性期看護論文選考委員
- 日本小児がん看護学会査読者
- 高知女子大学看護学会査読委員
- 日本小児看護学会評議員
- 「医療的ケア児および重度の障がいのある子どもの支援検討会」委員(高知市)

所属学会等：日本看護科学学会、日本小児看護学会、日本家族看護学会、日本小児がん看護学会、日本緩和医療学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 学生委員会(4回生学年担当)
- 看護学部広報委員(オープンキャンパスなど)
- 高知医療センター　高知県立大学包括連携事業（研究支援）
- 令和２年度訪問看護スタートアップ研修講師(「医療的ケアを必要とする小児の在宅看護」)

■領域活動

- 小児看護学領域特別講義の企画・運営
- 修了生の CNS 認定申請への支援

■非常勤講師等

- 高知県保健師助産師看護師実習指導者講習会講師(「看護倫理」)
- 徳島文理大学大学院看護学研究科非常勤講師（「コンサルテーション論」）
- 令和２年度がん教育外部講師派遣事業　高知県立山田特別支援学校高等部

■著書及び研究論文

【論文】

1) 有田直子,藤田佐和,門田麻里,庄司麻美,森本悦子(2021)：「がん高度実践看護師コース AYA 世代がん患者のケアとキュア」における看護介入モデルの作成を取り入れた教育効果, 高知県立大学紀要看護学部編,70 巻,33-42.

【その他著書】

2) 有田直子(2020)：臨床の専門看護師と連携・協働した実習における教育方法の工夫,小児看護,43(6),664-668.

井上　正隆（講師）

■審議会や学会活動

所属学会等：日本看護科学学会、クリティカルケア看護学会、日本災害看護学会、
日本医療教授システム学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 情報処理部会員
- 看護学部広報委員
- 高知医療センター、高知県立大学スキルズラボ運営委員会：高知医療センターとの包括連携の一環として本委員会に参加した。
- 高知医療センター、高知県立大学 SP 研究会：高知医療センターとの包括連携の一環として本研究会に参加した。
- 法人災害プロジェクトメンバー、医療センター包括連携災害対策連携部会で、高知医療センターの担当者とともに災害時の協力体制について検討し、合同災害訓練を企画,運営した。訓練に向けて教職員対象の災害研修会の企画と開催、訓練の反省事項を検討し、軽症者受け入れガイドライン修正
- シミュレーション教育プロジェクトメンバー

■領域活動

- クリティカルケア看護領域看護相談室活動として、クリティカルケア看護のケア検討会の企画運営に参加した。

■著書及び研究論文

【研究論文】

1）井上正隆,田中雅美,森本紗磨美,岡林志穂,大川宣容：救急外来看護師が行う悲嘆ケアの実態調査，高知女子大学看護学会誌，45（2），89-98，2020

【その他】

1）川野結子、和田早織、宮島功、井上正隆 西本陽央、林悟：くも膜下出血患者における Stress index（SI）と Alb 値との関連，第 46 回脳卒中学会学術集会，2021.3

小澤　若菜（講師）

■審議会や学会活動

- 高知県人材育成ガイドライン評価検討会委員
- 高知県看護協会保健師職能委員及びナースセンター委員
- 高知県看護協会三能生きる力を育むいのちの教育委員
- 国民健康保険団体連合会保健事業支援評価委員
- 黒潮町健康増進計画・食育推進計画運営審議会メンバー

所属学会等：日本看護科学学会、日本地域看護学会、日本公衆衛生看護学会、
日本災害看護学会、日本公衆衛生学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 学生委員会３回生学年担当及びキャリア支援委員
- 総合情報センター図書館委員（学部）担当
- 学部災害看護活動推進委員担当
- 学部保健師国家試験対策委員担当
- カリキュラム検討委員チーム
- 進学ガイダンス：土佐女子高等学校出前講座

■非常勤講師等

- 高知大学医学部看護学科 「地域援助論」 講師
- 高知産業保健総合支援センター相談員

■領域活動

- 高知県新任保健師支援プログラムの企画実施、研修会への支援
- 高知県人材育成ガイドラインの評価、新任期保健師支援プログラム　講師
- 高知県幡多福祉保健所新任期保健師研修会フォローアップ研修 講師
- 高知県幡多福祉保健所地域保健福祉活動報告会 講師
- 高知県看護協会　保健師助産師看護師等実習指導者講習会 講師
- 高知産業保健推進センターでの相談業務及び研修会の講師
- 高知県国保連合会保健事業支援・評価委員会の委員活動及び助言
- 高知県看護協会３職能合同研修会の企画・運営
- 高知県看護協会看護フェアの運営
- 中国四国ブロック保健師等研修会（書面開催）講師

■著書及び研究論文

【論文】

1) 野中美希,井筒迅,伊藤万由美,金子朋子,西山日菜,小澤若菜：脳血管障害者にとってのピアサポートの捉え，高知女子大学看護学会誌,45(2),130-138,2020
2) 渡邊聡子,藤井愛海,小澤若菜,中山洋子,南裕子: インドネシアで開発された『健康のための災害リスク管理』に関する指標の適用可能性の検討,日本災害看護学会誌, 22(2), 75-87, 2020

小原　弘子（講師）

■審議会や学会活動

- 日本看護シミュレーションラーニング学会研修企画委員
- 第25回日本在宅ケア学会学術集会企画委員
- 高知女子大学看護学会査読委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本褥瘡学会、日本医療教授システム学会、日本在宅ケア学会、日本看護シミュレーションラーニング学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿センター運営委員会委員
  - おうちで健康長寿体験型セミナー Presented by 高知県立大学健康長寿センター「転倒予防について」第1回「転倒予防に向けた運動の重要性」、第2回「準備体操とクールダウンの重要性」講師
  - おうちで健康長寿体験型セミナー Presented by 高知県立大学健康長寿センター「肺炎を予防しよう」企画・全体統括、第1回「高齢者における肺炎予防の重要性」第2回「肺炎を予防するために重要なこと」講師
- 土佐市地域ケア会議プロジェクトメンバー
  - 土佐市地域ケア会議看護アドバイザー（1回/2カ月）
- 遠隔授業推進プロジェクトメンバー
  - 看護学部教員および全学年の学生に対し、遠隔授業についてのアンケート調査を実施
- 令和 2 年度高知県中山間地域等訪問看護師育成講座講師にて以下を担当

  フィジカルアセスメント、急変時対応

  新卒フォローアップ・フィジカルアセスメント

  2 年目フォローアップ・フィジカルアセスメント
- 看護学部国際交流プロジェクトメンバー

■領域活動

- 老人看護学領域の活動（各領域の活動参照）

■非常勤講師等

- 令和 2 年度独立行政法人国立病院機構中国四国グループ内退院調整看護師育成研修会、「入退院調整の振り返りと課題の明確化」講師
- 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、「教育講演Ⅰ　保健医療福祉研究におけるテキストマイニングの活用」座長
- 令和 2 年度高知県介護支援専門員更新研修/専門研修課程Ⅱ、「ケアマネジメントにおける実践事例の研究および発表－家族への視点が必要な事例」講師
- 令和 2 年高知市介護支援専門員連絡協議会研修「家族介護者の理解に関するケアマネジメント研修会」講師
- 日本医療教授システム学会医療 ID・実践事例研究会、事例提供者
- 出前講座（高知県立山田高等学校）、「看護を学ぶということ/看護の仕事」、講師

■著書及び研究論文

【学会発表】

1) 小原弘子、平山司樹、伊藤悠人、宮部祐輔、西村聡二、西塔依久美：在宅医療に関わる医療専門職を対象としたフィジカルアセスメント研修、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020 年 6 月 27 日、高知市.
2) 山脇光、野島剛、小原弘子、盛實篤史、大麻康之、山口雅子、北村聡子、川渕洋志、徳重和也、森下幸子：訪問看護師ステーションスタッフにおける BLS 研修のニーズ、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020 年 6 月 27 日、高知市.
3) 平山司樹、西塔依久美、西村聡二、伊藤悠人、宮部祐輔、小原弘子：在宅医療に関わる医療専門職を対象としたフィジカルアセスメント研修：臨床で学びがどのように活かされているのか、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020 年 6 月 27 日、高知市.
4) 森下幸子、万代康弘、大川宣容、小原弘子、源田美香、竹中英利子、森下安子、池田光徳：新卒訪問看護師の力を引き出すシミュレーション研修の評価、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020 年 6 月 27 日、高知市.

【学術論文】

1) 小原（武島）弘子、明神拓也、木村義孝、竹崎久美子：日本における身体抑制に関する看護研究の動向：テキストマイニングを用いた論文表題の分析（印刷中）.
2) 岩目崇史、小原弘子、森澤美季子、川口和也：高齢患者への服薬自己管理に向けた病棟看護師の関わり、日本看護学会論文集-慢性期看護、50、pp.38-41、2020.
3) 西村聡二、宮部祐輔、小原弘子、伊藤悠人、西塔依久美、平山司樹：救急医療と在宅医療をつなぐ多職種連携　救急医療と在宅医療の他職種協働『高知県若手在宅コメディカルの会』の取り組み、日本臨床救急医学会雑誌、23（3）、365、2020.

山中　福子（講師）

■審議会や学会活動

所属学会等：日本看護科学学会、日本災害看護学会、日本看護研究学会、日本看護学教育学会高知女子大学看護学会、日本慢性看護学会、日本循環器看護学会　日本心臓リハビリテーション学会

■大学・看護学部企画活動

- 学生委員会（1 回生学年担当）
- 紀要委員
- 看護学部予算執行委員
- 基金事業：退院支援事業
- 健康長寿：糖尿病保健指導連携体制構築事業
- 高知県立大学看護学部同窓会書記

■領域活動

- 地域、専門職に対する貢献

1) 専門職人材育成事業として、次の委託事業の運営活動などを行う。
2) 委託事業である糖尿病保健指導連携体制構築事業（健康長寿センター）においてモデル基幹病院 5 施設、および２年目の２施設に対して血管病調整看護師の育成に向けた研修・府サポートを実施。
3) 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の「慢性疾患をもつ在宅療養者の看護」の科目において、講義および演習での学習支援を実施。
4) 令和 2 年度リカレント教育「血管病調整看護師が取り組む糖尿病重症化予防」の運営、ファシリテーターを実施。

■著者及び研究論文

【学術論文】

1) 田村美和、山中福子、園田由美、内田雅子：高知県の生活習慣病重症化プロセスにおける社会的決定要因の影響、高知女子大学看護学会誌、46（1）、1-10、2021.

【学会発表】

1) 山中福子、下元理恵、久保亨、片田秦椰、津村早保、宮地昌文、前田貴之、川田敬、山崎真由美、高原優、長山真紀、馬場裕一、濵田知幸、眞茅みゆき、北岡裕章：高知県における在宅心不全管理についての実態－疾病管理における困難経験－、 第 84 回日本循環器学会学術集会、2020.
2) 下元理恵、久保亨、片田秦椰、津村早保、宮地昌文、前田貴之、川田敬、山崎真由美、高原優、長山真紀、馬場裕一、濵田知幸、山中福子、眞茅みゆき、北岡裕章：人高知県における在宅心不全管理についての実態－提供されている医療情報の満足度と提供してほしい医療情報－、第 84 回日本循環器学会学術集会、2020..

岩﨑　順子（助教）

■審議会や学会活動

- 令和２年度　高知女子大学看護学会　書記
- 令和２年度　高知女子大学看護学会　査読委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本母性衛生学会、高知女子大看護学会、
日本助産学会、家族看護学会、思春期学会、日本周産期・新生児医学会、
日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 令和2年度　看護学部自己点検委員
- 令和2年度　助産師国家試験対策委員
- 令和2年度　高知県内の卒業生キャリア支援プロジェクト

■著書及び研究論文

【学会発表】

1) 岩崎 順子、野嶋 佐由美：Maternal Confidence を育む看護介入プログラムの実施・評価、高知女子大学看護学会誌、45(1)、P65-74、2019
2) 嶋岡 暢希、西内 舞里、永井 真寿美、岩崎 順子、幸崎 若菜、渡邊 聡子：高機能シミュレーターを活用した分娩第 1 期の助産看護演習の検討、高知県立大学紀要(看護学部編)、68、p63-68、2019
3) 渡邊 聡子、嶋岡 暢希、岩崎 順子、永井 真寿美、西内 舞里：「災害に備えるための教育プログラム」を受講した A 県の産科医療施設に勤務する看護職の災害への備え行動の変化、高知女子大学看護学会誌、45(1)、P108-120、2019

川本　美香（助教）

■審議会や学会活動

- 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会実行委員
- 高知女子大学看護学会会名簿管理係
  所属学会等：日本看護科学学会、日本地域看護学会、日本公衆衛生看護学会、
  日本災害看護学会、高知女子大学看護学会、日本公衆衛生学会
- 高知県保健師人材育成ガイドライン評価検討会委員
- 高知市三里地域包括支援センター全戸訪問事業アドバイザー
- 高知市鏡・土佐山地域ブロードバンド利活用協議会委員

■大学・看護学部企画活動

- 高知県災害看護支援ネットワーク検討会メンバー
- 高知県立大学法人災害対策プロジェクト学外連携部会委員
- 立志社中実行委員会委員「いけいけサロン活動」担当
- 看護学部広報委員会（大学院担当）
- 高知県立大学看護学部同窓会庶務
- オーテピア高知図書館・高知県立大学連携企画「医療衛生と地域・身体をめぐる50冊―木村哲也の世界を手がかりに―」（高知県立大学戦略的研究プロジェクト2020「永国寺キャンパスを拠点とした地域文化資源の保存・整備と利活用に関する実践的研究」研究代表者.飯高伸五.分担者.吉川孝）における書籍展示およびブックガイドの作成協力

■非常勤講師等

- 国立大学法人高知大学医学部看護学科「地域援助論」非常勤講師
- 令和2年度高知県市町村保健衛生職員協議会保健師部会須崎ブロック圏域研修会の企画・運営・評価
- 令和2年度高知市高知県市町村保健衛生職員協議会保健師部会高知市ブロック研修会の企画・運営・評価
- 令和2年度高知県看護協会保健師職能委員会保健指導ミーティングアフターミーティング「みんなで育ち合う職場づくりの醸成を目指して」における研究活動報告：担当テーマ「みんなで育ち合う事例検討~保健師の経験を成長につなぐ方法~についての考え方とその展開」

■領域活動

- 高知県新任期保健師人材育成プログラムの企画実施、研修会実施への支援
- 高知県新任保健師育成OJT担当者会への支援
- 令和2年度中央東福祉保健所管内新任保健師勉強会　講師
- 令和2年度中央西福祉保健所管内新任期保健師研修会　講師
- 高知市内における学生地域ボランティア活動での調整協力

■著書及び研究論文

【学会発表】

1) 川本美香,時長美希：看護での活用に向けた Place Attachment 概念の検討―住民による健康な地域づくりに向けて―,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知市,2020.

【研究論文】

1) 川本美香,時長美希：Place Attachment の概念分析　看護への活用,高知女子大学看護学会誌 45(2),pp15-26,2020.

神家　ひとみ（助教）

■審議会や学会活動

所属学会：日本クリティカルケア看護学会、日本集中治療医学会、高知女子大看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部学生委員会委員(4 回生学年担当)
- 広報委員(看護学部ホームページ担当)

■領域活動

＜家族看護学領域＞
- 家族看護リカレント教育の運営補助
- 家族看護学領域ケア検討会の運営補助

＜基礎看護学領域＞
- 「4 年間で習得する概念」「基本的な看護技術」の習得状況調査実施

源田　美香（助教）

■審議会や学会活動

所属学会：日本看護科学学会、日本家族看護学会、高知女子大学看護学会、日本在宅ケア学会
所属協会：日本看護協会、日本専門看護師協議会

■看護学部企画活動

- 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会　企画委員
- 高知女子大学看護学会　企画委員
- 総務事務
- 看護師国家試験対策委員

■領域活動

- 健康長寿センター事業（高知県障害保健福祉課からの受託）
- 「介護職員等による痰の吸引等の実施のための研修（特定の者）」研修講師

■研究論文

【学会発表】

1) 源田美香,森下幸子,森下安子,池田光徳：訪問看護スタートアップ研修における家族看護の学び－研修後の自己記入式評価の内容分析, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集,p67,2020
2) 森下幸子,万代康弘,大川宣容,小原弘子,源田美香,竹中英利子,森下安子,池田光徳：新卒訪問看護師の力を引き出すシミュレーション,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集,p120,2020
3) 中井美喜子,森下安子,森下幸子,源田美香,廣末ゆか,久保田尚子：中山間過疎地域における看取り体制の構築―アクションリサーチを用いた事例検討会の評価, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集,p73,2020

坂元　綾(助教)

■審議会や学会活動

- 第25回日本在宅ケア学会学術集会実行委員
- 高知女子大学看護学会誌査読委員
- 日本家族看護学会災害対策委員会委員

所属学会：日本家族看護学会、日本看護科学学会、日本看護管理学会、日本医療・病院管理学会、日本災害看護学会、高知女子大学看護学会、日本がん看護学会、日本在宅ケア学会

■大学・看護学部企画活動

- 大学院学務サポーター
- 入学試験実施委員（学部サブ）
- 学部自己点検委員会（事務担当）
- 看護学部／看護学研究科情報処理委員

■領域活動

＜家族看護学領域＞

- 家族看護リカレント教育の企画・運営
- 講義・実習方法について検討

＜基礎看護学領域＞

- 4 回生の卒業時の「4 年間で習得する概念」調査
- 「基本的な看護技術」到達状況調査

■非常勤講師等

- 令和2年度保健師助産師看護師等実習指導者講習会　「家族ケア」講師
- 令和2年度高知県看護協会保健師職能委員会保健指導ミーティングアフターミーティング「みんなで育ち合う職場づくりの醸成を目指して」における話題提供：担当テーマ「みんなで育ち合う事例検討~保健師の経験を成長につなぐ方法~についての考え方とその展開」

■著書及び研究論文

【論文】

1) 池添志乃,瓜生浩子,田井雅子,中野綾美,中村由美子,大川貴子,中山洋子,中平洋子,畠山卓也,森下幸子,坂元綾,野嶋佐由美：災害後における家族レジリエンスを促す“立ち上がる力を発揮できるように導く”看護アプローチ,高知女子大学看護学会誌,第 45 巻第 2 号,27-36,2020,6.
2) 瓜生浩子,池添志乃, 畠山卓也,田井雅子,中野綾美,大川貴子,中山洋子,中平洋子, 中村由美子,森下幸子,坂元綾,野嶋佐由美：被災した家族が経験する苦悩と“苦悩の連鎖が止まるように導く”看護アプローチ, 高知女子大学看護学会誌,第 45 巻第 2 号,37-48,2020,6.
3) 竹崎久美子,坂元綾,塩見理香,西内舞里,原田圭子, 福田敏秀：南海トラフ地震に備えた福祉エリア設営ガイドラインの開発, 高知県公立大学紀要, 第 9 巻(印刷中)

【学会発表】

1) 坂元綾, 瓜生浩子, 森下幸子, 野嶋佐由美：災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル　訪問看護版の作成, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会, 2020. 6.

塩見　理香(助教)

■審議会や学会活動

所属学会：日本看護科学学会、日本精神保健看護学会、高知女子大学看護学会、
日本デイケア学会、日本在宅ケア学会
所属協会：日本看護協会、日本精神科看護協会

■大学・看護学部企画活動

- FD 委員会、臨床実習委員会、しらさぎ会、高知県看護教育研究会

■領域活動

老人看護学領域の活動（各領域の活動参照）

■非常勤講師など

- ケアマネジャー更新（専門）研修【研修過程ⅠおよびⅡ】「認知症に関する事例」
- ケアマネジャー更新（実務未経験）／再研修「基礎理解」「認知症に関わる事例」
- ケアマネジャー実務研修　「基礎理解」「認知症に関わる事例」
- 龍馬看護ふくし専門学校　非常勤講師

■著著及び研究論文

【論文】

1) 井口光希,奥田愛梨,加藤愛理,竹村麻里,谷口七海, 塩見理香,池添志乃：脳血管障害をもつ療養者とともに生活する介護者の折り合い,高知女子大学看護学会誌,46(1),2020.12.

【学会発表】

1) 塩見理香,井口光希,奥田愛梨,加藤愛理,竹村麻里,谷口七海,池添志乃：脳血管障害をもつ患者とともに生活する介護者の折り合い,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,2020.6

庄司　麻美(助教)

■審議会や学会活動

所属学会等：日本看護科学学会，日本がん看護学会，日本緩和医療学会，日本家族看護学会，高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 2 回生学年担当
- 総務事務

■領域活動

- 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　がん高度実践看護師コースの運営
- 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　がん看護インテンシブコースⅠの運営
- 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　がん看護インテンシブコースⅡの運営

■非常勤講師等

- 2020年度高知県中山間地域等訪問看護師育成講座　訪問看護スタートアップ研修「在宅がん緩和ケアの実践」講師
- 令和2年度がん教育外部講師派遣事業　講師
- がん看護インテンシブコースⅠ「高齢がん患者の看護倫理」講師

■著書及び研究論文

【論文】

1) 庄司麻美, 藤田佐和 : 熟練看護師が行う全人的呼吸困難感を体験しているがん患者のアセスメント, 高知女子大学看護学会誌, 45(2), 78-88, 2020.
2) 森本悦子, 藤田佐和, 門田麻里, 庄司麻美 :「高度実践看護師(APN)コース 高齢がん患者の治療とケア」の実施と評価　受講生のニーズに伴うプログラム修正の具体と実施・評価, 高知女子大学看護学会誌, 45(2), 1-8, 2020.
3) 藤田佐和, 門田麻里, 森本悦子, 庄司麻美 :「高齢がん患者に安心をもたらすケアを創造していく訪問看護師育成」　研修のプログラム開発と教育効果, 高知女子大学看護学会誌, 45(2), 9-21, 2020.
4) 有田直子, 藤田佐和, 門田麻里, 庄司麻美, 森本悦子 :「がん高度実践看護師コース AYA 世代がん患者のケアとキュア」における看護介入モデルを活用した教育効果高知県立大学紀要　看護学部編, 2021. 掲載予定

髙橋　真紀子（助教）

■審議会や学会活動

- 高知女子大学看護学会会計
  所属学会等：日本地域看護学会、高知女子大学看護学会
- 高知県保健師人材育成ガイドライン評価検討会委員
- 高知市三里地域包括支援センター全戸訪問事業アドバイザー

■大学・看護学部企画活動

- ボランティア委員
- 健康長寿委員

■領域活動

- 高知県新任期保健師人材育成プログラムの企画実施、研修会実施への支援
- 高知県新任保健師育成OJT担当者会への支援
- 令和2年度須崎保健所管内新任保健師及びプリセプター支援研修会　講師
- 高知県立大学と高知市の連携に関する協定書に基づく新型コロナウイルス感染症に係る専門職の応援派遣として高知市で業務を行う（令和3年1月13日～2月5日）

■著書及び研究論文

【研究論文】

1) 髙橋　真紀子,時長　美希：地域ケア会議における保健師のファシリテーション,高知女子大学看護学会誌45(2),pp57-68,2020.

竹中　英利子（助教）

■審議会や学会活動

- 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会　企画委員
  所属学会等：高知女子大看護学会、日本在宅ケア学会

■大学・看護部企画活動

- 在宅ケア学会学部内委員会
- 高知看護教育研究会　書記
- 健康長寿センター：入退院支援事業プロジェクトメンバー
- 教務サポーター
- シミュレーション教育プロジェクトチームメンバー

■領域活動

- 健康長寿センター:「介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修（特定のもの）」運営、研修講師

■非常勤講師等

- 令和 2 年度高知県介護支援専門員更新研修/研修課程Ⅰ「ケアマネジメントの演習-家族への支援の視点が必要な事例」講師

■著書及び研究論文

【学会発表】

1) 竹中英利子, 川上理子, 森下安子：慢性腎不全患者の在宅療養を支える外来看護－多職種連携の視点から, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会, 2020 年 6 月
2) 村田ゆかり, 宮地広美, 岡田茜, 乾由美, 竹中英利子, 森下安子：入退院支援での地域と病院の連携強化を目指して－地域へのインタビューを通して－, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会, 2020 年 6 月
3) 森下幸子, 万代康弘, 大川宣容, 小原弘子, 源田美香, 竹中英利子, 森下安子, 池田光徳：新卒訪問看護師の力を引き出すシミュレーション研修の評価, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会, 2020 年 6 月

瀧　めぐみ(助教)

■審議会や学会活動

- 高知女子大学看護学会運営委員（広報・渉外委員）
  所属学会：日本看護科学学会、日本精神保健看護学会、高知女子大学看護学会
  所属協会等：日本看護協会、日本精神科看護協会、日本専門看護師協議会、
  心理教育・家族教室ネットワーク

■看護学部企画としての活動

- 総務事務
- 看護学部カリキュラム検討チーム：事務担当

■領域活動

- 看護相談室の企画・運営（精神看護専門看護師の会との共催）

■研究論文

1) 瀧めぐみ, 岩瀬信夫, 小松万喜子：精神科退院前訪問により病棟看護師が捉える患者の生活像の変化、高知女子大学看護学会誌、45（2)、109-119、2020.

田之頭　恵里(助教)

■審議会や学会活動

- 日本小児看護学会の査読委員としての活動
- 日本移植・再生医療看護学会の評議員としての活動

所属学会等：日本小児看護学会、日本小児がん看護学会、日本家族看護学会、
日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、日本公衆衛生学会、
日本移植・再生医療看護学会

■看護学部企画としての活動

- 学生委員会（1回生学年担当）としての活動
- 国際交流プロジェクトメンバーとしての活動
- 教務サポーターとしての活動
- 高知女子大学看護学会運営委員（会計）としての活動
- 土佐市プロジェクト（とさっ子健診）の活動

■非常勤講師等

- 令和2年度 がん教育に関する外部講師派遣事業 講師

■研究論文

【学会発表】

1) 池添志乃,高谷恭子,山﨑麗子,田之頭恵里,佐東美緒,有田直子,森下安子,中村由美子,田村恵美,中野綾美：子どもの命に向き合う子どもと親のエンドオブライフへの看護援助－在宅での支援に焦点をあてて,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,2020 年 7 月
2) 佐東美緒,髙谷恭子,田之頭恵里,有田直子,池添志乃,中村由美子,鍬田晃子,笹山睦美,田村恵美,山﨑麗子,三浦由紀子,中野綾美：NICU に入院した子どもとその親が最善の生を生きることを支える看護援助,日本小児看護学会第 30 回学術集会,2020 年 9 月

中井　あい(助教)

■審議会や学会活動

- 所属学会等：高知女子大学看護学会，日本看護科学学会，日本看護研究学会
  日本医学看護学教育学会，日本老年看護学会，日本保健福祉学会
  日本災害看護学会，日本地域看護学会，日本衛生学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護師国家試験対策委員
- 看護学部国際交流プロジェクトメンバー
- 大学院/学部図書委員
- 環境管理：自己学習室管理

■領域活動

- 領域活動報告書参照

■著書及び研究論文

【論文】

1) 中井あい, 奈良間千之. 新潟市東区における避難所の立地場所の可視化－地理情報システムを用いて－. 新潟大学保健学雑誌, 2021(3);18(1):37-44.
2) 中井あい,齋藤智子.独居高齢者の低栄養状態に関連する食環境アクセシビリティの文献検討. 日本看護科学会誌, 2020;40:54-60.

中井　美喜子（助教）

■審議会や学会活動

所属学会等：日本看護科学学会、日本家族看護学会、高知女子大学会、日本がん看護学会、日本在宅ケア学会

■大学・看護部企画活動

- 3 回生学年担当
- 教務サポート
- 高知県立大学がん看護インテンシブコースⅠ「高齢がん患者の家族と家族ケア」講師
- 土佐市地域連携事業：土佐市地域ケア会議アドバイザー

■領域活動

＜家族看護学領域＞
- 家族看護領域リカレント教育　企画・運営

＜基礎看護学領域＞
- 「4 年間で習得する概念」「基本的な看護技術」の習得状況調査

■非常勤講師

- 鳥取大学医学部附属病院　在宅医療推進のための看護師育成支援事業「家族支援」講師
- 高知県看護協会　臨床指導者講習会「看護過程」講師
- 高知学園短期大学　「家族看護学」講師
- 高知東高校　「家族看護論」講師

■著者及び研究論文

【学会発表】

1）中井美喜子、森下安子、森下幸子、源田美香、廣末ゆか、久保田尚子：中山間過疎地域における看取りケア体制の構築、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会、2020.6

西内　舞里(助教)

■審議会や学会活動

- 令和２年度　高知県看護協会　看護研究倫理審査委員
  所属学会：日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、日本家族看護学会、日本助産学会
  所属協会：日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部シミュレーション教育プロジェクトメンバー
- 看護学部遠隔授業プロジェクトメンバー

■著書及び研究論文

【論文】

1) 竹崎久美子、坂元綾、塩見理香、西内舞里、原田圭子、福田敏秀(2021)：南海トラフ地震に備えた福祉エリア設営ガイドラインの開発，高知県立大学紀要看護学部編　第 70 巻，1－8

藤村　眞紀(助教)

■審議会や学会活動

- 高知女子大学看護学会　編集委員
  所属学会等：日本老年看護学会、千葉看護学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部シミュレーション教育プロジェクトチーム　メンバー
- ボランティア委員
- 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座　訪問看護スタートアップ研修　ファシリテーター

■領域活動

- 令和 2 年度高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業　プロジェクトメンバー
- 慢性期看護領域リカレント教育　運営

■著書及び研究論文

【学会発表】

1) 藤村眞紀, 石橋みゆき, 佐々木ちひろ, 山﨑由利亜, 正木治恵：特別養護老人ホームに入所中の認知症を有する高齢者の家族との面会の有り様, 日本老年看護学会第 25 回学術集会, 2020 年 6 月

益　宏実(助教)

■審議会や学会活動

- 日本CNS学会選挙委員
- 所属学会等：日本看護科学学会、日本慢性看護学会、日本CNS学会、
  高知女子大学看護学会、慢性疾患看護専門看護師研究会

■大学・看護学部企画活動

- 教育環境管理：自己学習室
- 看護協会文書係
- 卒業生キャリア支援プロジェクトメンバーとしての活動
- 健康長寿センター：令和 2 年度糖尿病保健指導連携体制構築事業メンバー、第 3 回血管病調整看護師研修会「面接技法」講師
- 令和 2 年度高知県中山間地域等訪問看護師育成講座「訪問看護スタートアップ研修」「慢性疾患をもつ在宅療養者の看護」のファシリテーター

■領域活動

- 慢性期看護領域リカレント教育の企画、運営

■非常勤講師等

- 徳島文理大学　コンサルテーション論　非常勤講師

森本　紗磨美(助教)

■審議会や学会活動

所属学会：日本看護科学学会，日本がん看護学会、日本クリティカルケア看護学会
高知女子大学看護学会編集委員

■大学・看護学部企画活動

- 高知医療センターとの包括的連携事業
- 大学院学務サポート

■領域活動

- クリティカルケア看護学領域ケア検討会の運営補助
- クリティカルケア看護学領域リカレント教育の運営補助

■非常勤講師

- 龍馬看護ふくし専門学校　非常勤講師

■著書及び研究論文

【研究論文】

1) 大川宣容，井上正隆，森本紗磨美,岡林志穂，田中雅美，西塔依玖美：救急外来看護師による悲嘆ケア:看護師の属性からみた自由記述内容の傾向～自由記述内容のテキストマイニングによる分析～,高知県立大学紀要看護学部編　第70巻　投稿中

森下　幸子(特任准教授)

■審議会や学会活動

- 高知県訪問看護推進協議会 委員
- 高知県人生の最終段階における医療・ケア検討会議 委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本在宅ケア学会、高知女子大看護学会
日本家族看護学会、日本医療マネジメント学会

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿センター運営委員
- 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座「訪問看護スタートアップ研修」専任教員
- 第37回本山町・高知県立大学公開講座講師
- 高校生のための公開講座講師

■領域活動

- 新任・新卒訪問看護スタートアップ研修 修了生フォローアップ研修
- 新任・新卒訪問看護スタートアップ研修　修了生継続コンサルテーション
- 就職ガイダンス（高知県内大学・看護専門学校）

■非常勤講師等

- 公益社団法人日本看護協会 2020 年度インターネット配信研修（オンデマンド）講師
- 独立行政法人国立病院機構高知病院附属看護学校「在宅看護方法論」非常勤講師
- 高知県看護協会在宅ケア領域看護師研修運営委員会・訪問看護 ST 運営委員会委員
- 高知県訪問看護連絡協議会アドバイザー
- 本山町医療と介護連携事業「ACP と看取り」講師　（1/21,2/21）
- 県政出前講座「人生会議と訪問看護のすすめ」講師（1/17）
- 高知県看護協会 訪問看護管理研修会　（1/18）
- 高知医療センター・健康長寿センター第 57 回地域医療連携研修会パネリスト（2/9）
- 田野町家族事例オンライン検討会（7/2）
- 安芸市家族介護教室講師（10/9）

■著書及び研究論文

1) 瓜生浩子,畠山卓也,中野綾美,中山洋子,中平洋子, 坂元綾,池添志乃,田井雅子,大川貴子,中村由美子,森下幸子,野嶋佐由美：被災した家族が経験する苦悩と"苦悩の連鎖が止まるように導く"看護アプローチ,高知女子大学会誌 45 巻 2 号, p 37-48,2020
2) 池添志乃,田井雅子,中村由美子,中山洋子,畠山卓也,坂元綾,瓜生浩子,中野綾美,大川貴子,中平洋子, 森下幸子,野嶋佐由美：災害後における家族レジリエンスを促す"立ち上がる力を発揮できるように導く"看護アプローチ, 高知女子大学会誌 45 巻 2 号, p 27-36,2020

【学会発表】

1) 森下幸子,万代康弘,大川宣容,小原弘子,源田美香,竹中英利子,森下安子,池田光徳：新卒訪問看護師の力を引き出すシミュレーション研修の評価, 第 24 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年
2) 源田美香,森下幸子,森下安子,池田光徳：訪問看護スタートアップ研修における家族看護の学び-研修後の事故記入式評価の内容分析, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年

3) 中井美喜子,森下安子,森下幸子,廣末ゆか：中山間過疎地域における看取り体制の構築-アクションリサーチを用いた事例検討会の評価, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年
4) 坂元綾,瓜生浩子,森下幸子,野嶋佐由美：『災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル』訪問看護版の作成, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年
5) 大久保広美,仙頭智恵,岡林純賀子,乾瑠里子,佐々木康介,森下幸子：中山間地域の看取りを支える訪問看護の役割,第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年
6) 山脇光,野島剛,小原弘子,盛實篤史,大麻康之,山口雅子,北村聡子,川渕洋志,徳重和也,森下幸子：BLS コースの開発, 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年
7) 西本かがり,中居江美,井上加奈子,廣井三紀,森下幸子：高齢者支援センター出張所の相談支援の実態第 1 報～相談支援の実績をもとに地区の現状と課題を把握する～：第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年
8) 中居江美,西本かがり,井上加奈子,廣井三紀,森下幸子：高齢者支援センター出張所の相談支援の実態第 2 報～生活上の課題を抱える高齢者への支援から見える課題：第 25 回日本在宅ケア学会学術集会,高知,令和 2 年

三浦　由紀子（特任助教）

■審議会や学会活動

- 第 25 回日本在宅ケア学会学術集会実行委員
- 高知県看護協会研究学会委員
- 高知県看護協会研究学会　座長
- 高知県看護協会 3 職能生きる力を育むいのちの教育検討委員会委員
- 日本専門看護師協議会選挙管理委員（選挙管理委員長）

所属学会等：高知女子大学看護学会、日本小児看護学会、日本家族看護学会、
日本専門看護師協議会

■大学・看護学部企画活動

- がんプロジェクト
- カリキュラム検討プロジェクト　ワーキンググループ

■非常勤講師等

- 高知県看護協会「事例を通して学ぶ看護倫理」　研修講師　　2020年9月24日（木）

■領域活動

- がんプロ：リカレント教育高度実践看護師（ＡＰＮ）コースⅠ　研修運営
- がんプロ：リカレント教育高度実践看護師（ＡＰＮ）コースⅡ　研修運営
- がんプロ：リカレント教育　インテンシブコースⅠ　研修運営
- がんプロ：リカレント教育　インテンシブコースⅡ　研修運営

■著書及び研究論文

【学会発表】

1）　佐東美緒、高谷恭子、田之頭恵里、有田直子、池添志乃、中村由美子、鍬田晃子、笹山睦美、田村恵美、山﨑麗子、三浦由紀子、中野綾美, NICU に入院した子どもとその親が最善の生を生きることを支える看護援助,日本小児看護学会第 30 回学術集会抄録,神戸市,2020

山本　かよ(特任助教)

■審議会や学会活動

所属学会等：日本在宅ケア学会、高知女子大看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿センター運営委員
- 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座「訪問看護スタートアップ研修」専任教員

■領域活動

- 新任・新卒訪問看護スタートアップ研修 修了生フォローアップ研修
- 新卒1年目フィジカルアセスメント研修（3回／年）
- 新卒2年目フィジカルアセスメント研修（2回／年）
- 新任・新卒訪問看護スタートアップ研修　修了生継続コンサルテーション
- 就職ガイダンス（看護専門学校）